新レーゲスタ創世譚　第三章　『白日の月』

樗 みのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新レーゲスタ創世譚　第三章　『白日の月』

【Ｎコード】
Ｎ２８９２Ｈ

【作者名】
樗　みのり

【あらすじ】
〈狩り人〉に狩られたガーランを探しに、地下空間へ忍び込んだカラとアル。「目的」の為に、自ら虜となったラスター。それぞれが行動を進めていく内に、隠されていた秘密が明らかにされていくが…。※第一章『ふたつの宝』、第二章『聖獣狩り』に続く、第三章です。第二章の終わりから持ち越しで続いている話なので、第二章を読んでいないと、全く訳が分からないと思います。※※話が進むにつれ、流血や死の場面が増えています。極端に残虐な場面はない予定ですが、予め含みおき下さい。※※※第４話以降挿絵を付け

ています。サイズが大きいので、携帯で御覧の方は御注意ください。
更新は、挿絵と同時に月一回を目指したいと思っております。
気長にお付き合い下さい。

序章

―序―

東の地平より生まれし真新しき陽の光は、天地にある全てのものを等しく包みこもうと、緩やかに腕を広げ始めていた。

その黄金の竜は、鱗をしゃらりと震わせ大きく翼を広げると、深い紅玉の眼を細め、己の前に立つ青年の顔を見遣った。

均整の取れた長身を包む白い衣は、これまで辿った艱難を物語るように、処々擦り切れ、傷を負った箇所に限らず、全身に多量の血の跡が見られた。　いずれが青年自身の血で、いずれが他者のものであるかは、色の違いで明らかだった。

青年は、左の眼は潰れ血を流していたが、いま一方の澄んだ緑の眼で、頭上遥かにある、輝く竜の眼をしっかりと見据えていた。

「私は、来た」

曙光の輝きにも負けぬ、希望に満ち澄んだ声で、青年は竜に向かい言った。

竜は、火の粉の混じる息を長く吐き出すと、愉快そうに、ゆったりと低い、大気を震わす声で青年の言葉に応えた。

『エルセリオ。　剣も力も持たず、我が前に立つ、勇気ある人間の王の子よ。　我が炎を放ち、そなたを瞬滅さする可能性。　そなたは考えぬ、と見得るな』

「古き血の一族は誇り高い。　我が先祖と、そなたたち一族の祖が交わした約定を、違える事など、ない」

エルセリオは、その血塗れた姿には不似合いな、穏やかな笑みを端正な顔に浮かべた。
竜は深紅の眼を一度閉じると、ゆるりと開き、改めて青年の姿を映した。

『そなたが参ることは判っておった。　――して、そなたが我に求むるは、何か？』

竜の眼に自分の姿を認め、エルセリオは、竜以上にゆったりとした、鷹揚な態度で言葉を継いだ。

「賢き竜の王よ。　そなたは既に存知おるであろう。　私は、そなたを迎えに来た」

竜の王は眼を細めると、興味深げな声で、人間の王の子に問うた。

『何、と引き換えに、そなたは我を迎える』

エルセリオは、淀みない澄んだ声で答えた。

「《名》を、そなたに――」

こうして、王子エルセリオは、世の始まりより《宝》を守りし竜の王の裔、ナジャルーン＝カイナルを迎えた。

《ティルナ王統紀　王子篇第八章》

＊

青年は手にしていた書物を閉じると、長椅子の脇に置かれた小卓に置いた。　卓上に置かれた燭台の炎に、書の革表紙に金箔された文字が、鈍い光を返した。

『まったく。　どうしてまぁ、こうも美しく飾り立てて伝えるのが好きなのかね。　これは伝記というよりは伝奇だな。　死んだら、私もこんな風に書き残して貰えるのかね。　”麗しの六十四代国王ユリエール。　その花の顔を衆目に曝すのを拒み、勤めを蔑ろにした愚王――。”とかなんとか』

寝所の長椅子に身体を沈めながら、ユリエールはぞんざいな口調で、誰に言うでなく語った。

腰までするりと伸びた、長い黒髪に縁取られた顔は、少女のように優しげで美しく、長く華奢な手足の何気ない動きすら、たいそう優雅に映る。

簡素な前開きの長衣を軽く羽織り、簡単に腰帯で留めただけなので、ユリエールが動く度に、胸元や裾がはだけ、抜けるように白い肌が各所で露わになるが、本人は全く頓着する様子もなく、長椅子の上で姿勢を様々に変える。

「なんてことを仰るのです。　八代様は〈聖竜王〉とも讃えられる御方。　陛下とて、真面目に政務をなされている限りは、聖祖ラウル王の再来と、誰もが賞賛を惜しまぬ英明なお方だというのに、何故こうも、公私で態度が違われるのです。　さあ、まずは陛下。どうか、お召し物をお直しさせて下さいませ。　そのような乱れたお姿、とてもこの聖都の主とは申せませぬ。　お願いでございますから、こちらを、お召し下さいませ」

銀糸の刺繍で飾られた、豪奢な絹衣を捧げながら、遠慮なく苦言を言う老女官の渋い顔を見て、ユリエールは悪戯な目をして笑った。

『”陛下”なんて堅苦しい呼び方は嫌いだよ。ユリエールでいいって、いつも言っているだろう？　そう呼ばないと、お前の言う事は、何も聞きはしないからね』

「そのような恐れ多い事、私共に出来ようはずがございませぬ。ですが、陛下の身の回りのお世話を致すのは、私共の務めにございます。　ですから、どうか、私に勤めを果たさせて下さりませ」

眉を跳ね上げた老女官の赤い顔を見て、ユリエールはため息を吐いて苦笑した。

『私はね、お前達が着せたいような、ごつくて重い服は、どうにも好きになれん。　だいたい、ここは私の私室なのだよ？　私の自由にして何が悪いんだい？　服なんぞ、最低限を隠しておけば、なんだってよいではないか。　それにいっそ、こんなだらけた姿を見せてやったら、皆も、私に親しみが持ち易くなるかもしれないよ？　国王がこんなだと知れたら、この国の堅苦しい印象が、変わるかもしれぬではないか』

愉快そうに話す王に、老女官は眦（まなじり）を上げた。

「とんでもないっ！　ティルナの国王ともあろうお方が、なんて事を仰るのです。　他の都市の長などとは比較にならぬ、貴き御身を、なんと心得ておられるのです。　陛下は――」

『”聖ラウル＝ティルナスの後裔、第六十四代ティルナ王、ユリエール・サーナン・ヴィシュラ＝ユーシス＝ラウル＝ティルナス。

エランの血を引く、〈聖なる一族〉”なのだろう？　わかった、私の負けだ。　――ま、着直すくらいは自分でやれる。　そこの男もいることだし。　だから、その衣を置いて、お前は先に休みなさい。
これは私の命令、だよ』

ユリエールはにこやかに微笑みながら、小卓の脇を指さした。
老女官は一瞬迷った末に、ユリエールの示した男に視線を向けた。
男が僅かに頷いたのを見ると、観念したように男に衣を手渡し、頭を下げ、渋々といった面持ちで退出をした。
ユリエールは、老女官が確実に去ったのを確認すると、大欠伸をし、改めて長椅子にだらしなく寝転がった。

『代々の王も、さぞや肩が凝ったことだろうな。　〈聖都〉の王、〈聖地〉の守護者、〈聖なる神〉の血脈、〈神聖なる精霊王殿〉の大神官――その他諸々。　ティルナの王は、よくもこれだけの〈聖〉の字を負ったものだ。　他都市の長の方が、まだ肩は凝らなそうだ』

この部屋の主であり、ティルナ王国第六十四代国王ユリエールは、はだけて着崩れした長衣を直そうともせず、猫のように身体を伸ばした。
長椅子脇の小卓の傍には、侍従らしき壮年の男が、陰のように立っていた。

『〈聖なる〉ものなぞ、作り上げるのは簡単なことだ。　いわくありげな器に、もったいぶって、隠すように入れておけば、周囲は勝手に、その中身を価値あるものではないかと、憶測する。　それが噂として、巡り巡る内に、憶測は真実のように語られ、いつしか噂が、隠し入れた中身の、真の姿となる。　――しかし、哀れなるかな。　噂が真実となった時、その中身は、器から出る事が叶わなく

なる。　真実となった噂を、真実とし続けるために。　今の私が、良い例だろう？　これが私の、自然体だというのになあ』

ユリエールは腰帯の先を指でつまむと、先に付いた房で、自分の頬を撫で笑った。

「そう――例え、これこそが”私”であっても、皆が”かくあるべき”と思い描く”ティルナの王”と異なれば、あの女官の申すが如く、人々は私に失望するだろう。

思い描く〈聖なる〉ものの姿が、美しくあればある程、人間達は、その落差に失望するのだろう。　失望はいずれ裏切られた、という思いに変わり、その裏切りに、怒りを覚えるようになるだろう。怒りは、いつしか憎しみに変わり、そして　――膨らんだ憎しみの果てにあるものは――ねえ、ラース。　お前は何だと思う？』

ラースと呼ばれた男は、眉間に深い皺を刻み、ユリエールを見据えていたが、問いに対しては何も口にしなかった。

ユリエールは、そんなラースの様子を愉しむように見上げた後、上半身を起こし、金色の瞳に燭台の炎を映し、微笑んだ。

『――なにやら、東の辺りで、動きがありそうなんだって？』

ラースはようやく、求める話が出来る状態になったと判断し、口を開いた。

「〈ウルド〉が、〈信者〉の下に潜んだとのことです。　既に多数の聖獣が、その贄となっているようです」

ユリエールは、一瞬、笑顔を消すと、長椅子の背に両腕をかけ、視線を天井に向けた。

『〈正神聖教〉か。　――はん。　それはまた、鬱陶しいところに転がり込んだものだ。　年が明ければ、八年に一度の〈大祭〉――〈斎王〉が選ばれる年。　まるで、狙い合わせたようだな』

「オリアスの〈闇森〉で、アラスター＝リージェスが、〈ウルド〉の呪を妨げ、深手を負わせたようです。　簡略なものですが、その折の報告が上がってきております」

ラースは、革紐で綴じられた書類の束と老女官の置き土産の衣を、ユリエールに渡した。

ユリエールは衣を長椅子の背に掛けると、パラパラと書類をめくった。

『へぇ？　奴の目に適った〈適合者〉は子供だったってわけだ。で、呪を中途で妨げられた結果、奴自身が深手を負った。　背に腹は変えられず、人間――〈正神聖教〉の手を借りることにした、といったところか。　でかい呪をしくじれば、呪者はかなりの痛手を受けるらしいからな。　それは奴でも、変わらなかったというわけだ。　ま、それじゃなくても、ここ数百年、まっとうに糧を得てなかったろうから、さぞ、弱っていただろうしな』

ユリエールは、書類に再度目を通すと、視線をラースに向けた。

『詳細は書かれていないが、この〈適合者〉。　ひょっとして――例の巫子が、精霊王殿から盗み出した、あれか？』

「そのようですね」

ユリエールは長椅子を立つと、ラースの目の前に立ち、書類をラースの鼻先に突き出した。

『なかなか、面白いことになっているじゃないか。　皮肉――とも言えるがね』

ラースの目を見据えながら、ユリエールは冷ややかな笑いを浮べた。

「如何なさいますか？」

『さて、どうしたものか。　奴は――〈ウルド〉は、その子供が何者かは、気が付いておらぬのだな？』

「恐らくは」

『だろうな。　しかし、《名》と《影》の半分を喰われた〈喰われ人〉の状態が、あまり長くなると危ういな。　影に引かれかねぬ」

「〈鷹〉に命じ、連れ参らせますか？」

ユリエールはしばし考えた後、手にしたままだった腰帯で、ラースの横面を軽く打った。

『いや。　あいつが共にいるのであれば、その必要はなかろう。少なくとも、奴に喰わせはせぬだろうさ。　どのみち、どいつも最終目的地はここ、だ。　ならば、それまでは待ってやろうではないか。　〈鷹〉には、危急でない限りの手出しは無用と伝えよ。　ついでに、あいつに――アラスターに伝言を頼む。　”その子供をくれぐれも、大切に面倒をみろ”と。　あと”次に戻った時に顔を出

さなかったら、私にも考えがある”――とな』

「――御意」

ラースは、頭を下げ退出をした。
一人部屋に残ったユリエールは、窓に寄り満月を見上げた。
地上に在るものは、柔らかな月の光に染められ、淡い白光を纏っているかのように、闇の中に白く浮かび上がって見える。
窓にもたれかかり、月光を浴びているユリエールの黒髪もまた、月明りに染められ、白銀に輝いていた。

『待っているよ――カラ』

序章（後書き）

次回、〈1：対峙〉に続きます。

1：対峙

1：対峙

「これは、ようこそおいで下された。　名高き聖騎士の御尊顔を拝し奉るは、この身に余る光栄。　恐悦至極に存じます。　私は、キトナ大神殿より大神官の名を与えられております、オリ＝オナと申す者」

オリ＝オナは、慇懃な言葉でラスターを迎えた。　外套を剥がれ、後手に手の自由を奪われたラスターは、老人に一瞥もしなかった。

御座の間でも諸賢の間でもない、大神殿最下層にある地下大堂。一切の装飾を排した、ただひたすらに巨大な空間だった。　青みがかった黒の、磨き上げられた艶やかな石床は、水鏡の如く、そこに立つ者の姿を映していた。

静謐なこの空間には、オリ＝オナの持つ手燭の炎以外、全く光はなかった。

「アラスター＝リージェス＝シン＝エラノール殿。　〈方円の騎士団〉最古参の騎士であり、八人しかおらぬ〈聖騎士〉の一人。　そして何より――エランの血を護る〈聖血の器（エラノール）〉。　その身の内に流れるは、神エランの聖血そのもの。　――真に、貴い身だ」

老人は、深く皺の刻まれた顔に、笑みを浮かべた。　長い白髪と白髯に覆われた顔は、厳つく、その目は異様なまでに鋭かった。

若かりし頃は、さぞ周囲に威圧感を与えたであろう大柄な身体は、年老いた現在でも真っ直ぐと伸び、衰えを知らぬようだった。

「実に、麗しいですな。　流石はエランを映したといわれる御姿だ。
いや。　その黄金の髪に天青の瞳は、陽の神ソルギムを映したと、例えるべきですかな。　何れにせよ、神の姿、神の血――。　老いぬ身体、衰えぬ意志。　貴方が、我らが悲願のため御助力下されば、確実なる結果を、齎(もたら)せましょうな」

オリ＝オナは、ラスターの姿を睨めつけるように見た。　だがラスターは、闇に隠れ見えはせぬ、遥か先の壁面に視線を向けたまま、微動だにしなかった。
背後には、ラスターをこの場まで伴ってきたレセルと、神官トマの姿があった。

「年が明けましたら、いよいよ〈大祭〉の年。　新しい〈斎王〉が立てられる、八年に一度の重要な年となりまする。　至高の神の声を聴き、大陸全土にその言葉を伝える巫子の長〈斎王〉。　エランが、我等人間の前に姿を現さなくなった今、エランの声を聴くことが出来る〈斎王〉は、エランの仮の姿ともいえる、神聖なる存在。
――聞く所によると、貴方はかつて、その役を務められたことが、幾度かおありだとか――」

オリ＝オナは一旦言葉を切ると、しばらくの間を置いて、再び言葉を続けた。

「先の〈大祭〉では、北方のシス＝イリア大神殿が、〈斎王〉候補となる適格者〈器の巫子〉を、立てる順でございましたが、北に適格者が見つからず、現在はティルナの大神官が、慣例に則り、〈斎王〉の代役を兼ね務めておられる。　そして此度は、このキトナ大神殿が、〈器の巫子〉を立てる順となっております」

ラスターの表情に、何の変化もないことを見ると、オリ＝オナは薄く笑い、声を一段低め、言葉を続けた。

「貴方もよく、ご存知であろうが、〈斎王〉となれば、八年間、何人とも会う事は許されず、深殿に一人籠もり、〈精霊王〉に、ひたすら祈り捧げ、その声を聴くだけの日々を強いられる。　選ばれた〈器の巫子〉、その家族は、別れを余儀なくされる。　しかも、選ばれるのは、往々、子供が多い。　幼き子供を親から引き離すは、我等とて忍びなきこと――」

オリ＝オナは、一歩ラスターに近付き、その白い顔に手燭の光を当てた。

「――神エランは、様々な物に〈聖血〉を与えることで器を創り、息を吹き込むことで、新しき命を生み出したと、聖典には記されておりまする。　時にはその〈血〉で、死者をも生き返らせた――とも。　そして、その御業は、〈聖血の器（エラノール）〉である貴方に――受け継がれていると、”我等”は伝え聞いております」

彼方を見ていたラスターの青の瞳に、光が宿ったのを見て、オリ＝オナは更にゆっくりと、言葉を続けた。

「我等が選びし適格者は二名。　内一名は、未だ幼さの残る子供。いま一名は、身寄りもなく、〈巫子〉となるに、何の柵（しがらみ）もございませぬが、哀れかな、病が為に身体が朽ち、自由に動く事が出来ぬのでございます」

手燭の炎が揺らめき、僅かに、ラスターの瞳が揺れた。

「我等は、この病の者を〈器の巫子〉として立てたい。　しかし、

この者を立てるためには、病を癒し、朽ちた器を甦らせるか、または、新しき器にその魂を移し宿らせるか、でございます。　貴方の御助力を頂ければ、その何れとて、可能でございましょう。　――もしくは、貴方自身が立って下されば、最善、とも存じまするが――如何ですか？　一考の余地は、ございませぬかな？」

オリ＝オナは、ラスターを見据えながら、言葉を言い終えた。
ラスターは尚も動かず、闇を見つめ続けていたが、瞼を閉じ、ゆるりと開くと、老人の顔に視線を移し、初めて口を開いた。

「――問うからには、私の意思を尊重する心積もりがある、ということか？」

「無理強いはしたくございませぬゆえ。　御身は貴い。　更に申せば、無理強いをし、御身に瑕をつけるなど――私には、出来かねますからな」

悠然と笑うオリ＝オナに、ラスターもまた微笑み応えた。　それは、研ぎ澄まされた刃の如く、冴え冴えとした、冷たい笑みだった。

「――よかろう」

ラスターの返答に、オリ＝オナは満足げに頷き、トマを見遣った。
トマは、オリ＝オナに一礼すると、ラスターの横へ進み出た。

「それでは――」

「私も――そなたに時間を、与えよう」

トマの言葉を遮るように、ラスターは言葉を口にした。　トマは、

口に仕掛けた言葉を飲み込み、オリ＝オナの顔を伺った。
オリ＝オナは、無表情にラスターの顔を見つめていたが、眼光が、鋭さを増していた。

「私に、与え下さる時間とは、さて、何が為の時間でしょうや？」

ラスターは、オリ＝オナの問いに答えず、ただ薄く笑むと、横で呆然と立つ小男に視線を移した。

「言葉を遮り、失礼をした」

トマは、突然自分に向けられた青の瞳に、どう対峙してよいか分からず、オリ＝オナの顔をちらと盗み見た。
オリ＝オナは、一呼吸の間を置いて、ゆるりと口を開いた。

「この大堂の先棟に、手狭ではありますが室を用意させております。その者が、案内いたしますゆえ、何ぞありましたら、その者にお尋ね下され。　――トマ」

硬直したように立っていたトマは、オリ＝オナの呼びかけに、慌てて頭を下げると、ラスターの前へ、腰を折り進み出た。
手で進むべき方向を指し示すと、ラスターの先に立ち、無言のまま歩きはじめた。
ラスターはすれ違いざま、レセルを一瞥すると、トマに誘われるままに、闇の中へと消えていった。

大堂には、オリ＝オナとレセルだけが残った。　沈黙が、長く続いた。

「――あの者が与えると言った”時間”に、何か、心当たりがおありか？」

沈黙を破ったレセルの問いに、オリ＝オナは低い笑いを漏らした。

「さて――。　人外の者の考えなど、我には思いもよらぬもの。見当も付かぬな」

「この先、如何なさるおつもりです」

「それは、あの者の出方次第――」

オリ＝オナは低い笑いを漏らすと、レセルの血の滲む肩に視線を向けた。

「またも、あの者に敵わなかったと見得るな――レセル」

ラスターに負わされた傷からの出血は、今は止まっていた。　レセルは何も言わず、大神官と呼ばれる老人の顔に視線を向けた。

かつては師と仰いだ、騎士であった男の老いた顔に、あの頃の面影はなかった。

オリ＝オナは、視線を指のオスティルに移すと、低く、抑揚のない言葉を大堂の闇に向け発した。

「小者が、ここへ何用あって参った――」

レセルも気配を感じ、闇に視線を向けた。

闇中には、赤い二つの光が揺らめいていた。

「だ、旦那ぁ。　妙なガキが現れたんでぇさぁ――」

＊＊＊

「少しは我慢なさいよっ！」

アルは、まるで積年の恨みを晴らすかのように、渾身の力を込め、カラの左肩の傷に裂いた布を巻いた。

アルの手際は大層よく、治療はごく短い時間で終わったのだろうが、そのやり方が手荒いので、カラは傷を確かめられるにしろ、水で傷口を洗われるにしろ、薬を塗りこまれるにしろ、痛くて痛くて、いちいち悲鳴をあげずにはいられなかった。

「だって、痛いものは痛いんだよ。　もう少しそっとやってくれたっていいじゃないか。　これなら自分で息吹きかけて治した方が、よっぽどマシだよっ」

カラは、いまだに輝きを失わないオスティルの光で、アルの手元を照らしながら、涙目で不満を訴えた。

「そんな幼稚な方法で治る傷なら、あたしだって手を出しはしないわよ。　息吹きかけて治る？　馬っ鹿じゃないのっ」

「治るもんは治るんだ――つっ、痛いよっ」

「だから、これくらい我慢なさいっ。　あんたの好きな昔語りの英雄達は、この程度の傷でひぃひぃ言いやしないわよ。　英雄好きなら、そういった我慢強さも見習いなさいよ。　ほらっ、これで終わりよっ」

カラの左頬の傷に、力強く、軟膏を塗り終えると、アルは雑嚢か

ら出した膏薬入れや布の残りを戻し始めた。
手際よく、荷物を詰め直しているアルの手元を見ていると、左手に大きな擦り傷ができ、血が滲んでいた。
カラは短剣を地に突き刺すと、作業途中のアルの手を取った。

「な、何するのよっ」

アルは目を大きくしてカラを睨んだ。

「だ、だって、血が出てるよ。　これ、さっきオレが突き飛ばした時に怪我したんだろう？　　あ、肘も血が滲んでるっ。　手当てしなきゃ。　薬っ。　さっきの薬、もう鞄に入れちゃったの？」

慌てるカラをよそに、アルは呆れた声をあげた。

「何騒いでんのよ。　この程度、薬の必要なんてないわ。　それこそ、舐めて息でも吹きかけとけば治る程度よ」

「でも、血が出てるし、痛いんじゃないの？」

「そりゃ、ちょっとヒリヒリするけど、本人がいいって言ってるんだからいいのよ。　この程度でいちいち薬を使ってたら、もったいないじゃない」

アルの言葉を聞いた途端、カラはアルの手にふーっと、息を吹きかけた。
思いもかけないカラの行動に、アルは驚き、カラの手を振り払おうとしたが、カラの手はしっかりとアルの手を掴み、振り払う事は出来なかった。

「な、何すんのよっ。　放しなさいよっ」

「だって、アルが薬塗らないって言うから。　こうしたら、少しは良くなると思って――」

カラは更に数回、アルの手の傷に息を吹きかけた。

「だから、そんな幼稚な方法で――」

顔を赤らめ怒っていたアルは、ふいに、反抗するのを止めると、驚いた顔をしてカラの顔を見つめた。　アルが見ている事に気付くと、カラもアルの顔を見上げ、恐る恐る尋ねた。

「――どう？　少しは痛いの、良くならない？」

「――なった。　ヒリヒリしてたのが、まったく……」

カラはホッと笑顔になると、アルの肘にも息を数回吹きかけた。アルはその間、傷があったはずの手を確かめた。傷は、ほとんど分からなくなっていた。

「――なんで。　なんで治ってるの？」

「どう？　”幼稚な方法”だって、馬鹿にしたもんじゃないだろう？」

カラは自慢げに、ふふんと笑うと、アルの顔を見上げた。　すると、アルの首筋から細い銀の鎖が下がっていることに気が付いた。以前目にしたものと同じ、繊細な銀細工の鎖だった。　その先に下がる石の色は、オスティルよりも淡い黄色をしていた。　オステ

ィルほどの煌きはなかったが、その石もまた、淡い、優しい光を帯びていた。

「――それ、前は青緑色をしてたのに」

アルは最初、カラが何ついて言っているのか分からない様子だったが、直ぐに胸元の石のことだと気付き、指で石をつまんでカラに見易いようにした。

「これのこと？　〈映月石〉ユーシュよ。　聞いたことない？　月の満ち欠けと一緒に、色が変わる貴石」

カラが首を横に振ると、アルは首から鎖を外し、カラの首にかけた。

「あと何日かしたら、紅く色付いてくるわ。　御守、みたいなものね。　これを持っていると、必ず戻るべきところに戻れるんだって」

カラはユーシュに見入った。　オスティルとは違う、不思議な力を宿すという貴石は、水面に映った月のように儚げで、とても清らかな印象をカラに与えた。

カラは十分に見惚れると、首からユーシュを外そうとした。　しかし、アルはカラの動きを押し止めた。

「なんで？　だって、これはアルの御守なんだろう？」

「いいから持ってて。　治療、してもらったお礼」

「そんなっ。　それならオレの方が――」

反論しようとしたカラの言葉を制し、アルは真剣な眼差しで、カラの瞳を見つめた。

「あんたが――あんたに何かあったら……そうよ、あたしがラスターに怒られちゃうわ。　だって、私があんたをここに誘ったんだもの。　だからあんたには、ちゃんと、元気に家に戻ってもらわなきゃ、私――困るもの」

アルの口調は、怒ったように強いものだったが、その表情は、祈るような、沈痛な面持ちに見えた。

「で、でも、大切な物じゃないの？」

「大切よ。　だから、あんたが持っていて。　失くしたり、瑕をつけたりしたら容赦しないからね。　大切に、しっかり預かっといてよ。　あんたが無事で、無傷でいれば、ユーシュも無事なはずなんだから」

アルはカラの腕を小突いて笑うと、それ以上、同じ話を続ける意思がないことを示すように、カラに背を向け、残りの荷物を手早く詰め込み、勢いよく立ち上がった。

「さ、お互い治療も終わったんだから、さっさと行くわよっ。　ここから岩牢まで、どれくらいかかるかわかんないんだからっ。　カンテラがなくなっちゃったから、悪いんだけどオスティルで、道を照らしてもらわなきゃだわ」

カラは、肩脱ぎにしていたシャツを着直すと、突き立てた短剣を引き抜いて立ち上がった。　アルが見つめている方向に視線を向けると、オスティルでその闇を照らした。

「”岩牢”。　そこにガーランがいるの？」

「多分。　この通路を真っ直ぐ進むと、もうひとつ、さっきと同じような鉄扉があるはずなの。　その先に、岩を穿って造られた岩牢があって、そこに、大陸各地で狩られた、たくさんの聖獣が、入れられているはずなの。　だから、ガーランもきっと――」

アルは、進む先の闇を睨みながら、厳しい声で言った。　オスティルの光に照らされた横顔は、声のままに険しい表情をしていたが、どこか、今にも泣いてしまいそうな顔にも見えた。

「――なんで、アルはそんなこと、知ってるの？　ここのことも。どうして、こんな場所の事、アルは知ってるの？」

ずっと感じていた疑問を、カラは口にした。

カラの問いかけに、アルは俯き口を閉ざしたが、しばらくすると、大きく息を吐き出し、カラの顔を見返った。

「あたしの――」

言葉を口にし始めた途端、アルは黒の瞳を大きく見開いた。　驚きの表情は、見る間に緊張に強張ったものへと変わった。

「？　アル、どうしたの？」

カラはアルの怯えた顔を覗き込んだ。

しかし次の瞬間、その理由がカラにも分かった。

アルの背後に、幾つもの赤い光が明滅していた。　周りを見回すと、光はアルの背後だけではなく、二人をぐるりと取り囲むように、

揺らめき輝いている。
しかもその数は、周囲の闇の中から湧き出すように、次々と増えていく。

「な、何、この赤い――」

「カラっ、後ろっ」

アルが鋭い声を上げた。
カラはとっさに背後を振り返った。　が、その瞬間、殴られたような強烈な衝撃を腹に受けた。　カラの身体は吹っ飛ばされ、壁に背を激しく打ち付けた。
ドサリと床に落ちたカラは、腹と背に受けたあまりの衝撃に、呼吸が出来ず、地に伏し呻き苦しんだ。
手にしていたオスティルの短剣は、衝撃を受けた時にカラの手から離れてしまった。

闇を照らす光は消え、地下通路は再び、漆黒の闇に沈んだ。

1：対峙（後書き）

次回、〈2：夕暮れのキソス〉に続きます。

2：夕暮れのキソス

2：夕暮れのキソス

夕焼けに染まるキソスの町に、点灯夫達により夜の光が灯され始める。

郊外の開けた草原や丘に上れば、まだ陽の光は十分にあるのだが、町中は並び建つ家々に光が遮られ、夜の闇は早く訪れる。

薄暗くなる町中に在っても、顔をふと東に向けると、キソスで一番高いフォイナの丘に、夕陽を浴びて緋色に輝く、キトナ大神殿の優姿を見ることが出来る。

かつては東都として栄え、現在は宿場町として賑わうキソスは、ハル河西岸にあるリソン港を中心に栄えた港町、という一面も持っていた。

地方都市の港としては規格外に大きいリソン港には、中央沙都ウルストを中心とした、内陸各都市の産物をはじめ、沙都を経由して西方諸国の品々も運ばれていた。

内陸からの主な荷は、希少金属や良質の天然石であり、いずれも大変な高値がついた。

天然石は、レーゲスタ一の産出地である南都に引けを取らぬ質と量を誇り、殊に、沙都周辺でしか取れぬ、月の満ち欠けと共に、色を無色から黄、緑、青、紫、薄紅と移し変えるユーシュ〈映月石〉という貴石は、その珍しさと稀少性から近年、好事家の間で大変な人気を博している。

これらの品を携えやって来た沙都の商人と、それらの品をいち早く買い付けるため訪れた東都・南都の商人の熱気で、港は常に大変な賑わいがあった。

また、物品ばかりでなく、沙都の剣士の武勇は、つとに名高かった。　更なる飛躍を求める若き沙都の剣士達は、沙都から一番近く、活気溢れるキソスに最初の一歩を踏み出す。

キソスには、内陸にあっては得られ難い様々な情報が集る。　己に必要な情報をキソスで収集、精査し、自分を売り込む先を絞り込んだ若者達は、新たな天地を求め、キソスを旅立つ。

今日も今日とて、未来を夢見た若武者達が、自分の愛剣や棍棒、双斧などを携え、交易に用いられる高価な品々の合間を遠慮しながら船を降り、キソスの町へと足を踏み入れていく。

今しがた、本日最終便の客が下船したらしく、港から続く旅籠通り、酒場通りの何処もが、湧いて出るかの如く増え続ける旅人の熱気で満ち満ちていた。

キソスの幹線となる大通りを南に下がったこの付近は、旅人にはよく知られた歓楽街で、大小三十を超える酒場が軒を連ねていた。

そのうちの十数軒は、別名〈睦宿（むつみやど）〉と呼ばれ、店付きの女と客の男が酒を飲みながら睦言を交わし、意気が合えば、長い夜を共に過ごすための部屋が別棟に用意されていた。

比較的通り幅の広い、酒場通りの左右には、使い古しのワイン樽を机に見立てた、即席の戸外席が設けられ、安めの酒で、気の置けない仲間と愉快な時間を過ごしたい若者が数人、既に気に入りの席を見つけ陣取っている。

故郷を離れ、第一の目的地に着いた喜び、開放感。　己の夢描く未来を掴むため始まる、新たな試練と模索の日々。　期待と僅かに織り交ざる不安。　全ての感情を飲み干すかのように、若者達は大いに飲み、語り、歌った。

早い席では、すでに出来上がった者達が、肩を組み、大音声でお国の歌を歌っている。

『いくら感覚が鈍いといっても、あの小童共、よくもこんな気色の悪い場で酒なぞ飲めるな。　この感触、この臭い。　まるで肥溜めの中にいるみたいだよ。　安物とはいえ、もう少しマシな環境で楽しむもんだよ、酒は』

舌打ちと共に発せられた女の声は、あからさまな棘があった。

「酒を飲めば、良いも悪いも、境が曖昧になるからいいんだよ。曖昧にするために飲む者だって、きっといるだろうからね。　もっとも、いくら飲んでも酔わない君には、わからないかもしれないな」

『底蓋の無い酒樽の如き奴に、そんな科白を言われる筋合いはないね。　あぁ、ったく、胸糞悪いったらありゃしない』

女の言葉に苦笑しながら、ナハはエアルースの首筋を優しく数回叩くと、頭を廻らせ周囲を見渡した。

「しかし、まあ、肥溜めまではいかないけど、そうだな。　固まりかけたヘドロの上、に立っているみたいだね。　臭うし、足下がなんとも気持ちが悪い。　もっとも、私達は敏感すぎるのだよ、職業柄ね」

人通りの増えた酒場通りを、無闇に駆け抜ける訳にも行かず、ナハはエアルースをゆっくりと歩ませていた。

道を行く素面の男達に限らず、酒の入った酔漢の目にも、エアルースの姿は優れて美しく映るらしく、通り過ぎるナハ達を返り見る者は少なくなかった。

『チラチラと――ええぃ、鬱陶しい。　こんな窒息しそうな場所、

さっさと用件済ませて抜けちまいな』

女の声は明らかに苛立ち、周囲の人間に反感を持っている様子だった。

「まあまあ。　エアルースは美形だから仕方ないよ。　私みたいな、くたびれたのがお供だから、別の意味でも目を引いているみたいだし。　これで君の姿も見えていたら、もっと大注目だろうな。　そもそも君が一番、男の注目を集めるには、適役だろうからね」

のほほんと笑いながら言うナハに、女の声は凄みを増した。

『ナサリィ・ハイエル・ティータ＝ラスクス。　どうしてお前はそうも間延びした性格なのだ？　あたしで男を引っ掛けてどうするというのだ、阿呆め。　ここへ参った目的。　よもや、忘れたとは言うまいな？』

「カ・ナフィ・ルーイ。　持って生まれた性格は、私一人の所為ではないよ。　それにいくら私でも、ここへ来た目的は忘れていないよ。　この後の動きに関わるのだからね」

『ならば、さっさと動かんか。　視られ続けるなど気に喰わん』

怒気の混じった女の声に、ナハは小さく首をすくめた。

「特に気に喰わないのは、あの大声で歌っている若者達の、後ろの三人組だろう？　さり気なく熱い視線だね。　ちょっとぞくっとするくらいだ」

エアルースの首筋を撫でながら、ナハは男達の様子を横目で伺っ

た。　剣士であろう、恰幅の良い壮年の男が二人と、商人風の、背の低い初老の男が一人。　杯を酌み交わし、故郷の話などで盛り上がっているが、その目は、会話を愉しんでいるというよりは、獲物を狙う獣のようで、鋭く油断がない。

『あれは、そうだろう？』

女の声に、艶やが増したのを聞き取り、ナハは軽く嘆息した。

「……多分ね。　さて、どうするかな――」

「おーい。　そこの兄さん。　えらくカッコいい黒馬に跨っている、あんた、そうあんただよ」

酒瓶片手に、顔を赤らめた二人組の男が、手招きをしながらナハに近付き、エアルースの鞍に手を掛けた。　既に何本の酒を空けたのか、男達の吐く息は、アルコールそのものだった。

「この馬、いい馬だなぁ。　こんな馬はぁ、見たこたねぇ。　お前さん、キソスにゃあ、着いたばっかりか？　どうだ、一緒に飲まねぇか？　奢るぜ？　この馬をもっと拝ませて貰いてぇしよ」

南方なまりのある鬚面の男が、エアルースの顔をしみじみと覗き込みながら、馴れ馴れしくナハの膝を叩き笑った。　エアルースは、男の行動に動じることなく、大人しくナハの指示を待っていた。

「なんだ、あんた、ネズミまで連れてるのか？　こりゃ白いベッピンのネズミだな。　緋色の目玉が宝石みたいじゃないか」

もう一人の、こちらは北方の出身と見える、背の高いひょろりと

した男は、ナハの肩に座るカナルに、チッチッと口真似をしながら手を伸ばしてきた。　カナルは、ヂイッと高く鳴き、男の指先を齧ると、ナハの胸ポケットに潜り込んでしまった。

「っ痛ててっ。　ありゃま、怒っちまった」

男は齧られた指を振りながら、空いた手でナハのポケットを突付いたが、カナルはポケットの中で身体を丸め、ピクとも動かない。

「あはは、すまないね。　私の連れは少々気性が激しい上に、かなり、人間見知りでね」

ナハは頭を掻きながら、苦笑した。

酒で陽気になった男達は、見ず知らずの通りすがりにでも、気軽に声をかけて酒の席に招こうとする。　エアルースに跨り、通りを進んでいたナハも、ここまでに五回、酒席に誘われ、丁重に断り続けてきたが、今回は逃げ難い状況だった。

エアルースから降りると、ナハは男達の話に付き合うことにした。

男達は、嬉々としてナハを、自分たちが陣取っていた席へと案内した。　戸外席ではあったが、周囲の席の人々への配慮から、エアルースは結局、店の裏にある厩に預けることとなった。

ナハが席に着くと、背高の男が女中に杯とつまみの追加をした。

間もなく運ばれてきた酒は、度数の高い老酒で、一口含んだだけで、喉が焼けるように熱くなる。　つまみは、木の実の盛り合わせと、香草塩を塗した鶏肉を、丸のまま炭火で炙ったものだったが、鳥のやや焦げ気味の皮が香ばしく、なかなか美味だった。

「こりゃ美味いな。　着いた早々、なかなか幸先がいい。　何分ここ二・三日、あまりまともに食べてなかったから、腹ペコだったん

だ。　懐がカラッポでね、稼ぐまでは何も食べられないと、覚悟をしていたんだが、あんた達に会えたのは、思わぬ成果だな」

いつの間にか、手酌で杯を重ねるナハに、男達は更に酒を注文し、つまみを勧めた。

「成果とは、大層な言われようだな。　まあ、ほら、遠慮せずに飲みな。　ところであんたは、どこから来たんだ？　どうみても剣士には見えんが、商人にも見えん。　あの黒馬。　あれはかなりの名馬だ。　俺は北方カスリスの出でな、馬にはうるさいんだが、あれ程の馬は、カスリスでも見たことがない。　騎士ですら、そうそう手には入れられれん馬だぞ。　あれならば、聖獣ヘクトールの末裔と言われても信じられるな」

背高の男は、手にしていた酒瓶から酒を呷ると、興味深げな眼差しをナハに向けた。

「カスリスといえば、馬の産地で有名な国だ。　なるほどね。　私は術師を生業としているのさ。　あの馬は、私の親が残した、唯一の遺産、形見みたいなものなんだ。　こう見えて、私は結構な名家の跡継ぎだったんだが、家の跡を継ぐのが嫌でね。　餞別代りにあの馬を貰って、流れ者になったってわけさ」

美味そうに酒を飲みながら話すナハの姿を、男達は上から下まで見回し、目を見合わせ大笑いをした。

「お前さんが名家の跡取りなら、俺達は、一国の王子だ。　こんな煤けてくたびれきった名家の跡継ぎなんざ、大陸広しといえどお前さん位なもんだぜ？　しかも、お前さん、しばらくフロにも入ってないだろ？　臭うぜ」

「まったくだ。　俺もな、あんたとご同業の術師だが、もう少しは身奇麗にした方が、客を引っかけ易いってもんだろうがよ。　俺はな、獣を操るのを専らとしているんだが、お前さんは何を専門としているんだ？　その疲れ果てた見てくれじゃ、専門が何であれ、客が捕まらんだろう？」

男達が大声で笑いたてたため、周囲の視線がナハに向けられた。
照れくさそうに頭を掻くと、ナハは空になった杯に酒を注いだ。

「あはは、やはりそんなに頼りなさそうかね？　確かに、ここ最近、ほとんど仕事はしていないからなぁ。　ここではちょっと、本気で働かないといけないのだが、どうにも予定が狂いっぱなしでね。そろそろ気を引き締めなくてはと、思っているのだがね」

おっとりと笑いながら、ナハは三本目の老酒の瓶を空けた。　ナハの飲みっぷりを気に入ったと、背高の男は酒の追加を頼みに席を立った。

「相方は術師でも、あんたは剣士だろう？　キソスに何かいい雇い口でもあるのかね？　あんたのご同業が、ずいぶん集っているみたいだが」

視線で、周囲の男達を指しながら、ナハは鬚面の男に杯を渡し酒を勧めた。　自分の杯にも忘れず酒を満たすと、ぐいと呷った。

「聞いてねえか？　辺境のイリ、アドラ、トルサキア辺りで、ここ最近、規模の大きい暴動が頻発しているんだと。　死人も結構出ているとかで、その状態が続くようなら、場合によっちゃ東西南北の都から、治安維持の為の派兵があるかもしれないんだと。　西都で

は既に予備兵の募集があってるって話だ。　剣士共にとっちゃ、滅多にない活躍の場だからな。　情報集めに必死なんだろうさ。　どの都に行くのが、一番良いかってな」

「ああ。　どれも国名だけ残して滅ぼされた国か。　国土回復を望む亡国の民はかなり多いみたいだからな。　つまり、あんた等も、その募集に応じるため、東都か南都に？　ご苦労な事だな。　ま、私はしがない術師だし、戦は苦手だからその話は無縁だな」

鬚面が杯を干すと、ナハは空になったふたつの杯に、なみなみと酒を注いだ。

「いや、オレは別のクチだ。　もっと確実な雇い主を、探し出したのさ。　トール――あの相方の術師だが、奴も一緒にな」

「へぇ？　術師も一緒にね。　そりゃ興味あるな。　どこぞの貴族か大商家のお抱えかね？」

鬚面はにやりと笑うと、手招きをして、ナハに耳を貸せと合図した。　ふたつの杯を満たしつつ、ナハは言われるままに、耳を鬚面に向けた。

「――〈正神聖教（シン・エルナイ）〉を、知っているか？」

男があまりに声を潜めて言うので、ナハもつられて小声で答えた。

「聞いた事はある――確か、エランを唯一絶対の神として崇めている集団だろう？　宗教の事は、あまり詳しくないのだが、あんた達とは、あまり関係ない気がするのだがね？」

鬚面は注がれた杯を空けると、更に顔を近付けてきた。

「詳しい理由は言えねぇがな、腕の立つ剣士や術師を集めていてな。上では、まだまだ使える人材を探しているって話だ」

ナハの顔に目を据えたまま、男はいつの間にか満たされている杯を呷った。　ナハは五本目の老酒を開けると、当たり前のように、自分と男の杯を満たした。

「へぇ？　そりゃ確かに珍しい雇い先だな。　〈正神聖教〉は、大神殿とは相容れない間柄だと聞いたが、この大神殿の町に、〈正神聖教〉の教会堂でもあるのかね？」

ナハが興味を示したことに気を良くしたのか、鬚面の男は杯を飲み干し、鼻の頭が触れるほどに顔を近付けてきた。

「それはな――」

＊

鬚面の男がトールと呼んだ男は、エアルースの姿に改めて見惚れていた。　先程ナハに言った言葉は偽りでなく、これほどの馬を、トールは見たことがなかった。

「これは、そのような目的に使うのは、あまりに惜しいな。　いっそ、どこぞの金持ちに売り付けた方が、実入りがよさそうだ」

エアルースに見惚れ続けるトールの背後で、背に大剣を背負った男が、腕組みをしてトールの作業を見ていた。

「あまり欲をかくと、取るものも取られんぞ。さっさとこの馬を連れ出せ。　人目につくと厄介だ」

「陽も落ちた。　この黒馬の姿は目立たなくなる。　暴れさえせねば、難なく連れ出せる」

トールは、エアルースの引き綱を柵から解いた。　トールが軽く綱を牽くと、エアルースは素直に従い歩き出した。

厩を出ると、裏通りを抜けた先にある森まで牽いて歩ませた。大剣の男も、離れてその後ろを付いて歩いた。

森に辿り着くころには、陽の名残は一切失せ、街灯の明かりの届かぬ森の中は、深い闇に沈んでいた。

下草の茂った、木々の間をしばらく分け進むと、ぽっかりと草木がまばらになる開き地に出た。　中央には、二人の男が立っていた。

一人は、頬に大きな傷を負った壮年の男で、腰に長刀を佩いており、いま一人は、小柄な商人風の装いをした老年の男だった。　背丈に不釣合いな長い杖を手にしており、その杖先には、火のない光が灯っていた。

「ほお。　これはまた立派な馬だな」

傷の男が、エアルースを見て感嘆の声を上げた。　杖の小男も、目を瞠り、エアルースの周囲をぐるぐると回った。

「これは、ひょっとすれば、真に聖獣の流れを汲む馬やもしれぬぞ。ただ姿の良い馬と言うには、力に溢れて過ぎておる。　よくぞこんな馬を、あのようなみすぼらしい男が連れていたものだな」

「恐らくあの男も盗み得たものだろうよ。　術師と言っておったか

ら、あんたみたいに、何やらまやかしの術でもかけて、持ち主から盗み得たのであろうさ」

トールの皮肉めいた言葉に、杖の男は顔を赤らめ、トールに杖を突きつけた。

「まやかしの術じゃと？　貴様も同じ術師のくせして、私の術をまやかしというか？」

「気に触ったなら、失礼。　俺はしがない獣使い。　獣の扱い意外は何も出来んことを重々承知している。　だがあんたは、〈精霊使い〉になり損ねた田舎術師、と聞いていたものでね。　田舎の精霊使い崩れには、詐欺師が多いと、私の故郷では知れたことだったもので、つい」

怒りに震える術師の肩に、大剣の男は手を置き、術師を後ろへ下がらせた。　トールは、皮肉な笑みで杖の術師を眺めやると、大剣の男に視線を移し、笑いを引いた。

「聖獣を捕らえれば、総帥に合わせると言ったな？　あんな、牢番のような下働きじゃない、もっとマシな仕事を、させて貰えるんだろうな？」

「その心配はない。　これが真に聖獣の血を継いでおれば、〈狩り人〉としての仕事が、総帥より与えられる。　そこで更にその力を認められれば、更なる活動の場が用意される」

大剣の男の回答に、トールは頷いた。

「それより、お前の相方はどうなっている？　ここで待つ事は伝え

てあるのだろう？」

「ああ。　カイトスは、この馬の主に話を持ちかけている」

大人しい黒馬に、トールはうっとりと見入りながら首を撫でた。

黒馬は、軽く首を振ると、蹄で地をかいた。

「話とは――我等のことか？」

「使える者が欲しいと言っていただろう？　安心しろ、詳しい事は話してはおらん。　ただ、奴は術師と言った。　腕前の程は分からぬが、意外に使えるかも知れぬと思ってな」

「何故そう思った？」

「動きに無駄がなかった。　この馬の扱いにしろ、肉を切り取る手捌きにしろ、何かしらの訓練を受けている。　話に乗れば、その男も共に来るが、乗らぬなら、奴は死ぬ」

「死ぬ？」

訝しげに問う術師に、トールは冷笑を向けた。

「俺は薬物にも多少の知識があってね。　奴の最初の杯に薬を、仕込んでおいた。　ここに来て、解毒の薬を飲まねば、明日の朝、奴はどこぞで冷たくなっている」

トールが、陰湿な笑みを浮べると、背後の藪から暢気な笑い声が上がった。

「やはり、無料(ただ)より怖いものはないなあ」

闇から聞こえてきた声に、男達はそれぞれにサッと身構えた。
藪に一番近い場所に立っていた術師は、背後の藪に杖を向け、目を細め、闇を伺った。

「何者――な、何だっ」

「どうしたっ」

奇声を上げた術師を見ると、その杖上に白い小ネズミが座り、緋色の瞳を輝かせながら、男達をじっと見つめていた。

「何だ？　ネズミじゃないか。　たかがネズミで騒ぐなん――」

「来るぞ」

大剣の男が、トールの言葉を鋭く制した。
間もなく、ガサガサと藪を掻き分ける音と共に、藪の中からぬっと、薄汚れた暗緑色の外套を着たナハが、頭を掻きながら現れた。
白ネズミは、術師の杖から飛び下りると、ナハの肩に駆け上った。

「カナル。　この道は、私にはちょっと通りにくかったよ――おっと。　やぁ、皆さんお揃いで。　ああ、エアルースもいるね。　厩にいないから、カナルに跡を辿ってもらったんだが、何も、問題はないようだね」

ナハの呼びかけに、エアルースは鼻を鳴らし、頭を上下させて応えた。　エアルースの綱を握っていたトールは、エアルースの動きに引きずられつつ、ナハの顔を凝視した。

「お、お前は――」

ナハもまた、トールの顔を見て微笑み手を振った

「先程はご馳走さま。　だが、断りなく私の馬を連れ出すのは、どうかと思うのだがね」

「お前、何とも――……」

言いかけて、トールは言葉を飲み込んだ。

トールがナハに盛った薬は、遅効性のものではあったが、酒と共に飲めば、効果が出易くなるものであった。　そろそろ歩行が困難になり、意識の混濁が始まっていても、おかしくはないはずだった。

「お前。　い、いや、話に乗る気になったのか――カイトス。　おい、カイトスはどうした？　一緒に来たんじゃないのか？」

ナハは、ああ、という顔をした。

「あの鬚面はカイトスって言うのか。　奴なら酒場の小部屋で寝ているよ。　”明日の朝まで目覚めないだろうけど、この男がここの飲み代払うから、朝まで寝かしておいてくれ”と、奴の財布と一緒に、店の親父に渡してきたからね」

大剣の男が進み出て、ナハを見据えた。

「お前、我等の話をカイトスから聞いて、ここに参ったのではないのか？」

「聞くはずだったんだが、思ったより早く薬が効いてしまったみたいでね。　聞き出すより前に、眠られてしまった」

「眠ってしまった？　――貴様、奴に何をした？」

のんびりと話すナハに、トールは声を荒げた。

「何って、あんたと同じ。　薬を盛っただけだよ。　あんたのとは違って、ただの眠り薬だがね。　言わなかったかな？　私、薬方士並みに薬物には詳しいのだよ。　殊に、毒物関係は大得意だ。　おかげで、あんたが最初の杯に入れた毒の解毒も、自分で行えた」

傷の男は、トールとエアルースを背後に下げると、剣を抜いてナハに向けた。　大剣の男も、柄に手をかけナハを見据えた。

ナハは頭を掻きながら、手近な木に手を添わせ、幹を数回、軽く叩いた。

「物騒だなぁ。　まるで私は仇のようだな。　私は、あんた達に幾つか訊きたい事があるだけなのだがね。　半日も町中を探したのだよ？　エアルースを餌に、無意味に町中を駆けて、あんた達が私に接触してくるのを、ひたすら待ったのだよ？　その努力に報いて、平和裏に、話し合いで解決してやろうとは思わんかね？」

「――ふざけた事を。　貴様、何者だ？」

眦（まなじり）をあげ見据える傷の男を、ナハは苦笑しながら見つめた。

「私は流れの術師だよ。　そのひょろ長い男――トールというのだっけ？　彼から聞いていないのかい？　あんた達は――〈狩り人〉だろう？」

ナハの言葉が終わらぬうちに、突然、木の枝が鞭のようにしなり動き、傷の男が構える剣を叩き落すと、男の手首に巻き付き、悲鳴と共に男を樹上へと吊るし上げた。　枝は同時に大剣の男にも巻き付き、身体の自由を奪っていた。

「き、貴様――何をしたっ」

ふいを突かれた大剣の男が、手足の縛めに抗いながら、ナハを凄まじい剣幕で睨みつけた。

「立ち回りは苦手なものでね、先手必勝だと思って。　ああ、でも”鉄の武器を持った奴等を封じろ”って頼んだら、二人も残ってしまったな」

ナハは、木に絡め取られなかった杖の術師と、エアルースの綱を握った、トールの二人を見遣った。

「――確かに、木の棒と、何も持っていない、か。　ひょっとして、どちらもご同業か？　――めんどくさいなあ」

杖を構えていた術師は、慌てて口の中で呪文らしき言葉を唱え始めた。　同じ言葉が繰り返し唱えられるうち、ナハの周りに、小さな竜巻が起こり始めた。

「へぇ。　あんた、〈風〉を使うのか？　しかし、〈風の者〉は添っていないようだ。
と、言う事は、もぐりの術師か」

『もぐりももぐり。　こんな近くにあたしがいるってのに、露ほど

も気付かぬ』

「なっ――この女の声は……何処にいるっ」

術師は顔を赤らめ眉を上げた。

突き出していた杖を上げようとすると、その先端に再び白ネズミが飛び乗った。

「な、何だ、このネズミは」

緋色の瞳で術師を見上げる白ネズミから、女の笑い声が上がった。

『多少でも、精霊の力を行使しようとする者のくせに、私が見えぬとはな。　ま、その程度の低級な術しか使えん四流術師では、そんなものであろうな』

女の言葉に、術師は怒りを増幅させ、新たな呪文を唱え始めた。

「あんまり挑発しないで欲しいな。　君が片付けてくれるなら構わないけど」

苦笑しながらナハは頭を掻いていたが、ナハを取り巻く風は次第に勢いを増し、髪や外套は巻き上げられ、激しくはためき、手や頬には小さな掻き傷が無数に出来ていた。

「暑い季節なら、この風は、案外気持ちいいかもしれないけれど――」

勢いを増し、ナハの身体の自由を奪おうとする風の圧力に、ナハは抗い、膝を折り地に手を着けた。

「今は、ちょっと――煩い」

一掴みの土を握ると、ナハは土に息を吹きかけ、身体を包むように吹き荒れる風に乗るように、手から土を零した。

土を、自らの流れに巻き込んだ風は、見えぬ壁に打ち当たったかのように、ナハの周囲で一度大きく渦巻き、ぴたりと吹き荒れるのを止めた。

激しくはためいていたナハの外套は動きを止め、辺りはしんと静まりかえった。

「よし。　とりあえず静かになったな。　さて、まだ反抗したい気持ちがあるなら、先に言ってもらいたいのだが。　小出しで反抗されるのは、対応するのが面倒だ」

ナハは、ぼさぼさになった頭を掻きながら、二人の男に視線を向けた。

術師の男は、杖先に座っていた白ネズミを払い落とすと、杖を構え、今度は自分の周りに風を吹かせ始めた。　風の勢いが増すと共に、小さな術師の身体がゆらりと、宙に浮かび上がった。

一人、騒ぎの背後に隠れていたトールは、エアルースの背に手を掛け素早く跨ると、腹を蹴り、巧みに手綱を捌き、逃走を図った。

「おお、流石は獣使い。　よくぞエアルースを動かしたなあ。　だが――」

ナハは嘆息すると、再び地に手を着け、瞼を閉じ、深く息を吐いた。

《我が声に応え、深き眠りより目覚めよ。　我〈地〉に属す者。

〈地〉と契りし同胞(はらから)なる者。　旧きキソスの地に坐ます〈地〉の賢者よ。　我が声に応え、汝が力を示すがよし。　我は汝の腕(かいな)なり。
汝が腕は我が腕なり。　汝が力は我が力なり――》

低く、重く響く声で、ナハは詞(ことば)を唱えた。
詞の残響が消えると、地の底から地鳴りが聞こえ、男達の立つ地面が、波立つように揺れ始めた。　激しい揺れがぴたと静まると、突如、大地が天を突かんばかりの勢いで隆起し、瞬く間に、見上げんばかりの巨大な壁が、男達をぐるりと取り囲んだ。

突然現れた土の壁に行く手を阻まれたトールは、馬首を廻らせ、方向を転換しようとした。　しかし、手綱を引いた途端、エアルースは激しく嘶き、後立ちになりトールを振り落とした。
地面に強かに叩きつけられたトールは、痛みに呻きながらも、身体を起こそうと、うつ伏せになりもがいていた。　トールを振り落としたエアルースは、嘶き、激しく首を振ると、蹲るトールの傍らに立ち、前脚を宙に躍らせた。

「エアルース。　そのくらいでお止め」

穏やかなナハの声に、エアルースは前脚を土の上に下ろした。
下ろしはしたが、エアルースは怒りが収まらないのか、荒い息を吐きながら、トールの周囲を、荒々しい足音を立てながら回った。
つい先程まで、穏やかで従順であった黒馬の眼は、赤く激しい光を放ち、猛る獣の如く、鬣(たてがみ)を逆立て、鼻息荒くトールを見下ろしていた。　幾度が蹄で地をかくと、再び後ろ立ちになり、蹲ったトールのすぐ脇の大地を、蹄で激しく打った。　大地には、子供が落ちてしまいそうなほどの、巨大な穴が開いた。

「ひっ――」

ようやく半身を起こしたかけたトールは、脚を踏み鳴らし続ける黒馬の怒りに、蒼ざめ、腰砕けに座り込んだ。
ナハは興奮したエアルースの傍に寄ると、その鼻面を優しく撫でた。 撫でられているうちに、エアルースも次第に落ち着きを取り戻し、踏み鳴らしていた脚を止めた。

「この馬を、聖獣と察して連れ出したのであれば、愚かとしか言えない行動だな。 聖獣は、普通の獣以上に誇り高い。 許しを与えていない者を乗せるなんて、通常ならば万に一つもあり得ないことだ。 ここまであんたに逆らわなかったエアルースに、感謝をすることだな。 エアルース。 君の怒りを少しでも晴らすために、この男には――そうだな。 しばらく、埋まってもらおうか」

ナハが軽く地に触れると、トールの周囲の土が、沸騰する湯のように沸き立ち始めた。
揺れ動く土に動揺するトールの身体は、エアルースが開けた穴に吸い込まれるように落ち、周囲で沸き立つ土が、穴の隙間を埋めるように雪崩れ込んだ。

「な、何を――出せっ、こんな――」

頭だけを残し、地中に埋められたトールの、顔にかかった土をナハは払い除けてやった。

「あまり圧迫しないように、〈地の者〉には頼んであるから、しばらくその姿で反省してみることだね」

「お、お前――まさか〈地の長〉か？」

宙に浮いたまま、術師は呆然とした顔で、ナハを見ていた。
手を叩きながら立ち上がったナハは、頭上の術師を見上げ、曖昧な笑いを浮べた。

「”まさか”ではなく、まさに、そうなのだけれど――話は、出来れば平行線上でしたいものだな。　カナル。　静かに下りて貰えるよう、手伝ってくれるかい？」

ナハの言葉の応じるように、術師の杖先に再び白ネズミが現れた。
白ネズミは、術師を見据えるように、後ろ足で立ち上がると、淡い光を放ち始めた。　光は次第に強く大きくなり、ネズミの姿はかき消され、人の姿に変化をしていった。

「な、なん――……ひっ」

術師の身体を宙に吹き上げていた風が、突如として吹き止み、術師の身体は杖だけを残し、どさりと地に落下した。

『”静かに”下ろしてやったぞ』

打ち付けた身体の痛みも感じぬかのように、術師は、宙に浮いたままの杖を見上げた。
浮いた杖の上には、すらりと背の高い女が立っていた。
褐色の肌に白い衣を纏い、漆黒の長い髪を腰まで伸ばした、目を瞠るばかりの美しい女だった。
緋色に輝く切れ長の瞳で、蟇蛙のように地に這い蹲る男を、傲然と見下ろしている。

「――精霊。　まさか、〈地〉の、精霊か」

カナルは妖艶に微笑むと、額に掛る黒髪を掻き揚げ、鼻で笑った。
『”まさか”ではなく、”まさに”そうだ。　特別に、この麗しい姿を見せてやっているのだ。　賛辞の一つ、その口は言えぬのか？』
カナルは自分の足下の杖を手に取ると、紅く形の良い唇をつけた。
すると、杖はぐにゃりと柔らかくなり、扱(しご)くと、それはしなやかな縄に変わった。
縄に軽く唇をつけると、カナルは術師の上にぱらりと落とした。
すると、縄は蛇のように術師に絡み付き、身体を固く縛めた。
『いつでも賛辞の言葉を言えるよう、縛るは身体だけにしてやろう』
カナルはふわりと地に降り立つと、ナハの肩に手を掛け、男達を見据え笑った。
『こやつ等。　訊いて素直に答えるかねえ？』
「答えてもらわなくては、努力が無駄になるからね。　だから――答えてもらうさ」
ナハは、様々に縛められた男達を見回した。
枝に自由を奪われた大剣の男の傍に歩み寄ると、ナハは男の顔を見上げ、にこやかな笑みを浮べた。
「あんたが一番詳しそうだから、あんたにまず、訊くことにしよう」
男はナハを無言で睨んだ。　その激しい眼差しを受け、ナハは不敵な笑みを浮べた。

「〈狩り人〉の――〈正神聖教（シン・エルナイ）〉の地下教会について、全て、話して貰おう。　素面（しらふ）で話し難いならば、私の薬を、振舞ってやってもいい。　酔いを愉しむ時間は、無いがな――」

ナハの顔から、笑みは消えていた。

2：夕暮れのキソス（後書き）

次回、〈3：操骸師〉に続きます。

3：操骸師

3：操骸師

「カラ、大丈夫なのっ。　カラっ」

アルフィナの叫びが耳に入り、カラは身体の痛みに顔を歪めながら、周囲を見回した。

何が、自分の腹を殴ったのかを確かめたかったが、四つの赤い光が周囲をゆらゆらと漂っている以外、何者の姿も、カラの瞳には映らなかった。

「カラ、ねぇ、何処？　何処にいるの？」

「――ア……こ、こ――」

返事を返そうとしたが、腹と背の痛みが酷く、思うように声が出せなかった。

オスティルの光が消えた闇の中に、アルは一人、身体を強張らせ立っていた。

幾つもの赤い光が、アルを取り囲んでいることが、痛みに霞む目に映った。　闇中で目が利かないアルにも、赤い光に囲まれていることは見えるらしく、不安げに周囲を見回している。

目に見えない透明な蝋燭に、見えない手が火を灯していくかのように、赤い光は突然ポッと空間に現れ、ゆらゆらと彷徨うように、二個一対で動き始める。

赤光の数が増えるに従い、地鳴りのような、低くうねる音が、通路内に重く響き始めた。

地鳴りは次第に、様々な獣の唸り声へと変化し、赤光は、闇中で輝く獣の眼であることが、明らかとなった。

「なんで――どこからこんな数の獣……」

カラは、自分が今見ている光景が信じられなかった。

獣達は、穴一つ開いていない岩壁や何も無い空間から、突然すぅと、湧き出してくる。

現れて直ぐの身体は、限りなく透明か半透明だが、しばらくすると、絵筆で着色されるように、身体が色を持ち、はっきりと目に見えるようになる。

「う――な、なん、いったい――……」

獣の数は見る間に増え、終には、カラとアルの間に壁を作る程の獣が現れていた。

鼠、猫、犬、鹿、熊、猿、鴉、梟――ありとあらゆる獣がそこには存在した。　どの獣も、低い唸り声を漏らす程度で、吠えたり鳴いたりするものはなかった。

「カラ。　いるんでしょう、返事をしてっ」

アルの再度の呼びかけに、呆然としていたカラは、はっと我に返った。

「アル。　ここ、ここだよ――」

痛む身体をゆっくり動かすと、カラは四つん這いにまで身体を起こし、ふと、前を見た。

「――……な」

鼻先に、巨大な牙があった。

生臭い、赤黒い口から剥き出された、獰猛な肉食獣――狼の牙だった。

その長い鼻面には、威嚇のシワが深く寄り、鼻面の上では、熾（おき）のようにちらちらと輝く赤光が眼窩で揺らめき、カラを見据えていた。

視線を僅かに横にずらすと、同じ凶暴な口がもうひとつ、カラの喉笛を狙うように、牙を剥き、長い唸りを上げていた。

「――っ。　な、なな、なん――……」

カラは、ひっくり返るように座り込んだ。

二匹の大狼の威嚇に身体が竦み、頭を動かすことすら出来ず、目だけで自分の回りを見た。　いつの間にか、カラはぐるりと囲まれていた。

大狼の足下には、大型の鼠がたむろし、背後には狐や猫、熊といった獣が控えていた。

それらの獣達からは、独特の体臭が漂っていた。　薬草の苦く青臭い香りと、肉が腐れたような、胸の悪くなる腐臭とが混ざりあった、禍々しいまでの悪臭だった。

込み上げてくる吐き気に、涙目になりながらも、カラは腕で口元と鼻を覆い、獣の様子を更に観察した。

カラの眼前の大狼は、二尾を有し、見事な銀毛に覆われていた。

アルの傍に立ち頭を下げている大鹿は三本の角があり、五尾の狐の毛は、雲のように真白だった。

何れの獣も、カラが知っているものより身体が大きく、優れた姿形をしている。

しかし、獣の腹には決まって、赤黒い不吉な穴が開いていた。

まるで、そこから何かを取り出したように、腹の周囲の毛が、どす黒く染まっている。
獣の口は、どれもだらしなく半開きで、舌が垂れ下がり、唾液のような汁が滴り落ちている。
それらの窪んだ眼窩に、眼球はなかった。　そこにはただ、赤い光が、熾のようにくすぶり宿っているだけだった。
カラの背に、ぞっと寒気が走った。
昔聞いた物語の中に、世を拗ねた老術師が、死んだ人間や獣の死骸に偽りの魂を込め、自在に操り、自分に従わない人々に害をなす、という話があった。
これらの獣は、カラの思い描いた〈死した獣〉にそっくりだった。

この獣達は、死んでいる――。

カラは、そう確信した。　どの獣も己の足で動き、カラを、そしてアルを、牙を剥き威嚇している。　だが、彼等は生きていない。
言い知れない恐怖が、カラの身体を締め付けた。　鼻を突く異臭と、腹を血に染めた獣達の姿に、吐き気を覚えた。
物語と同じだとしたら、この死した獣達を操る術師が、どこかに隠れているかもしれない。
早くここから逃げなければ、と、気ばかりが急いたが、身体が強張り、思うように動けない。

「カラっ、どこ？　もっと大きい声で応えて。　どこなのっ？」

アルは張り詰めた声で、カラを呼び続けていた。
ごくりと唾を飲み込むと、カラは大狼の動きに神経を集中させ、恐る恐る立ち上がった。
二匹の大狼は、カラの動きを見据えたまま動かなかった。　だが、

立ち上がったカラに、足下の鼠達が次々と飛び付き、腕や足を齧り始め、上からは、大鴉が耳障りな鳴き声を上げながら、首筋や耳を鋭い嘴で突付き始めた。

「い、痛いっ、や、やめっ、やめろよっ」

カラは必死に、鼠と鴉を追い払いながら、なんとかアルの傍に歩み寄ろうとしたが、次々と襲ってくる獣達に邪魔をされ、アルの姿すら、なかなか確認できずにいた。

「カラ、どうしたの？　この声、鴉？　いったい、何があってるのっ？」

カラの声を聞き取った事で、僅かにでも安心したのか、アルの声はほんの少し潤んでいた。　カラは必死に身をよじり、獣達の間を数歩すり抜け、横目でアルの姿を確認した。

「ア、アルっ。　こっち、ここにい――てっ、いててっ、噛み付くなよっ」

「噛み付くって、いったい何が起こっているの？　この声、すごくたくさんの獣の声――それにこの臭い。　周りで赤く光っているのは、獣の目ね？　さっきから、私の身体を押し続けているのは、獣の頭なのね？」

カラの声が上がった方角に、アルは声を張り上げ呼びかけた。赤い光取り囲まれている事は分かっているが、目の利かないアルは、その姿を見ることが出来ずにいた。　見えない何かが、自分の身体を前に進ませまいと押し続けるので、じりじりと、アルは後方に下がり続けていた。　だが、自分に危害を加える気配は、全くと言っ

てよい程感じられなかった。

「ア、アル――動かないでっ。　そう、なんだっ。　すっごくたくさんの獣が、オレ達を取り囲んで――痛っ」

「カラどこ？　あんたはあたしが見えるんでしょう？」

「こっち、君の右斜め前――痛っ、噛むなっ、突付くなっ」

悲鳴交じりの声を頼りに、アルは目を眇め、カラの姿を見出そうとしたが、赤光の乱舞する以外、全ては闇に塗り込められ、見ることは出来なかった。

「カラ、叫び声でも何でもいいから、声を出してっ。　あんたの声で居場所を――っやっ、
なに――……」

アルの声は、言葉の途中で呻きに変わり、全く聞こえなくなった。

「アルっ、どうした――」

鼠と鴉を追い払ったカラは、ようやくアルの立つ場所へと視線を向けた。

目に飛び込んだのは、灰色の男に口を押さえられたアルの、ぐったりとした姿だった。

亡霊のように痩せやつれた男は、アルフィナを右腕に抱えながら、眼鏡をかけた骸骨の如き顔を、俯き気味にカラに向けていた。

「あ、あんた……だ、誰だよ。　アルに何を――」

カラはよろめく様に一歩、足を踏み出した。
灰色の男は、空いている左手を胸の前で、右から左へ、水平にすうっと動かした。
すると、それまで何の行動も起こさなかった大狼が、突然激しい唸りを上げ、牙を剥き、カラに飛び掛って来た。
とっさに身をよじり、喰い付かれるのを寸ででかわしたが、頭を下げ、牙を剥き出し、じりじりと迫ってくる大狼に、カラは壁際まで追い詰められ、アルに近付くどころではなかった。
うろたえるカラの正面から、くっくっと忍び笑う声が聞こえた。
頭を上げると、男が愉快そう、大狼に追い詰められたカラを見ていた。

「あ、あんたがこいつらに命じてるんだろ？　な、何なんだよ、あんた。　アルを離せよ。　アルっ、アルっ。　目を開けてよっ」

カラは拳を握り締め、アルに呼びかけ続けた。　しかし、アルは完全に気を失っているのか、だらりと身体の力が抜け、目は閉じたまま、指先一つ動く気配はなかった。
離れているためか、まるで、息すらしていないように、カラには見えた。
すうっと、血の気が引いた。
頭の芯が痺れ、視界が薄く霞んだ。
少しでもアルに近付きたかったが、二匹の大狼は、牙を剥き出したままカラ威嚇し続け、動く隙を与えてはくれない。

「アルを離せ、アルを離せよっ」

焦りと怒りに唇を噛みながら、カラは男を睨みつけた。
蒼白く頬の削げた顔に、丸い銀縁の眼鏡をかけ、ゆったりとした長衣を着ていてもなお、ぎすぎすと痩せていることが判る身体は、

酷い猫背をしている。
髪は、白髪に黒髪が交じる斑様(まだら)で、着ている長衣も腰帯すらも、全てが色褪せた灰色をしていた。
足で立ち、アルを抱えているからには、生きているに違いないのだろうが、死人と見間違うほど、まるで生気というものを感じられなかった。
目線は、確かにカラに向けられているが、本当にカラを見ているのか判らない、虚ろな目をしている。

「聞こえてるんだろっ。　アルを離せよ。　あんたいったい、何なんだよっ」

声の限り、カラは怒鳴った。
カラの怒る様が面白いのか、猫背の男は口を左右に引き、引き攣(っ)れた笑い顔を作った。

「――君、人間なの？」

一瞬、誰が喋ったのか分からなかった。
あまりにしっかりとした、明るい声だったので、いま目にしている男の口から発せられた声なのだと、カラは分からなかった。

「そんなに透けている身体、始めて見たよ。それにその瞳、オスティルの瞳だ。　生きている状態で、初めて見たよ。　本当にこんな闇中でも、見えているんだね？　それ、君の生まれながらのモノなんだろう？　――ああ、ごめん。　その前に質問に答えなきゃだね？　僕はセナといってね、〈操骸師〉を生業(なりわい)にしているんだ」

セナは、俯きぎみだった顔を上げ、カラの顔にはっきりと焦点を合わせた。

「そ、そうがいし――？」

「術師の一種だよ。〈屍術師〉とも言われているけどね。この獣達。死んでいるんだ。可哀相にね、ただの屍体として、捨てられる運命だったんだ。でも、綺麗だろう？　このまま打ち捨てられ、朽ちていくなんて、可哀相だろう？　だからね、屍体に薬を塗って腐敗を遅くして、抜けてしまった魂の代わりに、捕まえた小精霊を入れるんだ。そうすると、ほら。この獣達のように、また自分の足で動く事ができるんだよ。――もっとも、自分の意思では、動けない。僕の命じたままにしか、動けないのだけどね。だから、僕はこの獣達にとっては親みたいなもの。それとも、エランのような、神、のような存在かも知れないな」

目を細め、うっとりと笑うセナを、カラは拳握り、睨みつけた。

「ねえ、君。ひょっとして、大きな呪いを受けているのじゃない？」

「な、なんで――……」

”呪い”という言葉に反応したカラに、セナは口の端を上げ笑った。

「ふふ。その透けた身体。ひょっとして、《影》、ないんじゃないの？　そうだ。君、《名》は？　ちゃんと持っているのかな？　僕に君の名前を、教えてくれるかい？」

セナは眼鏡越しに、カラを値踏みするように見回した。カラは、セナに自分の呪いを知られては危険だと感じた。理由などはなか

ったが、普通の人に知られる以上に、危険なことに感じられた。

「ア、アルを離せ。　早くアルを離――っ」

言葉を言い終わらぬ内に、カラは左腕に、激しい衝撃を受けた。

一匹の大狼ががっちりと、カラの左腕に喰らい付いていた。

腕を咥(くわ)えた大狼は、腰を落としてカラを引きずり、時に頭を激しく振って、カラが力尽きるのを早めようとした。

引きずり倒そうとする大狼に、カラは力で抗ったが、鋭い牙が腕の皮膚を割き、肉に喰い込み、骨が軋(きし)んだ。　あまりの激しい痛みに、カラは堪らず悲鳴を上げた。

その様を、セナは笑って見ていたが、しばらくすると、口の中で何かを呟き、右から左へ、手を水平に払った。　すると大狼は突然口を開き、カラの腕から離れると、数歩後ろに下がり、もう一匹と共にべたりと地に伏せた。

開放されたカラも、地べたに座り込み、腕を押さえ、蹲(うずくま)り呻いた。

「人の質問に、ちゃんと答えないから、罰をうけるんだよ。　ま、今回だけは、これくらいで大目に見てあげるよ」

セナはくっくっと笑いながら、カラを見た。

カラは唇を噛み、血の滴る腕を押さえながら、痛みに眩む目でセナを睨み上げた。

セナは、ぐったりとしたアルを抱え上げると、すぐ傍に控えていた三本角の大鹿の背に、うつ伏せにアルの身体を乗せた。

「――アルを、どうするつもりだよ」

カラはよろめきながら立ち上がり、アルに近付こうと足を踏み出した。　だが、カラの動きに合わせる様に、大狼も立ち上がり、再

び牙を剥き、カラを威嚇し始めた。

「このお嬢さんは、お招き予定の客人のようだから、お連れするんだよ。　何か問題でもあるかい？」

アルを乗せた大鹿の首を、セナがポンと叩くと、大鹿はゆっくりと歩み出し、数歩も歩まないうちに、その姿は闇に溶け、消えていった。

「だけど――君は、招待客の名簿には載ってないみたいだから、本当は僕、君を始末しなければいけないのだけど」

セナは、乾いた薄い唇を舐め、カラをじっくりと、宝物でも鑑賞するように見つめた。

「君、とても面白いから、僕が、君をお持て成ししようかと思ってね」

カラはこの時始めて、眼鏡の奥の、瞳の異質さに気が付いた。

先から、セナは一切の光がない闇の中で、間違いなく自分を見て、話している。

「あ、あんたの瞳――」

セナは眼鏡を指で下ろし、瞳を見せた。

金色――だった。

「これ？　そうだよ。　君と同じ、オスティルの瞳だよ。　もっとも、僕の元の目は茶色、だったかな？　もうずいぶん昔に捨ててしまったから、よくは覚えていないけれど、面白くない、ただの目だ

った」

「元の目って――」

「この素敵な瞳は、貰ったんだ。　だって、死んだ人にこんな宝物、要らないだろ？　我ながら上手に取り外して付け直せたと思うよ。　傷が入ったらお終いだからね。　でも、悔しいな。　やっぱり本物の、生来の持ち主だと、その瞳は光り輝くんだね。　僕のは金色というだけだ。　ああ、話に聞いたとおり、満ちた月の輝きだ。皓皓（こうこう）とした、闇を照らす美しい宝石だよ。　君のは、僕のより断然質がいい。　同じオスティルでも、等級が全く違う。　だけど、君。　まだ半分も、使い方を知っていないようだね？　なんて、もったいないことだろう」

セナは謳（うた）うように、言葉を吐き続けた。

セナが喋っている間、カラは身じろぎひとつできずにいた。　大狼に噛まれた傷が熱を持ち、激しく脈打つ。　傷から生じる熱が全身を火照らせ、脂汗が流れる。

「本当にさ、生きていると、いいことがあるよね――」

言葉を止めると、セナは再び、胸の前でゆっくりと、左手を払う動きを始めた。

＊＊＊

地下大堂より西に伸びる地下道を、レセルは大股に歩いていた。

地下道は大堂を起点に、キソスの町の地下に、蜘蛛の巣のように張り巡らされている。

町の地下を、縦横無尽に伸びる地下道を用いれば、一度も地上に

出ることなく、キソスの何処へでも行く事が可能だった。
だが、この秘密の道を通ることが出来るのは、大神殿に深く関わる一部の者だけで、町の人々は、その存在すら知りもしない。
地下道は迷路の如く、幾本もの道が複雑に交差しており、もし、道を知らぬ者が進入すれば、目的地にも、元来た道にも戻れなくなる危険があったが、現在レセルの進む道は、枝分かれすることなく、ひたすら真っ直ぐ進めば目的の空間に辿り着く、この地下には珍しい単純な道であった。

固い岩盤を掘り抜いただけの壁面は、ごつごつと粗く、手燭の灯りに照らされ、ゆらゆらと、歪(いびつ)な影を作り出す。
あまり動く事の無い空気は凍え、意思を持つかのように、地下を行く者に覆い被さり、凍えた圧力で歩みを遅くし、じわじわと体温を奪っていく。

目的の空間が近付くと、レセルは僅かに眉を寄せた。
流れの乏しかった地下道の空気が動き、独特の異臭が漂い始める。
様々な薬草と、その陰に紛れた血の臭い、そして腐敗臭。　幾度嗅いでも、胸の悪くなる臭いだった。

目的の空間――操骸師の部屋の扉を、レセルは三度敲(たた)いた。
内からは、何の応えも返って来なかった。

「セナ。　おらぬのか？」

いま一度扉を敲きながら、レセルは部屋の主の名を呼んだ。　しかし、やはり応えはなく、止むを得ず、レセルは鍵の無い扉を開いた。
扉が開かれた途端、燻(くゆ)らせた香煙と共に、例の悪臭が、レセルを迎えた。　眉を顰(ひそ)め室内に入ると、部屋の主であるセナは、次部屋

の中央に描かれた円陣の真ん中に、目を見開いたまま倒れていた。
円陣の周囲には、香と塩を載せた皿が置かれ、セナの口には、半透明の石が咥えられていた。

「――飛魂の術か」

レセルは、呪術の知識はほとんど無かったが、セナが現在、魂だけを別場所に飛ばす術を行っていることは分かった。
灰色の長衣を着た、骸骨と見紛いかねない風貌の操骸師は、この広大な地下空間に入り込んだ異物を、処理する役割を担っていた。
侵入者が現れた場合、セナは実体を残し、魂だけで侵入者の元へ行き、始末するのだとオリ＝オナは言っていた。

――では、あの蛇の男が言った侵入者は、真にあった、ということか――

地下大堂で、レセルとオリ＝オナが話していた最中、蛇顔の男が現れ、地下に侵入者があった事を告げた。
一人は、旅籠の娘であることを、蛇顔は確かな口調で報告したが、いま一人のこととなると、蛇顔の記憶は曖昧になった。
子供であったと、蛇顔は開口一番に告げたが、話している内に、それが本当に子供だったのか、他の何かだったかも知れない、と、曖昧で要領を得ない内容に変化していった。
ただ確かな事は、旅籠の娘と行動を共にしている何かがいる、ということだった。
蛇顔の報告を聞いたオリ＝オナは、レセルに地下の番人であるセナの所へ行くよう命じた。　セナが術の最中であれば、侵入者は確実にいたことになる。

「まだ、捕らえられてはおらぬか」

室内に、子供の姿がない事を確認し、レセルはふっと、肩の力を抜いた。
旅籠の娘は、決して殺される事はない。
この地下に集う全ての者は、あの娘を傷付けることなく、オリ＝オナの元へ連れて行かねばならないことを周知している。
それに対し、他の侵入者は、如何なる者であれ、生きて地上に出してはならぬと厳命されている。
だが、オリ＝オナは「娘と共に進入したものを、生きたまま、ここへ連れて参れ」と、レセルに命じた。

――あの蛇の男の報せの、何が心に掛ったのか――。

寸前の出来事であるにも関わらず、蛇顔の記憶は混乱し、話す内容は支離滅裂で、レセルは信憑性に欠けると感じた。
娘が侵入してきたのが旧宝物庫から、という話が、まずあり得ないことだった。
三階の破損部までよじ登らない限り、子供が宝物庫側から侵入することは考えられない。　破損部まで登りきること自体が、握力の乏しい少女には、到底不可能な行為である。
蛇顔は、「大扉を開けて入ってきた」と言い張っていたが、大人六人がかりでようやく開く事の出来る重い鉄扉を、子供が開けることなど、出来よう筈もない。
だが、そのように指摘をしても、蛇顔は、そちらから侵入してきたのだという主張を曲げなかった。

――老師は何かを、気に留めた。　娘のこと以上に、もう一方の侵入者に、大きな注意を向けていた。

「あの娘が、行動を共にする者――」

ひとり呟きながら、円陣の中に倒れているセナに視線を移すと、セナの足下に描かれた紋様のひとつが、淡い光りを放ち始めた。
見る間に、光は柱の様に天井まで伸び、床の紋様部には黒い洞(うろ)が生じた。　しばらくすると、洞の中心から、ずるりと、三本角のある大鹿が姿を現した。
現れた大鹿の眼窩に眼球は無く、時折、熾(おき)の如き赤光が、頼りなげに明滅をしていた。　足取りは覚束なく、今にも足を折り倒れそうだった。　腹に開いた黒い穴から、時々ぼたりと、赤黒い塊が落ちる。　それは、崩れ落ちた肉体の一部だった。

「屍の鹿――操骸の禍術(まがじゅつ)か」

レセルは眉を顰(ひそ)め、大鹿から視線を外そうとした瞬間、長い髪を編んだ少女の姿を、大鹿の背に認めた。

「アルフィナ――」

レセルは大鹿に寄り、背の少女を下ろそうとした。　しかし、レセルが陣内に足を踏み入れた途端、大鹿の眼窩の赤光が燃え立ち、頭を大きく上下させ、巨大な角を突き付けるように、レセルを威嚇し始めた。
大鹿の急な動きで、背に乗せられていたアルフィナは床にドサリと落ち、小さな呻き声を上げたが、閉じた目を開けることはなかった。
大鹿は、身軽になった身体を大きく振るわせると、天に向けて鼻をひくつかせ、いびつな奇声を上げると、レセルに突進してきた。
レセルは大鹿の突きをかわすと、すれ違いざま腰の大刀を引き抜き、大鹿の首を深く斬った。　大刀の刃は厚く、大鹿の首に正しく切り込んだが、一太刀で落とすには、大鹿の首はあまりに大き過ぎ

た。
大鹿は、斬られた傷からどろりとした赤黒い液体を流した。　それが床に落ちると、部屋に漂う悪臭はより濃厚になった。
深手を負いつつも、大鹿は何も感じていないかのように、ぐらつく頭を振り、再びレセルに突進を始めた。
レセルは大鹿の突きを寸ででかわすと、中央の角を掴んで大鹿の身体を押さえ込み、半ばまで斬れた首を、一気に掻き切った。
大鹿の頭はごとりと床に落ち、身体は、糸の切れた操り人形のように、ぐしゃりと床に崩れ、動かなくなった。　首を掻き切る際に、頬飛んだ液体が熱を放ち、皮膚を焼かれるような痛みが走った。

「まさに毒だな――」

レセルは袖口で頬を拭いながら、床に倒れているアルフィナの傍に寄り、膝をついた。
アルフィナの顔は蒼白く、あちらこちらに擦り傷を負っていた。
乱れた髪の中から、行く筋かの白い髪が見え隠れしている。

「――無謀な事を……」

額に乱れかかった髪を梳いてやりながら、レセルはアルフィナの顔を見つめた。
幼い頃から気が強く、男顔負けの行動力を見せる娘には、いつもすり傷が絶えないと、娘の祖母がこぼしていた。　この気の強さは、いったい誰に似たのかと、苦笑しながら話していた。
――彼女も、思いがけぬ行動をすることがあった。
眉間の傷が鈍く疼いた。
瞼を閉じると、赤く染まった床に倒れる女の姿が、まざまざと甦

った。
頭を振り、レセルは記憶を払い落とすと、アルフィナを抱え起こした。　この時になって、少女がいつも首に下げていた、銀細工の鎖がないことに気付いた。

「騒ぎの中で、落としたか」

円陣の中央のセナは、大鹿の騒ぎがあってもなお、意識の戻る気配は無く、見開いた虚ろな目を天井に向け続けている。

――未だ戻らぬということは、やはり他にも侵入者がいた、ということか――。

レセルは、いま在る部屋の奥に連なる、薄暗い一室に視線を向けた。　薄闇の中で、不安定な赤い光が瞬いていた。　獣の弱々しい唸りが、切れ切れに聞こえてくる。
アルフィナが、あの地下に忍び込み求めたものは、一つしか考えられない。　師と慕う騎士に従う、聖獣グリフィスの奪還。
それならば、アルフィナと共に忍び込んだ者もまた、同じ目的を持っているに違いなかった。

「岩牢か――」

レセルは、アルフィナを部屋の隅に横たえると、円陣の中心にあるセナを見据えた。

3：操骸師（後書き）

次回、〈4：地下牢〉に続きます。

４：地下牢（前書き）

今回試しに、ひたすたら作者の自己満足な挿絵を、末尾に付けて見ました。

サイズが少々大きいので、携帯で御覧下さっている方には、不向きなイラストかもしれません。　予めご了承ください。

4：地下牢

4：地下牢

室のあるという、北側の一角に続く地下通路は、地下大堂へ下りる際に歩いた通路よりも薄暗く、空間を満たす、どろりと粘る淀んだ闇は、獲物を絡め捕ろうと張り巡らされた、見えない蜘蛛の巣のように、身体に纏わり付いては、通る者の歩みを遅くさせる。

手燭を持つトマを先頭に、ラスターが続き、その周囲を取り囲むように、まだ見習いであろう修道士が、左右に二人、後方同じく二人、一定の間を開け同行している。

白い修道服に身を包んだ彼等は、一様に俯き加減で無言、その足取りは慎重であった。

進むにつれ、通路は手燭の灯りなど意味を成さぬ程、更に黒く、濃い闇に満たされていく。

その場に滞る空気は、手先や足先、顔面など、皮膚を曝している部分に明らかな痛みを与える程、凍てついている。

幾つ目かの角を曲がった頃、進むべき道があるのかも見通せぬ黒闇の先から、微かだが、爽やかな香りが漂って来た。

香りは、進むほどに朧なものから確かな匂いへと変わっていく。

それは、陰鬱とした闇間には似つかわしくない、瑞々しく清らかな香りで、花盛りの果樹の木陰で休息を取っているような、心落ちつかせる芳しさがあった。

漂い来る香りに包まれるうち、死人の如く沈黙し、重い足を引きずるように歩んでいた修道士達は、固い縛めから開放されたように、表情は和らぎ、背筋は伸び、足取りは軽くなっていた。

だが、ラスターに先立ち案内するトマだけは、口を堅く引き結び、苦しげな表情で沈黙を守っている。
ラスターの周りを歩く四人の修道士達は、香りの影響で気が緩んだのか、仲間同士、横目で見交わし、無言の会話を行っては、ラスターと自分達の長であるトマへ、好奇と怖れと不満が混ざり合った視線を、フード越しに投げ付けていた。
トマは、そんな修道士達の行動に気付きつつも、注意の言葉も視線も投げず、また、ラスターへの警戒すら、一度も行うことなく、ただひたすらに、目的地に向け歩んでいた。
細い通路に入り、更に幾つかの角を曲がると、トマは黒い鉄扉の前で歩を止め、若い修道士に命じ、扉を引き開けさせた。

重い響きをたて鉄扉が開けられると、先から漂っていたよりも濃厚な香りが、堰を切り溢れ出る大水のように、通路にどっと流れ出して来た。
トマを始め、四人の修道士達は激しく咳き込み、ラスターもまた、息を止め眉を顰(ひそ)めた。
トマは咳をいち早く抑えると、ラスターに非礼を侘び、扉の中を指し示した。

「手狭ではございますが、こちらの室で、御身体をお休め下さい」

頭巾に覆われた頭を深く下げ、トマはラスターに、室内へ入るよう促した。　後ろに従っていた修道士達もまた、ラスターを囲むように立ち位置を変え、トマに倣い、頭を深く下げた。
ラスターが入室したことを、頭巾の端から確認すると、トマだけが扉の内に入り、残りの者達は通路で控え待つ姿勢をとった。
室内に入ると、トマは「命でございますゆえ」と断り、ラスターの足に枷を取り付け、代わりに手を縛めていた縄を切った。

足の枷には、室の隅の杭から伸びる長い鎖が繋がっており、ラスターが動く度に、ジャラリと、重い音が響く。

室内には、やはり香が焚かれていた。

甘すぎぬ、爽やかな香りを乗せた白煙が、ゆるゆると彷徨うように、室の四方に広がり漂っている。

室はさして広くはなく、大堂と同じ磨かれた青黒色の石が、床から壁、天井部に至るまで使用されていた。

窓ひとつない室内の四隅はかなり暗く、凍えた空気の所為もあり、通される者によっては、巨大な石棺に押し込められたような錯覚を覚えるであろう、閉塞された空間だった。。

壁際に置かれた、紫黒檀で拵えられた寝台と小卓、その上に置かれた真鍮の水差しと高足の杯、天井から吊るされた銀の香炉、硬い石壁に固定された燭台に灯る小さな炎。　それが、この室にある全てであった。

「後ほど、ささやかながら夕餉をお運びいたしまが、その前に、まずはこの果実酒で喉を潤し下さい。　この果実酒は、南部カイセルで収穫された白葡萄の中から、厳選されたものだけで醸造させたものでございます」

いつのまに用意されていたのか、銀の盆の上には、淡い金色の液体が注がれた、美しい切子の杯がひとつ載せられ、ラスターの前に差し出されていた。

盆を掲げているのは、一番年若い修道士であった。　顔は決して上げず、跪き俯いたままであったが、緊張が激しいのか、手足がガタガタと震え、杯の果実酒は、飛び散りなくなるのではないかと思えた。

トマは、杯を捧げている修道士とラスターの様子を、落ち着かなげに見ている。

「頂こう――」

杯を取ると、ラスターは躊躇いもなく、一気に金色の液体を飲み干し、揺れる盆の上へ杯を置いた。　盆を捧げていた修道士は、杯が戻されたのを知ると、そそくさと仲間の待つ通路へと戻った。

杯を干した後も、ラスターは何事にも関心がないかのように、無言で、揺れる燭台の炎に視線を向け続けている。

トマはその横顔をちらと見ると、胸元で手を合わせ、頭を深く下げる去辞の礼をとった。

先程から、酷い眩暈がトマを襲っていた。

冷や汗が流れ、深く息を吸うことができず、息苦しさに、視界が霞む。　一刻も早くこの場を去り、オリ＝オナに次の指示を仰ぎたかった。

「それでは、私は、これにて退がらせて頂きますが、何かご入用の品がございましたら、後ほど参る者にお申し付け下さい。　即刻、ご準備いたしますゆえ」

眩暈に耐えながら、言葉を言い終えると、トマはふらつきながら、いま一度深く頭を下げた。

「”再会を祝して、杯を交わしたい”」

唐突なラスターの言葉に、トマは思わず伏せていた顔を上げ、その横顔に瞠目した。

「――は？」

「戻られたら、大神官殿に伝え頂きたい。　酒は、こちらが用意を

しよう。　杯は――そちらで選ばれたものを、と」

言葉を終えると、ラスターはトマの顔に視線を移した。　何の感情も見せない青の瞳が、トマの姿を映している。

トマが、ラスターの姿を直視したのは、これが初めてだった。

噂に違わず、女と見紛う程に麗しい、端整な容貌の青年だった。

その姿は、髪型を除けば、神殿で見慣れた神像そのものである。

白い顔の中で、鮮やかな天青の瞳に、燭台の光りが揺らめき輝くことで、この青年が石像や人形ではなく、生きた人間であることを、トマに思い起こさせる。

我知らず見つめていると、不意にラスターが微笑み、口を開いた。

「もう、戻られるがいい。　これ以上この部屋に留まれば、そなたの命は、消える」

「そ、それは……いったい――」

思いがけぬ言葉に、トマは曲げていた背を伸ばした。　それは、ほんの僅かな動作だった。　だがその動きは、更に激しい眩暈と息苦しさをトマに与えた。

真っ直ぐに立つ事が出来なくなり、トマは崩れるように膝を折り、床に座り込んだ。　両腕でなんとか上半身を支えてはいたが、腕は激しく震え、今にも倒れてしまいそうだった。

俯いた鼻先や顎から、脂汗が黒石の床に滴り落ちていく。　ぽたりぽたりと、滴の落ちる微音が、静寂の室内に、妙に響いて感じられる。

「この室に焚かれている香には、エガが含まれている」

ラスターの言葉に、トマは目を剥いた。

エガといえば、ほんの微量で数百人の命を奪えるという、無味無臭の猛毒である。　高山に自生する植物の種子から、極僅かしか得られぬ稀少品ゆえ、滅多な事では用いられることのない毒だと、トマは耳にした事があった。

「な――そん――……」

懸命に言葉を続けようとしたが、身体がとうとう音を上げ、トマは泡を吹き、完全に床に崩れ落ちた。

ラスターは、倒れたトマの傍に膝を着くと、その容態を窺った。

トマは白目を剥き、呼吸は浅く速く、時折痙攣を起こしている。

通路では二名の者が同じような症状に陥ったらしく、残り二名が、苦しげな息の下で、仲間の身体を揺さぶり、名を呼んでいた。

トマの意識が混濁し、動けないことを確認すると、ラスターは寝台の掛け布を剥ぎ、一端を固く二・三段に結ぶと、吊るされた香炉に投げて巻き付け、床へ引き落とした。　落ちた香炉を布で包み、煙を漏らさぬようにすると、ラスターはトマを仰向けにし、衣を緩め、胸部を三ヵ所指で突いた。

しばらくすると、トマの呼吸は穏やかな、規則正しいものに変化し、意識が戻り始めた。

呼吸の安定を確認すると、ラスターは左手の手袋を外し、指に傷を付け、トマの口に一滴、血を垂らした。　次いで、額に傷のない指を当てると、聞き取れぬほど小さな声で、詞(ことば)を呟いた。　トマの耳には馴染まぬ、古い詞のようだった。

「……な……にを――」

重い瞼を上げ、トマはラスターの顔を見上げた。　ラスターは、手袋をはめながら無表情に、トマを見下ろしている。

まだ力の戻りきらぬ腕で、何とか身体を支え上半身を起こすと、トマは改めてラスターの顔を怯えたように見上げた。

「私に――何を……」

ラスターは、トマの耳元に顔を近づけ、トマの問いに答えた。その言葉に、トマは目を見開き、よろけながら立ち上がった。

「――わ、私……こ、れにて、失礼を――」

己を見据えている青の瞳から逃れるように、トマは顔を奇妙な方角に逸らせ、去辞の礼もそこそこに、室の外へ転び出て、鉄扉を乱雑に閉めた。

口早に、倒れずにいた修道士に命じ、施錠と封印の呪を施させると、慌しい足音を響かせ去っていった。

足音が遠ざかると、入れ替わるように女の含み笑いの声が、灯火の光届かぬ隅の闇から響いてきた。

『滑稽な奴等だねぇ――』

女としては低音の、独特の艶のある声は、嘲るような笑いを漏らし続けている。

「――カナル」

ラスターは、声の方角へと視線を向けた。

『どうだい、あの慌てよう。　鍵を七つに封印の呪符を五枚貼っておいでだよ。　しかし、足枷はするが、手の枷は無しかい？　剣を

取り上げ、足の自由を奪うだけで、外には看守の一人も置かぬとは、お前も、舐められたものだな。　ユーシィス』

燭台に火を灯したように、闇の中心に白い円光がぽぅと生じ、それは次第に大きく広がり、人の姿へと変化をしていく。

『ま、大した持て成されようではあるか。　エガ入りの香とは。一息吸えば夢心地、ふた息で自我を失い、次の呼吸で永久の眠りへ誘うとかいう、なかなか物騒な代物だろう？　相当値が張るものだと、ナハが言っていたよ。　極僅かといえど、この量で、ナハの一年分の稼ぎになるんじゃないか？　――あの酒も、なかなか高級そうな毒酒、だったろう？』

闇中に姿を現し終えると、カナルは愉快そうに、切れ長な緋色の瞳でラスターを見下ろした。

「――そのようでしたね」

『〈聖血の器（エラノール）〉に効く毒の研究でも、するつもりかね、金の掛るこった。　しかし、常人（つねびと）と異なるというは、こういった場合、便利なものだろう？　ユーシィス。　それとも――他者と同じように、”アラスター”と、呼んだ方がよいか？』

「御随意に」

カナルは、しばし無言でラスターを見据えると、額に掛る黒髪をかき上げ、皮肉げな笑みを浮べた。

『相変わらず、可愛げの欠片もないガキだ。　見かけも中身も、いけ好かないシーラと、実によく似ている。　花の如く麗しい容貌、

柳の若木の如き肢体。　その内に隠された、毒と荊の棘。　お前らは、内面の毒がなくなれば、美しいその外面にも、陰りが出るのであろうな』

語りながら、カナルは灯明の灯りの届く場へと、足音無く姿を移動させていく。

褐色の肌に白い衣を纏ったカナルの、艶やかな黒髪に縁取られた彫りの深い、鼻筋通る華やかな顔立ちは、彼女の強烈な意志の強さを如実に表している。

『ま、そんなことはこの際どうだっていい。　――調べてきてやったぞ』

それまで浮かべていた笑みを引くと、カナルは腕を組み、ラスターを見据えながら話を始めた。

『ナハが捕らえた〈狩り人〉の話によれば、このキトナ大神殿の地下が〈正神聖教（シン・エルナイ）〉の地下教会となっている。　といっても、仮のようだがな。　大神官が、東方の教区長を務めている。　〈狩り人〉の長は〈総帥〉と呼ばれる老いた女で、その女の指示で、聖獣狩りを行っているという話だ。　総帥は、お前が察した通り、精霊王殿より、あの”二宝”を持ち出した、件の巫子だ』

「――姿を、確認されたか？」

ラスターの声は平坦であったが、青の瞳に、極僅かだが揺らぎが生じた。

『見たから断言している。　かなり衰えておったが、あれはあの巫子に間違いない。　しかし、流石なお前も、ここでそんな奴と出く

わすとは、想像していなかったようだな？』

ラスターは寝台に腰を下ろすと、膝の上で両手を組み、思案気に瞳を伏せた。　カナルはラスターの正面に立つと、右の指二本を己の眉間に当て、同じ指でラスターの額に触れた。　一拍の後、額に触れたカナルの指先が、ぽうと、淡い光りを放ち始める。

『地下の見取りだ。　一度しか見せん。　しっかり頭にお入れ。岩牢、地下祭壇、施術の間、屍室、大堂――そしてここがお前の封じられている、西翼地下の独房棟だ。　祭壇の奥には隠し部屋が連なっている。　この部屋は、妙に厳重な呪いが掛けてある。　恐らくは、お前が探し求める奴が、この中にいるのだろうが、下手うって気付かれても面倒だからね、中までは確認をしてはいないよ。自分で確認をし』

「承知した」

『全ては地下道でつながっているが、余分な通路も多く造られている。　誤った道へ入れば、そこに待ち構えている屍獣や小物の魔の者に襲われる。　この地下は、まるで迷宮だ。　〈地の者〉であるあたしすら、容易に忍び込ませぬ程、奇怪な結界が蜘蛛の巣の如く張り巡らされている。　糸に触れずお前の居所を探し当てるにも、苦労させられたよ。　ここには、ロクでもない術師がいるようだ。　人間のみならず、精霊であろうと、この地下に忍び込めば絡め捕るつもりの、強欲な毒蜘蛛がいる。　そやつはあろうことか、捉えた〈地の者〉を、屍体に封じて仮魂にしているらしいが、我等〈地〉への、許し難い行いだ。　捨て置けないね』

ラスターを見下ろしながら、カナルは吐き捨てるように言い放った。　怒りに近いその表情は、カナルの艶やかさを引き立てる。

「これしきの結界、貴女ならば破るは容易(たやす)かろう」

『あたしはキソスでは余所者だ。　キソスの〈地の者〉を措(お)いて、あたしが先に何かを起こすは、我等〈地の者〉の礼に反する。　地の長であるナハが、礼を尽くしてキソスの者に協力を仰いでいるよ』

「〈地の四王〉の一人である貴女が、下位の者への礼をそこまで重んじるとは、少々意外ですね」

無表情に言い放ったラスターの言葉に、カナルは眉を上げ、明らかに不機嫌となった。

『他人の働きを恃(たの)んで、自ら虜になり、楽をして乗り込んだ奴がよくもお言いだよ。　まあ、いい。　すぐにでも動けるよう、このあたしが、下見をしてやったんだから、さっさと行動に移して、結果をお出し。　イリスミルトの小娘とお前の連れの小僧が、蜘蛛の巣に掛っているようだったぞ』

ラスターは伏せていた瞳を上げ、カナルに視線を向けた。

『お前の相方の有翼獣を探しに忍び込んだのだろうさ。　イリスミルトに頼まれて、ナハが面倒をみるとは言っているが、あれは謀殺は出来ても、立ち回りには向かん』

「無理をせずともよいと、ナハには伝えてあります。　カナル、御助力感謝する。　だがここからは、貴女の半身を守る事にのみ、徹されるがいい」

ラスターの言葉に、カナルは片眉を上げた。

『娘はともかく、小僧は、奴等が何も気付かぬままなら、殺されかねんぞ』

「ここで果てるならば、あの者の命運はそれまでだったということ」

カナルは、伺うようにラスターの顔を見据えたが、その表情に何ら変化は現れない。

「ナハは何処に？」

『――西郊外の丘だ。　旧宝物庫から地下に向かっている。　あの丘に居る〈地の者〉の話では宝物殿の扉を押し開いて、子供が入ったと言っておったのでな。　エアルースもあちらの入り口を勧めた。　ユーラの愛馬だった奴が言うのならば、まずは確実だろうさ』

カナルは腹立たし気に言うと、ラスターの顎に指をかけ、上を向かせた。

『――お前。　子供達を、”奴”を誘き出す餌に、しようというのではなかろうな？』

ラスターはカナルの指を外すと、閉じられている扉に視線を向けた。

「――子供達が、既に見つかっているのならば、ナハにも危害が及ぶ。　貴女も早くナハの傍へ戻られた方がいい」

『お前などに言われずとも行くさ。　だがな、ユーシィス。　――いや、アラスター。　お前にとって、その子供は、容易に切り捨て

られる存在ではあるまい？　もう少し、己の心底を見よ。　おまけにその子供。　万一、あの巫子の目に触れれば、正体が知れるは必至であろう？　利用されるぞ』

「その時は、あれ共々、私の手で始末を着けるまで」

さらりと言い放ったラスターに、カナルは眉を顰め、厳しい眼差しを向けた。

ラスターの鮮やかな青の瞳は、燭台の炎を映し揺らめいていたが、その表情は何を考えているのか計りかねる静けさである。

カナルは目を伏せ、大きくため息を吐くと、眉間を指で押さえながら舌打ちをした。

『まったく、ナハの気が知れないよ。　こんな冷血無情の輩と、付き合いを絶たないなんぞ、物好きとしか言いようがないね。　まあ、いいさ。　ああ、そういや、渡りの〈風〉に聞いたが、ティルナあたりでは、お前を早く戻したがっているって話だ。　お前の師も、お前を探しているようだ』

ラスターの顔に、僅かだが変化が現れたのを見て、女は艶やかな笑みを浮かべた。

「気になるのなら、まずは、さっさとここでのケリを付けちまいな。　こんな穴蔵の中にいたところで、何ら埒は明くまい？　――縛を解け。　さすれば、こんなチンケな牢など、お前ならば、簡単に出られるであろうが」

カナルの姿は淡く輝きながら薄れ、闇に溶けるように、すぅと、消滅していった。

カナルの去った薄闇を、ラスターは見つめ続けていたが、燭台の

炎が、微かな音を伴い揺れたのを機に、足枷の鎖に手を伸ばした。

「――確かに、甘く見られたものだ」

両手で鎖を持ち、左右に引いた。

鎖は、紙縒(こよ)りでも千切るように、容易に絶たれた。　縛めを解くと、ラスターはゆるりと立ち上がり、鉄扉の前へ歩み寄ると、硬く冷たい扉の表面に触れた。

「如何なる、結末を望むのか――キサ」

視線を手に移すと、ラスターはゆっくりと、両手袋を外した。

露わになった手首から五指の先に至るまで、暗赤色の刺青が、白い肌を綾なしている。

ラスターは右手の甲に左手を重ね、深く息を吐き出すと、静かに瞼を閉じた。

《我、精霊王シーラの血を護りし者。　アラスター・ユーシィス・ディアナ＝リージェス＝シン＝エラノールの《名》において、炎帝サーラムに告ぐ。　汝が霊を宿す我が腕、その封縛を今、解き放たん。　汝、我が声に眼を開き、我が声に耳を傾け、我が声に従うがよし。　古き盟約の下、今、この時より、我、汝が力を我が力とせん――》

詞を終えると、ラスターはゆるりと瞳を開き、右手を黒い扉に当てた。

＞i１４５５｜２４０＜

4：地下牢（後書き）

次回、〈5：逃走〉に続きます。

5：逃走（前書き）

今回も文末に、嫌がらせのように大きな挿絵があります。
表示される場合は、サイズ要領が大きい事をお含みおき下さい。

5：逃走

5：逃走

ようやく辿り着いた鉄扉の取っ手に手を掛けた途端、五尾の白狐がカラの左腕に喰らいついた。　足には何匹もの大鼠が、鋭い歯を立て齧り付いている。

「いっ、痛いっ――は、離せ――よっ」

カラの叫びに応じるかのように、手に握っていた羽根が紅い炎の如き光を放った。

その光に怯えたのか、喰らい付いていた獣達の口が緩んだ。

カラは目を固く瞑ると、右の拳で思い切り狐を殴り飛ばし、足の鼠達を紅く輝く羽で叩き落とすと、鉄扉を三分の一程引き開け、身体を滑り込ませ素早く閉めた。

地下道内に幾重にも反響する鉄扉の開閉音が、痛みに鳴き叫ぶ狐の声を、僅かだがカラの耳から遠ざけてくれた。

「こ、これで、少しは――休める、かな」

カラは手に握る紅金色の光を放つ羽根を見つめながら、大きく息を吐いた。

いったい、ここまで何頭の死獣を殴り飛ばしたか分からない。

カラの拳には殴りつけた獣の血がこびりつき、白い肌を赤黒く染めている。

いくら投げ飛ばしても、いくら打ち据え払っても、獣達は次々と湧き出し、カラを何処までも追いかけて来た。

力の加減をする余裕などはなかった。
動けないようにするには、二度と動けなくする――再び殺す、しかなかった。
力任せに殴りつけた結果、頭を砕かれ絶命した犬や狐、そしてあの狼の姿が、目に焼きついて離れない。
生きている獣と変わらない苦痛の叫びを死獣達は上げ、いずれの獣も最後はびくりと痙攣をし、動かなくなった。

「――う……――っ」

自分が殴り倒した獣達の姿が脳裏に浮かび、カラは吐き気を覚えた。　酷い胸焼けがして堪らない。　喉はカラカラに干乾び、熱い。

「うぅ――……」

俯くと、瞳に溜まった涙がこぼれ、ぽたぽたと床に染みを作った。
死獣達はとうに死んでいる。
動くのは、術に操られているからであって、痛みも何も感じはしない――。　そう自分に言い聞かせ、獣達を力で払い続けた。　しかし、死獣達は殴られる度に悲鳴を上げ、負った傷からは、どす黒く粘り気はあるものの、血に近い液体を流した。　そんな生きた獣に大差ない反応が、カラを苦しめた。

「――全部、あいつが悪いんだ。　あいつが、獣達をこんな……こんな――」

セナと言う操骸師の、血の気の無い髑髏（どくろ）のような顔が浮かんだ。
拳に力がこもる。

――憎い。　憎い。　あんな奴、――シテシマエバイイ。　イマノ

ボクナラソレハ
キットデキル――。

これまでに感じた事のない程熱く、滾(たぎ)りうねる様な感情が、胃の辺りで蠢(うごめ)いている。
それは生き物のように、上へ上へと突き上がり、外へ出たがっている。　これを解き放ってやれば、きっと、ドロドロとした不快な思いも消えるに違いない。　この渦巻くような荒い感情に身を任せたら、きっと、何もかもが上手くいく。　何故だか分からないが、そう思えてならない。

「――そう、だよ」

ふいに、笑いが込み上げてきた。

「そうだよ――あいつを、探そう。　あの、外にいる死獣を使ったら、奴の所へ、どいつかがオレを、連れて行けるんじゃないのか――？」

ゆらりと振り返ると、カラは閉じた鉄扉に手を伸ばした。
手が冷たい、黒い扉に触れようとした瞬間、手にしたままの羽根が再び鮮紅の光を放ち、光はカラの身体を包み込んだ。
カラは紅い光の波に飲まれ、ほんの僅かの間、息をすることができなかった。
光の波がひき、息が出来るようになると、カラは胸が焼ける感覚に見舞われ、間もなく胃液を吐き出した。　何も吐き出せる物がなくなると、先程までの荒々しい感情の昂ぶりも、洗われたように薄らいでいた。

「――胃液と一緒に、吐き出しちゃったのかな。　うぇ。口の中が

酸っぱ苦いや――」

口元を袖口で拭いながら、カラは扉に背を持たせ掛け、ずるずると滑り落ちるように座り込んだ。　全身に負った傷の所為で、何処もかしこも痛くて堪らない。

「いてて。　これ、唾つけて息吹きかけたくらいじゃ、どう考えても、治らないよなぁ……」

諦め半分で、カラは狼に噛まれた左腕の傷に息を吹きかけた。幾度か繰り返すうち、痛みは随分と和らいだが、かすり傷のようには消えてなくなりはしなかった。

「ま、ほとんど痛まなくなったから、いっか。　――でも、全身に息吹きかけるのは――やっぱり無理だよなぁ……」

カラは治療を諦めると、何もない天井を仰ぐように見上げ、足を投げ出した。

熱く脈打つ傷の痛みに眩暈がする。　このまま横になって眠ってしまいたかった。

伸ばした膝を抱え、頭を埋めようとして、カラの手は左肩の傷に触れた。

蛇顔の男に負わされた傷。　アルが、悪態を吐きながら治療してくれた傷――。

首からは、アルがかけてくれた銀細工の鎖が下がっている。　その先には、淡い光を宿すユーシュが揺らめいていた。

カラは唇を噛んだ。

鼻がツンと痛くなり、涙が溢れそうになったが、慌てて目を擦り、鼻をすすった。

「――アル……」

＊

アルが大鹿の背に乗せられ闇に消えた後、カラは赤い眼の死獣達に囲まれ、身動き取れずにいた。

セナが手を水平に動かすと、死獣達はカラを取り囲み、それぞれに威嚇の姿勢を取り唸り声を上げた。　二匹の大狼を先頭に、鼠、猫に狐、鴉、更には巨大な熊や大角鹿等、ありとあらゆる獣が、赤い虚ろな眼でカラを見据えていた。

「こらこら。　お客様を怖がらせてはいけないだろう？　もっとにこやかに、お迎えをしなくちゃだめだよ」

セナは、雲の上でも歩いているかのような、ふわりふわりとした揺れる歩き方でカラに近づいてきた。　セナと入れ替わるように、カラを取り囲んでいた死獣達は引く波のように四方の闇に消え、二匹の大狼だけがいつでもカラの喉笛に喰らい付けるよう、頭をを低くした体勢のまま残った。

「改めて、こんにちは、かな？　ここは一日中闇の中だから、時間の感覚がないんだよねぇ」

眼鏡を押し上げながら近づけられたセナの顔は、遠目に見ていた時の印象より若く、三十台半ばといったところだった。　間近で見ると、よりいっそう生気のない、血の気の失せた顔色で、肌は、どこもかさかさと細かな皺が寄り、髪も湿気た枯れ草のように、艶無くごわごわとしていた。

「――おや、君。　ひょっとして男の子？　あんまり小さいし、色

白だから、あの娘さんと同じ可愛い女の子かと思っていたよ」
セナがあまりに正直な驚きの声を上げたため、カラも素直に腹を立てた。
「な、なんだいっ、あんたの方がもっと青白いじゃないかっ。　肉の付いた骸骨みたいな顔してるじゃないか。　背だって、ひょろ長いばっかりで、男のくせに、てんで弱そうじゃないかっ」
ムキになって言い返すカラを、セナは面白そうに、観察するような目で見ていた。　その覗き込む瞳が、自分と同じ金色だという事が無性に癇(かん)に障った。
「アルを何処へ連れて行ったんだよっ。　返せ、アルを返せよっ」
カラはセナを睨み上げた。　眼力に殺傷力があるのならば、殺せるくらいの憎しみを込め睨みつけた。
セナは、カラのその視線がまた楽しいといわんばかりに、口を左右に引き笑った。　笑うと顔中に細かなシワが生じる。
「君、ひょっとして《影》を喰われたんじゃないの？　その身体、そのせいで透けているんだろう？　その割には、元気に陽の下で生きていたみたいだね。　君からは陽の匂いがするもの。　《影》を喰われると、光には耐えられずに、闇に溶け込んで、自我なんてなくなるって、聞いたのだけど。　ああ、君、何か護りを持っていたんだ。　君が未だに〈君〉であるのは、その護りのせいかな？　薄い光の膜が君を覆っている。　でも、今君を包んでいるのは残りカスだ。　君、その護り、ひょっとして失くした？」
セナはカラの身体を、じっくりと、値踏みするように上から下ま

で幾度も眺めた。

「あ、あんた、何言ってんだよ」

「ああ、なんだ。　まだ《影》が少し残っているね。　なるほど。　だから、自我が残っているんだね。　随分半端な喰われ方だ。　呪いをかけた相手は、今頃、大変かもしれないな。　知っているかい？　呪いってのはね、かけ損ねると、かけた術者の方が大きな痛手を受ける場合があるんだ。　君にかけられた呪いなんて、正（まさ）にそうだよ。　可哀相に、弱っているかもしれないな、そいつ。　ああ、そういえば、君の名前をまだ聞いてなかった。　ね、《名》はまだあるのかな？　それとも、喰われて思い出せないのかな？」

セナの問いに、カラは喉が詰まった。　何かが支えたように、自分の名前が頭に浮かばなかった。　慌ててカラは胸元のペンダントを服の上から握り、深呼吸をした。

「――あんたに、名乗る必要なんか、ないだろ」

カラはセナのやつれ顔をいよいよ激しく睨んだ。　カラの険悪な反応に、セナはため息を吐き、無造作に左手を横に払った。　その動きを合図に、先程カラに喰らい付いた大狼が、頭を低くし、鼻に皺を寄せ、激しい威嚇の唸りを上げた。

反射的に、カラは身体を引いて身構える。

怯えながらもカラは、大狼から視線を外さずにいた。　だが、大狼は威嚇以上の行動には移らない様子だった。

改めて大狼を見ている内に、その毛並みの美しさにカラは目を引かれた。

惚れ惚れとするような、大きくて精悍な体躯をしている。　その厚く豊かな銀毛の様子から、南方ではなく、北に暮らす古い一族の

狼ではないかと思い至った時、町中で聞いたエイリナの言葉が頭に甦った。

「……まさか、沙白狼――？」

「おや？　君、沙白狼を知っていたんだ？　今じゃほとんど見られない、珍しい聖なる獣。

つい最近、手に入ってね。　どうだい、美しいだろう？　この艶やかな白銀の毛皮。　今は赤い眼になっているけど、元々の眼は、この毛と同じ銀色の、それは美しい眼なんだ。　ちゃんと保管してあるから、君が見たいのなら、見せてあげるよ」

威嚇を続ける沙白狼に、カラは視線を戻した。　想像の中で描いていた以上に、逞しい野性を感じさせる美しい狼。

だが、その優れた姿に相応しからぬ、だらしなく開いた口からだらりと舌を垂らし、ぼたぼたと唾液のような液体を滴らせている様は、あまりにも奇異で、カラの目には哀れに映った。

眼窩の虚ろな赤い光が、涙に濡れた眼のように、不安定に揺らめいて見える。

引き締まった逞しい身体と、生気のない眼、緩みきった口元の印象は、何もかもがちぐはぐで、見ていることが辛かった。

カラは、この狼に噛まれた傷を押さえた。

どくんと、脈打ち痛む傷からは、血がまだ滴り落ちている。

「――それじゃぁ……ここにいた他の獣も、もしかして、みんな――聖獣なの？」

カラは俯き、震える声で尋ねた。

「いや、ほとんどはもう聖獣とはいえない、ただの獣だよ。　聖獣

と称するには、血が薄すぎる。　けど、この先の岩牢には、何種かの聖獣がまだ、生きたまま保管されていたはずだよ。　聖獣に、興味があるのかい？」

――アルが言っていた通り、やっぱり聖獣がいるんだ！

カラは表情を見られないよう、俯いたまま無言で頷いた。　その様子をみて、セナはクスクスと笑った。

「なんだ。　それならそうと言ってくれれば、見せてあげるのに」

「――本当に？」

カラは上目遣いにセナの顔を見た。　セナもまた、薄笑いを浮べ、金の眼でカラを見ている。

「もちろんだよ。　君が僕の招待を受けてくれるなら、いくらだって見せてあげるよ。　それより、君の瞳をもう一度、僕によく見せておくれよ」

セナはうっとりとした目で、カラの金の瞳を覗き込んだ。　声の明るさとは真逆の、陰気で虚ろなセナの眼差しに、カラは耐え切れず目を逸らし、床に視線を落とした。

カラの手も足も、絶えず小刻みに震えている。　そんなカラの様子が余程楽しいのか、セナはくすくすと笑いを漏らしながら、明るい声で言葉を続けた。

「ああ、本当に、なんて綺麗な瞳なんだろう。　――そうだ。　さっき君が言っっていたけど、僕の顔色、ずいぶん悪くなっているみたいだから、そろそろ、入れ物ごと替えてもいいかもしれないな。

君の身体は、まだまだ長く、使えそうだよねぇ。　ああ、でも、君の身体はその呪いが解けないと厄介だな。　僕はまだ七・八十年しか生きていないから、〈喰われ人〉に会うのは、君が始めてなんだ。　喰った相手がいないと、君の姿は元に戻しも出来ないんだよね。　ねぇ君。　自分の《影》を喰った相手、覚えているかい？　相当、禍術にのめり込んだ老魔術師か、魔物、そのものだろう？　そいつのこと、君、探し出せるかな？」

セナがカラを見続けていることは、目を逸らしていても肌で感じられた。

カラが何も答えず沈黙を続けていると、セナは大きくため息を吐いた。　主人のその行動に触発さえたのか、二匹の沙白狼は低い唸りを上げ、カラの周りをぐるぐると回り始めた。

「わかんない、か。　ま、それならそれで、久しぶりに調べがいのある対象が手に入った、と思えばいいんだな。　そうだよ。　そう考えると、嬉しいな。　楽しみがいっぱいだからね。

さて、改めて聞くけど、僕の招待を受けてくれるかな？　できるなら、生きたままで、色々と調べたいんだ。　君が協力してくれるなら、こいつらに君の喉笛を噛み切らせる必要はないんだけれど、嫌だというなら、君にはここで死んで貰わないといけなくなるな。

だけど、後で僕が君の身体を貰うためにも、出来るだけ綺麗な状態で、その身体を取っておきたいと思うんだよね」

セナはゆっくりと左手を上げた。　その手の動きに合わせ沙白狼は、姿勢を更に低くし、鼻面に深い皺を刻んだ。

カラの内で、〈闇森の主〉と向かい合った時と同じ凍える恐怖と、激しい嫌悪と怒りがせめぎあった。

この男は狂っている。　話す言葉の意味は理解できないけれど、まともな奴じゃない。

このまま、この男の傍にいては、危険――。

「この沙白狼を、どかせてよ――」

カラは更に深く俯き、胸の前で震える手を握り合わせた。

怯えた、哀れな子供の姿に、セナは満足を覚えたのか大きく笑うと、鷹揚に頷いて見せた。

「招待、受けてくれるのかい？　なんていい子なんだ。　もちろん、君が素直に来てくれるのなら、こいつらには何もさせはしない。約束するよ」

「……本当に？　だって、オレを見て、牙を剥いたままだよ」

涙を拭うように、カラは右手で顔をこすり鼻を啜った。

セナはくくっと笑うと、左手をゆっくりと払った。　二匹はセナの手の動きにあわせるように、後方へ下がり、床にべたりと伏せた。

沙白狼の従順を確認すると、セナはカラの耳元に顔を寄せ、囁くように言った。

「怖い思いをさせたね？　ほら、もう大丈夫だよ。　言ったろう？　こいつらは僕の命令なしには動けない、元々はただの屍骸。　だからもう、何も心配は要らないよ」

カラもちらと、沙白狼の様子を伺った。

二匹は床にべったりと伏せていた。　本当に死んでいるように、ぴくとも動かない。

「本当だね――」

カラは小さな子供が親に甘えるように、セナの胸元にすがり付き、震えた。
セナは、怯えた子供の行動に一瞬戸惑いつつも、くすくすと笑い、慰めでもするかのように、ポンポンとカラの肩を幾度か叩いた。
「そんなに怖かったのかい？　大丈夫だって――」
言葉の途中で、セナは身体がぐらりと揺れるのを感じた。　気付いた時には、両足は既に地から離れ、身体は宙にあった。
視線を下ろすと、セナの胸座と腰帯をしっかり掴み握った子供が、背負い上げるようにセナの身体を高く宙に放り上げた瞬間だった。
一方、セナを担ぎ上げた瞬間、カラは不安な違和感を覚えた。
――軽いっ……！
三ヵ月前、誤って男を死なせてしまった時の、男を持ち上げた感触と、あまりに違う。
手は確かにセナの衣を掴み、投げ上げた。　しかし、手に、肩に伝わる重みが、全くと言ってよい程感じられない。
困惑したカラは、投げ飛ばしたセナの身体を目で追った。　見上げた瞬間、見開かれたセナの目と目が合った。
セナは笑った。
そして、左手を払った。
宙に浮いたセナの身体は、闇に吸い込まれるように消え、それと入れ替わりに、死した獣達が、再び闇の中から湧いて現れ、沙白狼の後ろに集い始めた。
沙白狼を先頭に、死獣達はセナの意志を継ぐように、カラに牙を剥き、威嚇し、一斉に襲いかかってきた。
「う、わっ――」

オスティルの短剣を失くしたカラに、身を護るための武器は、自分の腕しかない。
カラは力任せに、喰い付いてくる死獣を殴り、蹴飛ばし、逃げ道を切り拓こうとした。
カラが動く度に、耳を聾(ろう)するばかりの獣の悲鳴が上がる。　獣の悲鳴は岩壁に幾重にも反響し、カラの耳を苦しめた。
次々と襲い掛かってくる獣達を払いのけるために、手で耳を塞ぐ事は出来ない。
殴る度に、手に残る獣達の肉体の感触に、カラは眩暈がしそうだった。

「や、止めてよっ。　お前達、もう、死んでるんだろっ、なのに、なんでっ――」

カラは、誰にともなく叫んだ。
助けて、助けて――。
口に出さず、幾度も心で叫んだ。　繰り返し心の中で叫ぶ内、終には口をついて「助けて」と叫んでいた。
すると突然、紅い炎のような光がカラの腰辺りから迸(ほとばし)り、地下道を満たす闇を切り裂いた。
突如溢れ出た紅金の光に、ほとんどの死獣達は恐怖の叫びを上げ、闇の中へ慌てふためき逃げ去り、消えていった。
だが、光に驚いたのは死獣ばかりではなく、カラも同じだった。
眩しさに目を細めながら光の源を探すと、紅い光は、カラのポケットから溢れ出していた。
カラは、慌ててポケットを探った。
ポケットの中からは、上階で拾った鳥の羽が出てきた。
羽根は燃え盛る炎のような、鮮やかな紅を帯びた金光を放ち、闇を射し照らした。

オスティルの柔らかな金色の光とは違う、激しい紅の光。
だが不思議と、オスティルに抱くと同じ安心感を、カラはその光に覚えた。
オスティルの光が月光の輝きならば、この羽根の放つ光は、陽光の輝きに似ている。
死獣は、明らかにこの羽根の発する光を怖れていた。　それがカラの援(たす)けとなった。
カラは、オスティルの短剣の代わりにこの羽根を護り刀として死獣達を払い、遠ざけ、どうにかこうにかアルが言っていた”もう一枚の扉”の中まで辿り着けたのだった。

＊

「不思議な、羽根だなぁ」
カラは、自分を助けてくれた羽根に目を向けた。
今の光は激しさではなく、暖かな丸みを帯びた優しさがある。
たかが羽根ではあるが、闇を照らし輝く様は、気高さすら感じさせる。
引き込まれるように、カラは淡い紅金の光を帯びる羽根に見入った。　見入る内に、心がすうっと、楽になってゆく気がした。
滲んでいた涙は、いつの間にか乾いていた。

「――行かなきゃ」

鉄扉に背を持たせ掛け座っていたカラは、のろりと立ち上がった。
アルの安否が気掛かりだったが、殺されることはないと、根拠のない確信をカラは抱いていた。
まずはガーランを探し出そう。　そう、心を定めていた。
ガーランを探し連れ戻すことが、この地下へ侵入した目的であり、

セナの話から、ここには間違いなく聖獣がいるということが分かった。　それならば、まず、最大の目的を果たすべきだとカラは考えた。　アルがここにいれば、それを望むだろうとも、自分なりに考えた結果だった。

カラは首に下がるユーシュのペンダントを握りしめた。

「――お願いします。　ガーランとアルを探し出して、一緒に、あの家に戻れますように。　みんな一緒に、一緒にいたあの家に戻れるように、力を、貸して――お願い」

瞳を閉じ、深く息を吸い吐き出すと、次に、自分の木のペンダントを握りしめ、側面に刻まれた自分の名と、護りの言葉の文字を幾度もなぞった。

「――見守って」

金の瞳を開くと、カラは正面を見据えた。

今進むべき通路は、先程まで死獣に追いかけられていた通路とまったく同じ造りをしており、うっかりすると、先程までと同じ道を歩いているのではないかという錯覚を覚えそうであったが、前方から、獣の唸り声と共に、家畜小屋より酷い、吸えた糞尿の臭いが漂って来ることで、先程までと違う場所にいることの確信が持てた。

空気も湿気を多く含み、じっとりと重い。

「いる――。　獣が、生きている獣が、いる」

カラは歩みを速めた。

手に握ったままの羽根は、幾分輝きの落ちた紅い光を放ち続けている。

しばらく進むと、歩廊に挟まれた三列の岩壁が突然カラの目に入

った。
獣の声は、これら岩壁の内から漏れ聞こえていた。　どうやら、この岩自体を刳り貫き、牢屋として使っているようだった。
恐る恐る、カラは右の歩廊に足を踏み入れた。　思った通り、岩には大小様々な扉がずらりと並び、覗き窓からは、獣の身体の一部が除き見える。
カラの臭いを嗅ぎ取ったのか、激しい威嚇の声を上げる獣が現れ始めた。　獣の叫びが岩牢内に反響して、カラは思わず耳を覆った。
いったい、何種類の獣が吠え哮（たけ）っているか分からない、耳を聾するばかりの音声の大波が押し寄せる。

「――まさか、この中からまた、死んだ獣……が出て来たり、なんてしないよね」

はっきりと姿が確かめられない獣の声に、カラは不安を抱かずにはいられなかった。　だが、怖れていては、先には進めない。

「ガーラン。　ガーラン。　ここにいる？　オレだよ、ガーラン、いたら返事をして」

カラは小さな声で、びくびくしながらガーランの名を呼んだ。
羽根の光で覗き窓をかざし、手近な岩牢から、その中の住人の姿を確認しようとした。

『おうや、小僧。　そりゃあ、グリフィスの羽の炎光ではないか？』

ししし、としゃがれ声は笑った。

＞ｉ１６８８－２４０＜

5：逃走（後書き）

次回、〈6：片目の蜥蜴〉に続きます。

6：片目の蜥蜴

6：片目の蜥蜴

「まったく、少しは考えてくれないかな。　術の途中で無理矢理呼び戻すなんて、僕の死を、君は願っているのかい？」

セナは口に咥(くわ)えていた石を吐き出すと、円陣の真ん中に胡坐をかき、恨めしげな声でぼやいた。　落ちかけた眼鏡を指で押し上げると、壁際に立つレセルに視線を向ける。

「あんたは死者の扱いに手馴れている上に、〈映月石〉ユーシュの護りがある。　簡単に死ぬ事はないと思ってな」

壁にもたれ掛りながら、レセルはセナを見据え、皮肉混じりに言った。

「へぇ？　君が、ユーシュの使い道を知っているとは意外だな？　ま、実際こうして無事だからいいけど、またやったら、あんたを殺すことにするよ。　あと、僕の可愛い獣をまた殺しても、同じだからね。　ああ、この大鹿。　従順でとても気に入っていたのに、首を落とされてしまったらもうどうしようもない。　この大鹿には、程々に使い易い〈地〉の精霊を仮魂として込めていたのに、そいつも逃げてしまった。　雑魚ならともかく、そこそこ力のある精霊を捕らえるのは、僕だって簡単じゃないんだぞ」

自分の横に倒れる大鹿の分離した頭と胴を見て、セナは小さくため息を吐く。

「それで、何？　僕は仕事の最中だったのに、それを頬をぶん殴って無理やり連れ戻すなんて、余程の用件なんだろうね？」

レセルに打たれた頬を摩りながら、セナは金色の眼でレセルを上目に見遣った。

「オナ老師からの命だ。　その娘と共に地下へ進入した者を、生きたまま連れて来いとのことだ。　あんたに殺されてからでは遅いのでな、術の邪魔をさせてもらった。　俺が捕らえ、この娘と共に連れて行く」

セナは猫背をやや伸ばすと、眼鏡の奥の目を見開き、驚きの表情を作って見せた。

「へぇ？　そりゃまたなんで？　地下への侵入者は、そのお嬢さん以外例外なく殺せってあれ程厳しく言っていたのに。　何？　あの少年のこと、オナ氏は既に知っているの？」

「もうひとりの侵入者は、少年――子供なのか？」

「そうだよ。　そのお嬢さんと同じ年恰好の、色白で可愛い男の子だ。　何より、あの子の持つオスティルの瞳が美しくてね、一度見たら忘れられない、とても素敵な子だよ」

うっとりと喋るセナの言葉に、レセルは眉を顰（ひそ）める。

「オスティルの瞳？　そんな希少な瞳を持つ子供だったのか？」

「そうだよ。　それもあれは、最上級に質の良い、伝承にあるエラ

ンの瞳そのまま、奇跡の瞳だよ。　オナ氏は知っていたから、生きたまま連れて来いと命じたのではないのかい？」

「いや。　あの蛇の男の報告からは、そんなことは一切分からなかった。　性別はおろか、人間の子供であることすら曖昧とした報告だった」

「蛇の男？　ああ。　あの、時々地下の見回りをしてるウスのことか。　あいつが最初に見つけたんだ。　それは仕方ないな。　あの子、そういう？呪い？を受けているもの」

口の端を引き、にたりとセナは笑う。

「呪い？」

「そう。　強力な呪い。　僕も始めて見た〈喰われ人〉。　正確には〈半喰われ人〉かな？　それでも呪いの効力は十分だ。　その呪いの所為で、あの子に会った者は、あの子のことを記憶に留めて置けない。　忘れ方の速さは個人差だけれど、僕でも、何もしなければ明日にはあの子の事、覚えていないかもしれない。　ウスなんかは、恐らく半刻も覚えておけないだろうね」

セナの言葉を聞き、レセルは蛇顔の曖昧な供述の理由が腑に落ちた。　だが、オリ＝オナはまだその少年の事を知らないはずだ。

それなのに何故、「生きて」連れ帰ることに拘（こだわ）るのか――。

「〈喰われ人〉とは何だ？」

レセルの短い問いに、セナはしばし無言を通したが、ふと、何かを思い出したように膝を打つと、レセルの顔を見て笑った。

「言葉のままだよ。　？喰われた？者。　《名》と《影》を喰われた、光ある世界を捨てた者。　姿は光に透け《影》を持たず、何者の記憶に留める《名》も持たぬ、何者でもない者。　白日の月の如く、そこに在るのに在ることを認知されない者。　この光ある世界では、存在して存在しない存在」

「白日の月？」

「昼、月が空にあっても、誰も気付きはしないだろう？　昼空に在るのは太陽であって月ではない。　月は昼には存在しない、見えるはずのないものなのだよ。　そう思っている者達には。　確かに在るのに、無き存在にされる、可哀相な白日の月」

セナは哀れむように胸の前で手を合わせ俯いてみせたが、その口元には皮肉の笑みが消えない。

「――《名》と《影》を喰われると言うが、いったい何者がそんなものを喰らう。　――魔物か？」

「さて、そうとは限らないけど、その可能性が高いね。　巨大な力を持つ、かなり高位の古の魔の者か、不死を求める、狂気の術師か。――何にせよ、そういった輩と取引をした結果、喰われるのさ。《名》も《影》も、本人の同意無しには、どんな巨大な力を持った存在でも、完全に奪う事は出来ないからね」

「取引？」

「そう。　何らかの願いを叶えて貰うことと引き換えに、それら《ふたつの宝》を差し出す。　だがあの子は、半端にしか喰われてい

ないようだったから、透けてはいても、まだ目に見える」

「――どういう意味だ？」

レセルの怪訝な表情を、セナは手の内でユーシュを転がし弄びながら愉快そうに眺めていたが、ぴたとその手を止めると、陣の中で立ち上がり、開け放たれたままの扉に視線を向けた。　その顔から、皮肉の笑みは消えている。

「――あの子は、面白いよ」

拳を握り締め、セナは突然気違いじみた甲高い笑い声を上げた。

レセルは無言のまま、笑い続ける男を見据え続けた。

「僕の獣達が払われ、半数は殺されてしまったようだ。　いったいあれは何だ？　あれは、本当にただの、人間の子供なのか――？」

＊＊＊

三列に並ぶ岩牢の内からは、無数の獣の声が溢れ出して来る。あからさまな怒りと僅かばかりの恐怖を混ぜ合わせた咆哮の大嵐。

肌に突き刺さる、生々しく激しい叫びの声は、牢内の獣が、先程までの死獣とは違う、生ある存在だとカラに実感させる。

『小僧。　お前、こんな所で何をしておる？』

耳にするものは獣の声ばかりと思い込んでいたカラは、明らかに自分に話しかけている、しゃがれた壮年の男の声に、どうとも反応を返すことが出来ず、身体を固くしたまま立ち竦んでいた。

『おい小僧。　それとも小童がよいか？　それとも餓鬼か？　とにかく何でもよいが聞こえんのか？　お前、その歳で耳が遠くなったか？　ワシなど、百を三・四百超えても、耳は達者だと言うに、近頃の人の子は嘆かわしいことだな。　身体も小さくひょろひょろとしておるゆえ、しようがないかの』

しゃがれ声はあからさまな呆れ声でぼやくと、大きすぎるため息を吐く。　その一連の言葉に、カラの縛めは解かれた。

「聞こえてるよっ、おっさんの鼻息だって漏らさずに聞こえてるからな。　おっさん、片鼻が詰まってるだろ？」

思わず大声を上げかけたが、自分の立場を思い出し、心持ち音量を下げて言い終える。

『ほう、よく分かったな？　その耳は使えるものであったか。　それは重畳（ちょうじょう）。　しかし言葉遣いがなっとらんな。　目上の者には、それ相応の敬意を払った物言いがあろう？』

ため息混じりに、しゃがれ声はカラに言葉を投げつけて来るが、何処にその声の主がいるのか見出せない。

言い返したことで、いくらかの緊張は解けたものの、姿の見えない相手に、カラは警戒を抱かずにはいられない。　よくよく考えてみれば、岩牢の守衛などがいてもおかしくはない。　そんな相手に見つかれば、カラは侵入者として捕らえられることは必至だ。

今更ではあったが、手にしたままの紅金の羽根を、カラはポケットに押し込んだ。　暗闇の中で光を持つなど、自分を見つけてくれと言っているようなものだ。

「――おっさん、どこにいるんだよ。　オレの姿が見えてるってこ

とは、近くから見てるんだろ？　オレを、捕まえに来たのか？」

上擦りかけた声で問いかけながら、カラは四方に視線を走らせ、自分を見ている人間の姿を探す。

しゃがれ声は、吠え哮る獣達の声にかき消されることなくはっきりと聞こえる。　それから推察するに、カラから相当近い距離にいるはずだとふんだ。

しかし、どんなに目を凝らしても、何者の姿も見出すことは出来ず、人間が隠れ潜む、押さえた息遣いさえも、闇の中に聞き出すことは出来ない。

次第に、カラは焦りと危機を感じ始めた。

そんなカラの緊張を察したのか、しゃがれ声はししと愉快そうな笑いを漏らした。

『小僧。　ワシの姿が見えぬで、相当緊張をしておるようだの？　怖ろしいか？　姿が見出せぬ事が。　お前の眼は闇をも見通す古の民の遺産。　それに頼り、常人ならば見えぬものまで見えるを当然と思うておるのであろう？　故に、見えぬが怖ろしいのであろう？　くく。　愚かよな。　見えるからこそ見出せぬ、慢心ゆえの盲目よ』

ししと最後に嫌味な笑いを付け加えるしゃがれ声に、カラの緊張は再び解かれ、言い返さなくては気が済まない腹立ちが先に立つ。

「うるさいっ。　なんだい、知ったふうなことばかり言ってっ。あんたにそんな事言われたくな――」

言いかけて、はたと、カラは同じような言葉を口にした事を思い出した。　その時も、同じように知ったふうなことを言われ、しかも癇に障るしゃがれ声で、癇に障る「ししし」という笑い声を必ず

付け足されて、無性に腹が立って――。

「あ――」

カラは慌てて目の前の岩牢の小窓を覗き込んだ。

『ようやっと気が付いたか、小僧』

岩牢の中には、猫ほどの大きさの暗黄色の蜥蜴（とかげ）が、悠々と寝そべりカラに視線を向けていた。　明るい宝石のような緑の瞳は右しかなく、左は潰れ閉ざされている。

「あ、あーやっぱりっ。　あの時の嫌味な蜥蜴っ！」

カラは岩牢の扉にへばり付くように中を覗き込んだ。　片目の蜥蜴はひとつ大欠伸をすると、くるくると光る右目でカラを見上げた。

『まったく、真横におるというにここまで気付かぬとは、お前、見た目どおり頭の回転も鈍いようだの。　よくまぁ、ここまで無事に生きておったものだ。　ま、運だけは有ると見えるが、自分で不幸を招き入れるはもっと得手そうゆえ、この先何時まで無事か、疑問の限りだな』

「はんっ。　ご心配ありがとうございますっ。　けど、おっさんも大変だよな。　こーんな狭苦しい岩の箱に押し込められてさ。　狭い臭い汚いの三拍子。　しかもここに閉じ込められてるってことは、あんたも〈狩り人〉に狩られたってわけだよな？　偉そうなことばっかり言う割に、間抜けだよなぁ。　でも、仕方ないね、自分のミスで捕まったんだからさ。　せいぜい一日でも長く、元気で生きていられることを祈ってあげるよ」

暢気な口調で失礼な事をぽんぽんと言う蜥蜴に、カラも精一杯の嫌味で応酬を試みた。

『気遣いするとは結構な心掛け。　だがな、ワシがこんな所に押し込められておるは、そも、お前の所為だぞ』

「なんでオレの所為だよっ」

詰め寄るカラに、蜥蜴はのんびりと欠伸で応じた後、顔を覗き窓の前に突き出し寝そべり直した。

『覚えておらぬとは言わせぬぞ。　お前、あの夜、闇森で何をした？　あのしょうもない魔物崩れと、くだらん取引をしたであろう？』

間延びするほど暢気な蜥蜴の言葉が、カラの古傷を抉った。　思い出したくもない、闇森の一夜。　あの夜の軽率な自分が、今の自分の境遇を招いたのだ。　忘れるはずもない。

「――見てたんだ。　おっさん、いなくなっていたのに……」

カラは俯き、ぼそぼそと言った。

『おお、見ておったとも。　愚かな人間の小僧がどうするかを、高みの見物しておった。　案の定、ワシの忠告を無視して、愚かな取引に応じおったなぁ。　呆れて笑えたぞ。　お前、厚かましくも奴にふたつの願いを叶えろと言いおったな？　長年、様々な人間を見てきたが、お前ほど無知に厚かましい人間はおらんかった。　それゆえ奴も、お前の要求に応えたのであろうな』

蜥蜴はこもり気味のしゃがれ声で、カラの傷を抉り続ける。　愉快そうにししと幾度も笑われたが、事実なので言い返すに言い返せない。

「――だからって、なんでおっさんが捕まったことが、オレの所為なんだよ。　関係ないだろ」

『それが大有りだから言っておる。　お前が取引した時、あの森がどんな事になったか、知っておるか？』

カラが俯き気味のまま首を横に振ると、蜥蜴は一回鼻息を吹き出し、ゆっくりと続きを話し始める。

『巨大な力が働いた為、局部的に大風が吹き荒れ、周囲の木々や岩を根こそぎ薙ぎ倒した。　その際、多くの逃げ遅れた鳥獣が、倒れた木々や大岩の下敷きになった。　親と逸れた幼い子狐がおった。　親の下で、殻を割り外へ出る日を間近に夢みておった、幾つもの鳥の雛もおった。　憐れよな。　ワシとてそうだ。　風に巻き上げられた岩の下敷きになり、身動きが取れぬところを人間に捕らえられた。　全て、お前があの取引をしたが為の犠牲だ』

淡々と語り続ける蜥蜴の言葉に、カラは闇森の夜の事を思い出さずにはいられなかった。

しかも、自分が思い至りもしなかった闇森の惨状を聞かされたことで、自分の行動が招いた罪を改めて思い知らされ、カラの膝はがくがくと震え、覗き窓の格子に掴まらないと立っていられなかった。

「――ぼ、僕、そんな事知らなくて。　そんなことになるなんて――そんな獣達を巻き添えにするつもりなんて――ごめん、なさい」

カラは鼻を鳴らしながら、搾り出すように謝罪の言葉を口にした。
俯くカラの様子をしばし無言で見続けた蜥蜴は、「よいせ」という掛け声で起き上がると、扉の前にどっしりと座りなおし、カラの顔を覗き込むように右の眼を覗き窓に近づけた。

『反省するは結構な事だ。　分かったなら、ワシをここから出すんだな』

「――なんで？」

脈絡のない蜥蜴の言葉に、カラは素直に疑問を呈する。

『決まっておろう？　お前の愚かな行いの所為でここに入れられたのだからして、お前の力でここから出すは、至極当然のことであろう？　お前に、償いをする機会を与えてやっているのだ。　有難く思うが良かろう』

鼻息をひとつ覗き窓に吹きかけると、蜥蜴は頭を窓から離し、どっしりと座り直した。　もっともな意見と思える蜥蜴の言葉に、しかし、カラはどうも素直に従う気にはなれない。

「――なんか、確かにオレが悪い――のは分かる気がするし、だから責任とっておっさんを出す――ってのも分かる気はするような気もするけど、なんかさ、なんか、やる気がおきないんだけど……」

むすっとした声で応じたカラに、蜥蜴もむっとした声で応じる。

『これゆえ近頃の人の子は恩知らずの礼儀知らずのと言われるのよ。
己の行いを悔いたような態度は、見せかけであって、本心は、反省も悔恨も感じてはおらぬ、という訳だな。　まったく嘆かわしい』

「そ、そんなことないよっ。　――たださ、おっさんなんか妙に偉そうで腹立つし、そもそもさ、ここに閉じ込められてるのって、聖獣か、その血を引く獣だって。　どう見たって、おっさん、そんな高貴な獣の仲間に見えないもん」

『嘆かわしい。　このワシをしてそこらの下等な獣と同じに看做すとは。　そもそも、見てくれで相手の全てを判断しようという、無知な凡人そのものの考えが情けない限り。　見えぬもの、見えぬ内面にこそ、真実の姿があるというが解らぬでは、お前の命は間近に失われるな』

不機嫌そうな蜥蜴の、聞き捨てならない言葉に、カラは顔を上げ覗き窓の内を睨む。

「間近に命が失われるってどういうことだよっ。　そんな言葉で脅して出させようったって、そんな手になんか乗らないからな」

『やはりお前の耳は使い物にならぬな。　この音、聞こえぬと見得る。　爪が床を掻く複数の足音。　近付く、赤い、虚ろな光を宿す眼――』

蜥蜴の口にした覚えある形容詞に、カラはぎくりとして背後を振り返った。

カラが歩いてきた通路の先から、幽かな足音が聞こえてくる。硬い石の通路を、爪が掻くカシッカシッという乾いた音。　その巨大な前足の上にある顔には虚ろな赤い眼――。

まだ見えぬ姿を、カラははっきりと見た気がした。

「――まさか、死獣……がここに向かってる、とか？」

『そのようだな。　お前には臭わぬかも知れぬが、先よりワシの鼻には耐え難い死した奴等の臭いが漂って来ておる。　まったく、死んでまで人間如きのいいように働かされるとは、憐れな奴等よな』

カラはキョロキョロと周囲を見回した。

「ど、どどうしよう。　ガーランもまだ見つけてないしアルも探さないといけないのに、ガーラン、ガーランいないのっ」

焦りながらカラは、先程よりも大きな声でガーランの名を呼んだ。しかし、岩牢は三列、しかも、遥か先まで続いている。

『そやつならここにはもうおらぬ』

思わぬ蜥蜴の言葉に、カラは再び覗き窓にへばり付いた。

「いないって、ガーランを知ってるの？」

『黄金のグリフィスだろう？　高慢ちきで騎士の主にベタ惚れしておる、鼻持ちならない有翼獣の小娘』

思わず納得する的確な表現に、蜥蜴は間違いなくガーランを知っていると思った。

「やっぱりここにいたんだ！　だけど、もういないってどういうこと？　今は何処にいるの？」

『別所へ移されたのであろう。　お前が持っておった羽根。　ありゃ、あの小娘のものだろう。　恐らくはそれが落ちておった道を経

て連れ行かれたのであろうさ。　今現在が何処へおるかは知らぬが、探し出すことは出来るやもしれん』

「おっさん、ガーランを探し出せるの？」

　暢気な声でさらりと言う蜥蜴に、カラは押し迫る勢いで尋ねた。

『まぁ、簡単ではないがな。　したが、こんな岩箱の中におっては無理な話。　そもそも、お前の命はもう間もなく消えるであろうから、ワシにはどうでもよいことだ』

　不穏な蜥蜴の言葉に背後を振り返ると、果たして、虚ろな赤い光がゆらゆらとこちらへ向かって来ている様が、はっきりと見えた。
　死獣達は数こそ多くはないが、先刻一度は追い払った巨大な熊を先頭に、大きな角を有した野牛、大猪、そしてこれまで見たこともない、顔の周囲に豊かな鬣（たてがみ）を有した巨大な肉食獣など、見るからに獰猛そうな巨獣ばかりだった。　先刻相手した死獣とは比べ物にならぬ恐怖を、目にした者に与える。

「う――ど、どうしよう、ねぇどうしようっ。　あんな大きな獣に噛み付かれたら、今度は腕なんて簡単に喰い千切られちゃうよっ。
　いくら力自慢になったって、あんなの相手じゃ力以前の問題だよっ」

『だからワシを出せと言うておるに、お前の頭はもう忘れたか。
如何（いかん）ともしがたいの』

　半泣きしそうなカラの慌てぶりとは対照的に、蜥蜴は暢気に欠伸をすると、呆れ声でぼやいた。

「覚えてるよっ。　だけど、あんな大きなの相手に、あんたみたいな小さいしょぼくれた蜥蜴がどう相手をするって言うんだよっ。オレの代わりに喰われてくれても、その後オレも喰われたら一緒じゃないかっ」

叫んだカラの声に反応したのか、死獣達は歩みを止め、先頭にいた巨大な熊が後足で立ち上がり鼻をひくつかせると、幾つかの唸りの後、耳を聾するばかりの咆哮を上げた。

空気を震わす熊の叫びに、カラの背筋は凍り、膝も手も激しく戦慄きを始める。

「――ひょ、ひょっとして、気付かれた、とか……」

『ご名答。　お前は本当に阿呆だな。　わざわざ己から気付かせおって。　死した獣共は目鼻が大して利かん。　大人しく静かにしておれば、もう少しは気付かれずに済んだものをなあ』

やれやれといった呆れ声で蜥蜴は言うと、再び大欠伸をして、カラに尻尾を向けて寝そべった。　その間にも、駆けることこそしないが、死獣達は速度を上げ、確実にカラに向かい迫って来る。　生きている牢内の獣達の叫びに劣らぬ奇声を合間に上げながら、じわじわと、カラに牙を突き立てんと近付いて来る。

「ちょっちょっと、寝ないでよっ。　どうにかしてよっ。　どうやって開けるんだよ、この扉。　鍵どころか取っ手もないじゃないかっ」

『そりゃあ仕方ないな。　その扉は呪いをかけて開け閉めしてあるでな。　呪いが使えぬなら、力尽くで開けるしかないだろうな』

半泣きしながら覗き窓にへばりつくカラに、蜥蜴は振り向きもせず答えた。

「力尽くって――」

『お前、あの闇森の件で、馬鹿みたいに強い力を得たであろう？　今、お前が手を掛けておる格子に、指はしっかり掛けられるであろう？　後は何を言う必要があろうかの』

最後に欠伸をして、蜥蜴は肩越しに緑の眼をカラに向けた。

小馬鹿にした蜥蜴の言いように腹は立ったが、背後に迫る恐怖が、カラを蜥蜴救出へと追い立てる。

カラは格子に掛けた指を更にしっかりと掛け、全身を使って岩の扉を引いた。

「――っ、う、くっ、お、重い――」

歯を食いしばり、腰を入れ、あらん限りの力で引くが、格子は握り難く、おまけに小さいにも関わらず、岩の扉はこれまで開けてきた鉄扉以上に強固で重量なものに感じられる。

『さっさとせんと、もう間近に熊が来ておるぞ。　熊の爪は大きくて鋭いゆえ、その貧弱な身に受けたら、簡単に引き裂いてくれような。　その背後におる獅子は、爪もさることながら、牙が太く強い。　あれが喉笛に喰らい付いたならば、お前のひょろひょろした首なんぞ、ひと噛みで折れるであろうなあ』

ししししとしゃがれた笑いを付け加え、蜥蜴は欠伸で締めくくる。

「そんな脅しの言葉ばっかり並べる余裕があるんなら、おっさんも

中から扉を押してよっ。　この扉、何でこんなに重い――重過ぎるよっ」

『だから言ったであろうが。　呪いが掛っておると。　中におる獣がその扉に触れたら呪いの影響で意識を失うでな、残念だが、手助けはしてやれぬ。　いや、残念残念』

「――なら、黙っててよ……」

『黙ってはやるが、あと十二歩、といったところだな』

蜥蜴の言葉に、一瞬力を緩めたカラは、直ぐ背後にまで迫った石床を掻く音を聞いた。

死獣が足を踏み出す度に、口や鼻から空気が漏れ出す不規則な音と、石床を叩く長い爪の足音が、覆いかぶさるようにカラの背にのしかかる。　そこへ再び熊が叫びを上げ、蜥蜴が獅子といった獣が、これまでに聞いた事もないような、猛々しく怖ろしい唸りを上げた。

他の全てを威圧する咆哮に、岩牢の中の獣達は恐怖の悲鳴を上げ、カラの膝も手も、どうしようもない程ガタガタと震える。　腰は今にも抜け、ずるりと座り込んでしまいそうになる。

震え萎える足腰のため、扉は余計重く不動のものに感じられた。

『まったく、しっかりせんか。　お前、あの高慢ちきを救いたいのだろうが。　他にもやるべき事があるのであろう？　だったら少しは根性入れて、これしきの扉、開けてみせんか。　開けられぬなら、とっとと全てを諦め喰われて来い。　これも何かの縁。　お前の最期を見届けてやろう』

「――嫌だ。　喰われて、たまるもんか。　ガーランを――アルを、助けるんだからっ」

腹が立つ蜥蜴の言葉に、力を与えられた。
カラは格子から手を外し、乱れかけた息を整え、深呼吸をすると、格子越しに蜥蜴を見据えた。

「おっさん。　一番奥まで下がって、頭を庇ってて」

蜥蜴がカラの言葉通りに下がったのを確認すると、カラは拳をきつく握り、肩幅に足を開いて岩牢に向き合った。
すぐ背後で、巨大な熊の狂ったような叫びが上がる。　ゆらりと後足で立ち上がり、巨大な前足を持ち上げたのだろう。　荒い鼻息が聞こえる。　熊はきっと、虚ろな赤い眼でカラを見下ろしているだろう。
潰されてしまいそうな殺気が、カラの肩にのしかかる。　低い唸りを上げた熊は、前足を振り上げたに違いない。　振り返って確認する勇気は持てないし、そんな寸暇もありはしない。

『小僧――』

「引いて開けられないなら、叩き壊せば、いいっ」

カラは右の拳を思い切り岩の扉に叩き付けた。　予想以上の熱く激しい痛みが拳から肩、そして脳天にまで突き抜け、カラは身を屈めて痛みに呻いた。
だがその痛みを悠長に感じる余裕を与えない程の熱波が、屈んでいるカラの上に広がったのを感じた。　それとほぼ同時、獣の狂気の叫びが上がる。
痛みも忘れて仰ぎ見ると、鮮紅の炎が岩牢の内から噴き出し、両手を振り上げていた熊を包み込み、燃え盛る炎柱と化していた。
炎に包まれた熊は、怒りの叫びとも悲鳴ともつかぬ激しい声を幾

度も上げ、狂ったように背後の死獣達に襲いかかった。　何頭かの死獣を、その鋭く巨大な爪で引き裂くと、熊は周囲の岩牢に幾度か体当たりをし、突然動きを止めると、地に崩れ燃えるだけのものとなった。

紅蓮の炎の中心に黒い塊が見える。

その塊からはもう、何の叫びも上がりはしない。

燃え盛る炎に、カラは目を奪われ硬直した。

目を背けたいのに背けられず、地べたに座り込み呆然としていると、頭上で大欠伸をする間延びした声が聞こえた。

あまりに緊張感のないその声のお陰で、カラはようやく炎から目を背けることができた。　ゆっくりと、自分が叩き壊した岩牢へと視線を移す。

『ふむ。　百年ぶりであったが、炎の吐き方は覚えておったな。我ながら感心感心』

自讃の言葉を口にしながら、片目の蜥蜴が、壊された扉の隙間からのんびりと顔を覗かせた。

その口元には、炎の残滓（ざんし）がちらちらと燻っている。

＞i２３１５｜２４０＜

6：片目の蜥蜴（後書き）

次回、〈7：接点〉に続きます。

7：接点

7：接点

極僅かな振動が、地に接する足裏から伝わる。　キソスの地の処々に施された禍術（まがじゅつ）の影響。　衰弱した〈地〉の精霊が、囁くような声でナハに地下の変化を伝える。

「青白い炎？　ああ、それなら炎帝（サーラム）の炎だろう。　つまりはラスターが動き始めたってこと、か。　カナルも無事に会えたんだ。　報せてくれてありがとう。　気分が優れないところに頼んで、すみませんでしたね。　さ、あなたは少し休んで。　後は他の方々に聞くので」

周囲を揺らめき漂う白光の珠に手を差し伸べながら、ナハは少し垂れ気味の目を細め笑った。

光珠は、そんなナハの言葉に頷くかのように数回瞬くと、すぅと周囲の闇に溶け消えてゆく。

辺りは静寂の闇に包まれる。

「さて、と。　こちらも急いで探し出さないと、巻き添えを喰いかねないな。　ラスター、ああ見えて熱いからなぁ。　どうも、ここに捕獲対象がいるようだしね――」

ナハは、ぼさぼさの頭を掻きながら周囲を見回す。　処々に崩れた彫像の残骸や何処からか入り込んだ木の葉等が落ちている。

窓のないキトナ大神殿旧宝物庫内は、今やすっかり陽の落ちた外の闇よりも、更に濃い黒の闇に沈んでいる。　月は満月に向かい肥

えてきてはいるが、建物内を照らすことは不可能に近い。　それでも、月が生む淡い光が、開け放たれたままの大扉から入ることで、ナハの視界をいくらか援(たす)けてくれている。
　ナハは膝を折り右手を砂埃の溜まった床に着ける。　ひんやりとした床石の感触が、じわりと伝わる。

「子供が二人。　昼少し過ぎ位か。　ふぅん？　女の子より、男の子の方が落ち着きがあったんだ。　おぅや、その後を通るこれは何だ？　あんまり見て嬉しい顔じゃあないな。　蜥蜴(とかげ)、いや蛇？　半妖ってところだな。　露骨につけられているのに、アルフィナも、まだまだだなぁ――」

　暢気な口調でひとりごちると、ナハは立ち上がり、二人の子供が通った、つまりは今から自分が辿るべき道を見遣った。
　一切の光のない進路は、深い沈黙の闇に沈んでいる。

「ラスターやあの少年程に、私の目は闇では利かないのだけどなぁ。労力をケチるなってことか」

　ナハは頭を掻いていた右手を正面に差し出し握ると、口の中で詞(ことば)を唱え、手を広げる。
　すると掌の上に、淡い白金の光珠が生まれた。　光珠は、優しい光でナハの周囲を照らす。

「これを出し続けるって、結構体力使うんだよね。　後でしっかり奢ってもらわなけりゃだな」

　光珠を優しく自分の顔の高さまで持ち上げると、ナハは珠に軽く息を吹きかけた。　すると光の珠は意思を持つかのように、ひとりでにナハの手を離れ周囲を浮遊し始める。

「さて、と。　大扉の陰の君達。　いい加減、出て来たらどうだい？　それとも、この光珠でお出迎えした方がよいかな？」

明朗な声で背後に言葉を投げ掛けると、ナハはゆっくりと大扉へと振り返る。

黒い大扉の陰から、淡い月の光を背に受けた人影が二つ現れる。

逆光のため顔貌（かおかたち）は判然としないが、まだ線の細さを感じさせる体型から、二人は限りなく少年に近い青年だと思われた。

「やあ、今晩は。　こんな月夜に男の子二人で廃墟散策かい？　中は真っ暗だ。　散策なら、昼に出直した方がよいと思うよ？」

にこやかに挨拶を終えると、ナハは腰に手をあて、二人の出方を待つ姿勢をみせた。　しかし、二人は彫像のように身体を固くし、口を開こうともしない。

埒（らち）が明かないことを見極めると、ナハはため息吐き、頭をがしがしと掻いた。

「君たち、〈正神聖教（シン・エルナイ）〉の――〈狩り人〉かい？」

ナハの言葉に、不動だった二つの影が形を変えた。　右の影が、より大きな身体をしている隣の陰にぼそぼそと何か訴えている。

「怖いのなら、お前は帰れっ。　俺はこいつを捕らえ連れて行く。ここで手柄を立てれば、上へ取り立てられる可能性だってある。いつまでもこんな下らない仕事ばかりさせられてたまるかっ」

左の影はイライラと右の影を怒鳴りつけた。　その声から、二十前後の青年だと察しを付ける。　言葉の僅かな訛から、左の青年は

南方の出身らしい。

「ああ、やはりね。　まだ〈狩り人〉じゃなくて、見習いの見習い、ってところ？　見回り程度の仕事しか任されないから腐っているんだな。　若いっていうのはいいね。　様々な事に怒りを覚えられて」

のんびりとしたナハの言葉に、左の青年が怒気も露わに振り返った。　見えずとも、その顔が怒りに歪んでいる事がわかる。

「貴様何者だっ。　ここへ何しに来た。　ここは一般人は立ち入りが禁じられている」

敵意を剥き出しに、青年は数歩ナハの方へと歩み寄る。

ナハは光球を手元に呼び寄せると、押し出すように青年へと向かわせた。

生き物のように自ら動く光の珠に、青年は素早く身を引いたが、一定以上に近付かない事を確認すると、姿勢を慌てて正し、改めてナハを睨み付けた。

栗色の髪に焦茶の瞳を持つ青年の顔は、なかなかに整ってはいるが、両頬に残る引き攣れた獣の爪痕と、妙に険しいぎらついた眼差しが、神経質な印象を与える。

引き締まり均整の取れた身体と、捲った袖から覗く左腕の火傷痕から、おそらくは火を使う、鍛冶のような職業に就いていたのだろう。

青年の様子を見取り終わると、ナハは「ふむ」と顎に手を当て、首を捻った。

「そう。　ここはキトナ大神殿の管理下にある建造物で、一般人の立ち入りは禁じられている。　廃墟になったとはいえ、それに変わりはない。　それは知っているよ。　ただね、私は多少、大神殿と

は関わりがあって、出入り出来る立場にあるんだ」

「はっ。　浮浪者の如き貴様が、どうして大神殿に関わりが持てる。虚言(うそ)を吐くなら、もう少し頭を使ったらどうだ。　もっとも、それ以上の思い付きがあれば、だけどな」

嘲るように口の端を上げ、青年は侮蔑(ぶべつ)の言葉を投げつけた。　ナハはその言葉を受け、自身の姿をまじまじと見回す。

「――うーん。　そんなにボロボロかねえ？　確かに半月は野宿したけど、それなりに気は使っていたんだけどなあ」

パンパンと埃を叩きながら、ナハは視線を正面に立つ青年へ戻す。

「ま、ボロボロなのは認めるとして、それでも私は、ここへ立ち入る権限を持っているのは本当だよ。　私は〈地の長〉だからね」

〈地の長〉という言葉に、青年の表情が変わった。　背後に立っていた青年も、驚いたようにやや身を乗り出しナハを見ている。

「我々〈精霊使い〉を生業(なりわい)とする者は、聖都ティルナの精霊王殿で任命を受けるんだよ。　あまり知られていないことだろうけれど。だから極端に言えば、我々は精霊王殿に属する専任の術者だ。そういう所以(ゆえん)もあって、〈精霊使い〉は大神殿で何かしら事が起こっている場合、その事実を把握し、対処する事をついでの職務として負っている」

諭すように話しかけるナハの言葉に、青年は表情をより険しくしていく。

そんな青年の顔を見て、ナハは苦笑した。

「納得できていない顔だね。　ま、私が本当に〈地の長〉なのか、今は証明できもしないから、後は君の判断に任せるけど、君達こそ、大神殿に関わりはないだろう？　本来、〈正神聖教〉はティルナを始めとする大神殿を嫌い抜いているんだから。　そもそも君、最近まで鍛冶師か、とにかく鉄を扱う職を生業にしていたのだろう？　それを辞めて、〈正神聖教〉のそんな下請け仕事に転職したのかい？　もったいないな」

「な、なんでそんなこと知って――」

青年は顔を強張らせ身動(みじろ)ぎをする。　ナハを睨みつける目に深い闇が降りる。

「臭いだよ。　君の身体にまだ残っている鉄の臭い。　鉄は〈地〉に属するからね、ここにいる〈地〉の精霊達が教えてくれる」

「ね、ねえ、トラン。　戻ろう。　この人は本当に〈地の長〉だよ。　精霊が付き添っているよ。　精霊を怒らせちゃいけないよ」

これまで闇に隠れるように立っていた右の青年は、恐る恐るトランと呼びかけた青年の背後に立つと、その袖を引いた。

トランは激しい勢いで掴む手を振り払い、声を掛けた青年の肩を突いた。　身長は大差なかったが、明らかにトランより線の細い青年はよろめき、床の窪みに足を取られ尻餅をつく。

「？いけない？？　何が？　こいつの言うことを真に受けて、その言葉に騙されおめおめ引き下がれというのか？　俺はシュア、お前のように今の状況に満足してはいないんだ。　お前みたいな臆病者と組まされて、はっきり言って迷惑しているんだよっ」

激しい語気で怒鳴りつけるトランに、立ち上がったシュアは怯えた目を向けた。
トン、と何かを打つ音がした。
次の瞬間、トランががくりと崩れた。
シュアは何が起こったか分からず、気を失い倒れているトランを呆然と見つめた。

「なかなか、血気盛んで自尊心の高い青年だ。　野心は向上心にも繋がるから、程々に持つのは結構なことだけど、一緒に組む君は、なかなか苦労しそうだね」

いつの間にか、〈地の長〉だと名乗った男が目の前に立っていた。
シュアはさっと身を固くし、ぎこちなく防御の姿勢を取る。

「安心していいよ。　シュア君、だっけ？　君に危害を加える気は全くないし、このトラン君？　彼も気を失っているだけだから。悪いけど、彼も連れて帰ってもらえるかい？　今からここは、ちょっと荒れるだろうから」

にこやかに微笑みかけながら、ナハは狼狽しているシュアの顔を覗き込んだ。
柔らかな蜂蜜色の髪に薄い水色の瞳をした、優しい顔立ちの青年。
〈狩り人〉になる事を目指すようには見えない、穏やかな空気を纏(まと)っている。

「君、どうして私が〈地の長〉だと言いきれたんだい？　精霊が付き添っている、って言っていたね？」

青年は一瞬目を大きくすると、照れくさそうに少し俯き、躊躇(ためら)い

がちに口を開いた。

「あの――別に理由はないんです。　ただ、あなたの周りの〈地〉が、柔らかく光って見えて、それに、何かがひそひそ囁いているような気がして。　何を言っているかなんて、全然分からないんですけど、ああ、精霊があなたに何かを語りかけているんだって。　僕の祖母、〈水の守〉だったんです。　〈水〉の精霊と語っている時の祖母を包む空気と、似ていると思って。　精霊達と話す祖母はとても綺麗で、キラキラした優しい――」

懐かしげに祖母の思い出を語っていたシュアは、じっと自分の顔を見つめるナハの視線に気付き、慌てて姿勢を正す。

そんな様子をナハは微笑ましく見ると、光珠を手元に呼び寄せ、シュアから少し離れた。

「そうか、君のお祖母さんは〈水の守〉だったんだ。　なるほどね。ところで君、これから何処へ向かうつもりだい？」

「あの、僕達に与えられた宿舎は東外れの古い教会堂の地下なので、そこに彼を運ぼうかと――」

素直に答えた青年に、ナハはいま一度笑いかけ、光球をシュアの方へと押し出した。

「やはり地下、か。　いいかい、この丘を下りたら、その地下には戻らず地上の、なるだけ大神殿から離れた場所に行きなさい。　現在、このキソスの地下は酷く汚染されていてね、身体に良くない。

もっとも、君が今の仕事が好きで、どうしてもそこへ戻りたいというなら、私に止める権限はないのだけれどね」

「汚染。　――なんとなく分かります。　僕、地下の集会所や宿舎に戻ると、いつも凄く不安で、気持ち悪くなるんです。　この丘の上も、本当はとても気持ち悪くて、怖くて来たくはなかった――。
　この仕事だって、別に好きでやっている訳じゃないんです。　ただ、家族が誰もいなくなって、食べるのに困って、どうしようもなくて……」

　蒼ざめ俯くシュアに再び歩み寄ると、ナハはポンと、軽く肩を叩き笑いかけた。

「君はお祖母さんの血を継いでいる。　その感覚を信じて、自分が気持ち悪くない、と感じる地に身を置きなさい。　ただ、その場合トラン君は、連れて行かない方がいいかもな。　彼は、君とは違いそうだから」

「いえ。　彼も僕と同じ所へ連れて行きます。目が覚めて、どうしても戻りたいと言ったら――僕にはとても彼を止めは出来ないけど」

　はにかむように言うシュアに、ナハは再び肩を叩き微笑みかけた。

「あ、あの――」

　闇の先へ歩み出そうとするナハを、シュアは呼び止めた。

「あなたのお名前、聞いてもいいですか？」

　ナハは一瞬驚いた顔をしたが、破顔すると自分の名を告げ、迷わぬ足取りで闇の先へと消えていった。

＊

『どうだ？　ワシを敬いたくなったであろう？』

「――〜〜っ」

ししと鼻で笑い、くるくると光る緑の隻眼（せきがん）でカラを上目に見遣ると、蜥蜴は炎の残滓を含んだ鼻息を大きくひとつ吐く。　それはカラの脛辺りにかかった。　鼻息は、ズボンの上からでも火傷をしそうな程の熱を含んでいる。

「あ、熱っ、熱いじゃないかっ。　おっさん、わざとだろ、今のっ」

『それが？命の恩人？に対しての口のきき方かの？　目鼻から大量の水を垂れ流しながら、ワシに命乞いをしたことを、お前の頭は既に忘れたと見得るな』

「誰がそんな命乞いなんかしたんだよっ。　オレだって、おっさんをこの岩牢から出してやったんじゃないか。　恩人なんてお互い様だろ。　すっごく痛いんだぞ、この右手っ」

岩牢の扉を打ち壊したカラの右拳は、骨が砕けたのではないかと思えるほど激しく痛み、みるみる腫れていったが、例の如く自分で舐め、治癒を念じ、幾度も息を吹きかけると、　その成果あってか、多少の疼きが残ってはいても、普通に動かすに支障がないまでに回復をした。　それでも、痛いものは痛い。

むくれ顔でカラは蜥蜴を睨み返すと、蜥蜴は右の眼をくるくると回し、大きな欠伸をひとつ、わざとらしくする。

『お前がワシをこの岩牢から出すには、ふたつの理由があったろうが。　ワシがこんな狭苦しい場へ押し込められたきっかけの件はも

とより、お前自身が、あの死獣共を、己の手で撃ち返すだけの自身がなかったのであろう？　それとも何か？　お前一人で、これらの死獣全てを掃うことが出来たというか？」

蜥蜴はくいっと、顎でカラの後方をしゃくり示す。　そこには黒焦げ、煙を上げる炭の山が累々と並んでいる。

大半はボロボロに焼け崩れ、原型がどのようであったのかはっきりしなかったが、中には、元がどのような姿をした獣だったかが、想像できるものもある。

蜥蜴は有言実行だった。

岩牢から身を出すと、矢継ぎ早に鮮紅の炎を死獣に浴びせかけ、あっという間に全ての死獣を沈黙させた。

蜥蜴が炎の矢を吐き、死獣が焼かれる間、この空間は炎獄のようだと思った。

死獣達の上げる、苦痛か怒りか故の咆哮。

炎に焼かれる死獣達の肉は猛烈な悪臭を放ち、炎からの熱波とそれらの臭いにむせ、カラはまともな呼吸が出来ず、幾度も意識を失いかけた。　ひとつまちがえれば、死獣諸共焼かれかねない位置で倒れそうにもなった。

そのたびに、実にタイミングよく蜥蜴の硬い尻尾がカラの頬を打った。　お陰でカラは、焼かれる死獣のお供をすることなく、ふらつく足で、比較的安全な場所にまで退がることができ、現在の口論にまで至れたのだ。

『ふん、まあよいわ。　ワシは心が広いでな、あとでたらふく肉でも喰わせてもらえば帳消しにしてやるわ。　ああ、言っておくが、新鮮な白天野牛の丸焼きなど、ワシの好物だ。　覚えておくがよかろうぞ』

大欠伸をしながら、蜥蜴はカラの右肩によじ上り、どっしりと落ち着く。

「なんだよそれっ。　それって、幻の牛って言われる、王族とか金持ちしか口に出来ない高級食材だって聞いたことがあるぞっ。　それより、なんでオレの肩に乗っかるんだよ。　重いじゃないかっ、下りろよっっ」

『あれだけ炎を吐いたからな、流石に疲れた。　お前若いくせに、ワシが肩に乗った如きで何を――』

蜥蜴の言葉が途切れるのと、カラが背筋に殺気を感じたのが同時、カラの足は無意識に地を蹴り、蜥蜴を肩に乗せたまま、身体は宙高くに舞い上がる。

一閃の銀光が、目の端を走った。

直後、ガッという重く硬い音が、宙にあるカラの下で上がる。

離れた地点に着地をしたものの、バランスを崩し、カラは見事に尻餅をつく。　その衝撃のせいで、蜥蜴も肩から滑り落ち、床に尻から落ちた。

『このたわけっ。　これしきの動きで体制を崩すなど、鍛錬がなっておらん証拠。　イテテ……お陰でワシまで尻を打つハメになったではないかっ』

「避けられただけマシだろっ。　それよりあれっ、あれ見てよっ」

カラは、直前まで自分達が立っていた地点を震える指で指し示した。　堅い石の床に、刃の厚い大剣が、深く、突き立っている。

「――かわしたか」

低い男の声が、少し先の闇からカラへと向けられる。　落ち着いた、しかしどこか陰鬱な影を感じさせる声の主の姿は、直ぐ目にすることが出来た。　油気のない黒髪を後頭部で束ねた三十半ば程の男。　鍛えられ引き締まった身体を、全身墨色の衣で覆っている。

長い前髪の間に見え隠れする切れ長の瞳は、夜光石の如く深い夜の闇色。　俯き気味ではあっても、その瞳はカラの一挙一動を見逃すことはない鷹のような鋭さを秘め、額に走る一筋の古傷が、その男の印象をより厳しいものにしている。

男は淡い光を手にしている。　見覚えのある、柔らかな、優しい金色の光――。

「それっ、オスティルの剣――」

『――ったく、この阿呆が。　また己から居場所をしっかり教えおって……』

呆れた蜥蜴のしゃがれ声に、今更無意味ではあったが、カラは慌てて口を塞いだ。

遠くに燈芯草の淡い光はあれど、これ程の闇ならば、常人には周囲に存在するものの確認は容易ではないはず。　例え、オスティルの光を持っていたとしても、現在のその光は、カラが手にしていた時の半分にも満たない、蛍の光の如き淡さだ。　それが周囲を照らし、視界を援けるとは思えない。

「――見えているわけか。　この短剣――いや、俺の姿全てが」

男は俯けていた顔を僅かに上げ、カラの顔を正面に捉える。　カラほどではないが、この男も、カラの姿を確かに捉えている。　闇

に慣れた、獣の様な眼を持っている。

「古い伝承に、僅かに記される〈オスティルの瞳〉。　なるほど――この闇中でも光り輝く、正に夜空の月の如き、だ。　しかも、その透けた身体。　お前に、間違いないようだな――」

感情の読み取れない、起伏のない喋りだったが、男の声に、カラは敵意を感じはしなかった。　むしろ、どこか懐かしげな響きを含んでいるようにさえ思える。

カラを見据える男の黒の眼差しに、カラも金の瞳で見つめ返していると、肩に上りなおした蜥蜴が、頬を膨らませ、口の端に炎の紅い光を覗かせた。

「だっ、だめダメだめっ、火を噴いてこの人まで焼け焦げにしたらダメだよっっ」

カラは蜥蜴の口を両手で掴み、蜥蜴を身体ごと抱え込むようにした。　蜥蜴の口の中で生まれかけた炎が僅かに口から噴き出し、カラは指に火傷を負うハメになったが、必死に押さえ込み止めた。

『何が？ダメ？だっ？　こやつが人間だからか？　こやつは〈狩り人〉だぞ？　この岩牢の番人もしておった、明らかにお前に敵対する側の者だぞっ』

口を押さえられ喋り難そうではあるが、蜥蜴のしゃがれ声は変わらずに聞こえる。

「だ、だって、何となく、ダメな気が――」

蜥蜴はカラの腕の中で激しく尻尾を振り、カラの腕や腿を激しく

打ったが、カラは意地でも蜥蜴を離さなかった。　見た目の大きさ以上に力のある蜥蜴を押さえることに必死となり、カラは正面の男から目を外した。

「何者と話している？」

直ぐ鼻先で、男の声が響いた。　顔を上げると、いつの間にか男はカラの目の前に立っていた。　手には、先程床に突き立っていた大剣を握り、カラの首筋にその片刃を当てている。
言葉は出せなかった。　ラスターとはまた違う、鋭利な刃のような黒の瞳が、カラを貫くような目で見据えている。　少しでも動けば、迷いなく手首を動かしカラの首を斬る。
そう、確信のできる、死を与える事に慣れた目をしている。

『だから離せというておろうがっ。　この程度の男ならば、先程の熊の半分の炎でことが足りるわ。　早う離さんかっ』

男に見竦められているカラを尻目に、蜥蜴は変わらぬ調子で喚きたて、尻尾を振り回し続ける。
珍妙な鳴き声を上げ、少年の手の中で暴れる蜥蜴に気が付いた男は、打ち壊された岩牢に視線を向けた後、周囲に散乱している黒焦げの物体に視線を巡らせた。

「その蜥蜴。　あの岩牢の中に在ったものか。　お前が、あの扉を打ち壊し、これを出した――そうなのだな？」

男の厳しく鋭い問いに、カラは無言で頷いた。　口がカラカラに干乾び、それまでとは違う緊張で、身体が固くなっている。　それなのに、何故か男の顔をしっかりと見たい、という思いに駆られる。
僅かに顔を上げ、男の顔を見ようとすると、首に下げていたユー

シュが襟元からはみ出し、小さな淡い光を闇に浮べた。
男はほんの一寸、目を見開くと、再び鋭い眼差しでカラを見据えた。

「――お前は、その蜥蜴の鳴き声が、言葉、として理解できるのだな。　その蜥蜴は、俺を殺せと、言っているのであろう？」

男の声には、僅かな変化があった。　ほんの小さな変化だが、厳しさが緩んでいる。
それでもカラは声を出せずに、ただ、男の顔を――その黒の瞳を見返し続けるしか出来なかった。

「お前が止めなければ、そいつは俺に炎を吐きかけて焼いただろうに、何故止める？　俺は、お前を捕らえに来た。　お前にとっては、敵と言ってよい」

男は変わらず無表情であったが、纏っている空気が、明らかに和らいでいる。
カラは逡巡（しゅんじゅん）した末に、改めて男の黒の瞳を見据え直すと、おずおずと言葉を口にした。

「――わかんないよ。　だけど、多分、似て――いたから」

「似ている？」

男は僅かに声音を高めると、カラの言葉の続きを待つように口を結んだ。

「アル――オレの知……友達、に。　その子の瞳の色と、あんたの瞳の色、似てる。　……掴まっちゃったんだ。　オレの名前、呼ん

でたのに、助けられなかったんだ。　オレ……オレ助けなきゃいけないんだ、絶対。　早く、探し出さないと、いけないんだ――」

見ず知らずの敵らしき男に、訳の分からない事を言っていると自分でも思った。　勝手に口からこぼれ出す言葉。　しかし、それらは全て嘘ではない。　この男の黒の瞳は、アルフィナの瞳に、似ている。　自分の名前を呼びながら、操骸師（そうがいし）の男に捕らえられ、連れ去られた――。

カラはきつく唇を噛み、溢れ出そうになる涙を堪えた。

「――アルフィナは、無事だ」

低く、呟くように発せられた男の言葉に、カラは瞳を見開き、立ち上がった男の顔を追うように見上げた。

男の手にあったオスティルの短剣が投げて寄越される。　柄先のオスティルは、カラの手に戻った瞬間、満月の輝きを放ち、次第に小さくなっていった。

束の間の光に照らし出された男の顔は、僅かに笑んだように見えたが、直ぐに元の鋭く厳しい表情に戻ると、カラの首から剣を引き、背後の闇に向かい剣先を向け直した。

「いまの所は――だがな」

大剣のはるか先に、骸骨のような灰色の男が立っていた。　見紛うことなき操骸師の姿。

口元には、引き攣れた薄笑いが見える。

そして、その一歩さがった場所に、白い衣に全身を包み、白銀に輝く長い髪を地まで垂らした少女が、揺らめく幻のように立っている。

見覚えのある、美しく整った顔。

しかし、彼女の髪は黒に近い濃茶だった。
だが――
「……アルフィナ――なの？」
カラの声は擦れ、震えた。
そんなカラの声に、少女の黒の瞳は僅かな揺らぎもみせず、虚ろにただ、開かれていた。
＞ｉ３３９８―２４０＜

7：接点（後書き）

次回、〈8：真実の姿〉に続きます。

8：真実の姿

8：真実の姿

祭壇の裏に設えられた、凍えた空間。　隠し扉を開き、入室できる者は限られている。

「キサ殿」

恰幅よい白髪白髯の老人は、部屋の中央に腰掛ける老女へ、ゆったりとした足取りで近付き、やや離れた位置で歩みを止めると軽く頭を下げた。

老女の前には、銀で拵えられた檻があり、中には黄金の毛並みの有翼獣が、額と背から血を流し横たわっていた。　檻の表面には隙間なく、紋様のような古文字の呪句が刻まれている。

「それ、はまだ使わないのですかな？」

白髯の老人、キトナ大神殿の長である大神官オリ＝オナは、無感情な言葉をキサと呼びかけた老女の背にかけた。　キサは振り返ることも、言葉を口にすることもなく、ただじっと、檻の中で横たわる獣を見つめている。

「キサ殿――いや、〈狩り人〉の束ねであり、〈正神聖教（シン・エルナイ）〉再興に尽力する〈総帥〉、とお呼びした方が宜しいか？　――それとも、かつてティルナ精霊王殿にて、長きに渡り巫子長を務められ、かの〈精霊王〉シーラに、直に接されたこともおありという、大巫子キルセ＝サニア――そう、お呼びした方が宜しいかな？」

オリ＝オナの言葉に、キサはゆるりと顔を上げたが、振り返ることはしない。

「――名など、好きに呼ぶがよろしい。　それより、このグリフィスの主を捕らえたというのは、真か？」

キサは再び有翼獣に視線を落とすと、膝の上で合わせていた手を解き、銀の檻に右手をかけ立ち上がる。

「西翼の独房棟に。　形ばかりは、大人しく従っておったようですが、どうやら、既に事態が生じているようでしてな。　先程異変の報せが届きましたゆえ、剣士共を差し向けております」

オリ＝オナは、立ったまま動かぬキサの背を見据え、僅かに笑む。

「――が、どうなりますやら。　貴女ですら、かの者の真の正体、把握されていないという。　たかが寄せ集めの無頼共に、かの者を捕らえられるとは思えませぬが――その有翼獣の額の眼を潰すことで、エラノールの動きはまこと、抑えられますのでしょうな？」

「少なくとも、一時の時間は稼げよう。　聖獣の第三眼は、その主たる騎士のいまひとつの眼。　この眼を透して、離れた地の様子を知ることができると云われている。　このグリフィスの眼を通し、この地下の様子を、この部屋を、我等を、知ることは出来ぬ。　だが――」

キサは言葉を切ると、オリ＝オナの顔に視線をゆっくりと移す。

白髪を背中でひとつに束ねたその姿は老いてはいる。　この年七十七になるオリ＝オナよりも、遥かに長い時間を生きている女。

しかし、そのような歳月を感じさせない、むしろ、ふとした瞬間には若さすらも感じさせる。　過ぎた歳月を超越した、不可思議な雰囲気を、キサという女は纏(まと)っている。

「何か、心に掛ることがおありか？」

「――いや。　それよりも、他にも何か、この地下に進入したものがあるであろう？　更に、聖獣。　相当な力を宿す存在が活動をしておる。　先刻、その力の迸(ほとばし)るを感じた。　あの岩牢には、もうさしたる獣は残っておらぬと、そなた、言っておらなかったか？」

「そのグリフィスを最後に、あとはクズのような出来損ないの聖獣くずれ、だったようですがな」

「オナ殿には出来損ないに見えた獣の中に、とんでもないものが残っておった、とわたくしには思える」

静かな灰色の瞳で見つめるキサを、オリ＝オナも無表情に見返す。

「もしや、そのような聖獣がいたとして、そのグリフィスを捧げれば、現在の〈御方〉には十分な力となりましょうに、何故、その有翼獣の血を摂ること、貴女はそこまで拒まれるのか」

「わたくしの質問に答えてから、その問い、するがよい。　この地下に入り込んだ者が、おるのだな？」

声を大きくしたわけではないが、キサの言葉には、オリ＝オナをも制する力があった。　オリ＝オナは、僅かに息を吐き出すと、キサの顔を見据え言葉を続ける。

「――確かに二名、侵入者がおるようです。　一名は、〈御方〉の新たな〈器〉とする娘。　あともう一名は、半人の男の伝達が曖昧で確たることは言えませぬが、同じく子供。　しかも、恐らくは闇中の行動に苦を感じぬ――闇を見透かす眼を持ち、かのエラノールと、縁ある者」

キサは眼を開き、オリ＝オナへ歩みより、自分を見下ろす黒の瞳に焦点を定める。

「闇を見透かす眼を持つ、子供？　あのエラノールと縁を持つ、とは、何を以ってそのように思い至ったのか？」

「これは私の推測ですがな、どうも、その子供はかなり大粒の、オスティルの付いた短剣を所持しておったようでしてな。　ご存知であろう？　魔物、それに準ずる存在は、かの貴石の放つ光を怖れる。半人の小者は光に戦（おのの）き、逃げ帰ってきたのですよ。　そのような強い光を放つオスティルは、そう誰もが所持できる物ではありますまい？」

「――精霊王殿……いや、精霊王直属の者にのみ与えられる」

「そう。　貴女が私に下された、この指輪のオスティルもそのひとつ。　しかし、恐らくはそれ以上の石であると、私は思いましてな。そうなると、その所持者は自ずと、知れる」

「あのアラスターが、他者へ与えた？　――その者とは――……」

目を細め言葉を止めたキサへ、オリ＝オナは更に数歩寄る。　大柄な男の身体の一部が視界に入るや、キサは眉根を寄せた。　オリ＝オナの袖口と指先に、極僅かではあるが、赤い染みを見付ける。

明らかに、血痕。　有翼獣の流す血の香に紛れ、今の今まで気付かなかった。

「――そなた、何者を殺めた？」

キサの険しい言葉に、オリ＝オナは僅かに眼を大きくした。　キサの視線の先にある染みに気が付くと、己も僅かに眉を顰め、埃でも払うように数回叩く。

「これは失礼をした。　エラノールを獄へ案内させた者が、戻ってからこちら、私にいつまでもしがみ付き、訳の分からぬことを言い立てましたので。　返り血が付くとは不覚。　私の腕も鈍りましたな」

僅かに笑みを漏らし、手巾で指の汚れを拭きとるオリ＝オナを見据え、キサは表情をより険しくしていく。

「それは、あのトマと申す修道士か？　〈狩り人〉の小隊を預けておった、あの蝦蟇（がま）のような男であろう？　あの者が、そなたに何を言い立てた？」

「おお、正にそのトマと申す者です。　〈総帥〉の貴女が、そんな下の者まで覚えておいででしたとは、あの者も光栄でありましょうな」

キサの意外な反応に、オリ＝オナは興味を引かれ、はぐらかす様に言葉を口にした。

「わたくしの問いに答えよ。　そのトマという修道士は、そなたに、何を、言った」

「――？再会を祝して、杯を交わしたい？――そう、エラノールより伝言を頼まれたと」

「伝言は、それだけか？」

キサの強い語気に、オリ＝オナはやや圧されたように答える。

「――？酒？は、あの者が用意するが、？杯？はこちらで用意するようにと――。　如何なる思惑の言葉か判りませぬが、言葉だけを聞けば、我等に協力するというようにも取れますな」

オリ＝オナを睨み据えていた視線を、キサは袖口から指に残る血痕、そして、檻の中の有翼獣へと廻らせる。

「そのトマという修道士の行動、何や異常でもあったのか？　殺めねばならぬ訳は、何処にあった？」

「そう、ですな。　やや呂律がまわらず、眼は焦点が定まらず曖昧でしたな。　言動も、常にない不安定さが所見され、軽微な興奮状態が続いておりましたが、エガは、精神を麻痺し狂わせる猛毒。その香が焚かれた室に一定時間おれば、常人ならば自力で報告に参られただけ、使えたというもの。　他の随行者は、戻ったなりどれも息絶えたようですからな。　トマめも、袖にしがみ付き、いつまでも付き纏いさえせねば、もう少しは命長らえたでしょうがな」

「トマだけが、その状態であれ生き残り、そなたに、付き纏った――」

「この室内へまで付いてこようとしましたのでな。　いくら制止し

てもしがみ付き離しませぬゆえ、仕方がありますまい」

「――では、殺めたは、祭壇か？」

「いま、片付けさせておりますゆえ、貴女が不快なものを目にすることはありませぬよ」

オリ＝オナはゆったりと笑んでみせたが、キサは、その笑みを拒むように眼を伏せた。

＊＊＊

青白い炎が闇を裂き、地下通路には凍えるような光が溢れる。闇に潜み、侵入者を捕らえ喰らう魔物や、セナが放っている死獣は次々と青炎に焼かれ、一欠けらの骨も残さず灰に帰していく。ラスターの歩みを妨げる存在は、何ひとつなかった。

ラスターの指先まで綾どる暗赤の刺青は、現在赤金に輝き、それと同じ輝きがラスターの額からも発せられている。

「――ガーラン」

呼びかけに、何の応えもない。

ラスターの呼びかけに、ガーランが応じないことはまずない。応じない理由は、意識を全く失っているか、生命を失っているか――そのいずれかしかない。

わずかに瞳を細めると、右方に伸びる通路へ視線を移す。　視線の先には、数人の修道士が燈芯草の微光を手に、いずれも恐怖に顔が強張らせ、化物でも見るような、怯えた憐れな眼をし立っている。

可能ならば、すぐにでもその場から駆け出したいに違いない。

そんな修道士達の背後から、ふいに、ふたつの笑い声が上がる。

「気の小せえ修道士共の勘違いと思ってたが、まさか本当だったとはな。　しかしよ、どうやってあの獄舎を抜け出したんだ？　しかもあの光は何だ？　炎か？　嫌な青い色をしていやがる。　そもこの辺りの地下通路には、火の気はないんじゃなかったのか？」

修道士達の前に、剣士と見られる男が二人進み出た。　剣士達は、せせら笑いを漏らしながら、舐めるようにラスターへ視線を置いている。　先に口を開いた褐色の肌の男の言葉を受け、いま一方の金髪の男は冷ややかに笑い、修道士達へちらと視線を向ける。

「さしずめ、扉の閉め方でも悪かったんじゃないのか？　さもなけりゃ、老いた建物のことだ、錠が壊れてでもいたんだろうさ。　修道士共は、祈る以外の脳をもたん輩だ。　こんな女みたいなのが、あの扉を打ち壊す事なんぞ出来るものか。　錠が壊れていた。　なあ、そうだろう、別嬪（べっぴん）さんよ？」

あからさまな嘲りの言葉を投げつけた後、金髪の男は視線をラスターへ戻す。

「――私に、用か」

抑揚のない短い言葉を口にすると、ラスターは二人の剣士を一瞥した後、後方の修道士達へ視線を向けた。　修道士達は、その視線に小さな悲鳴を上げ、剣士達の背後の、更に奥へ奥へとじりじり下がって行く。

「これはつれない御言葉ですな。　御尊名は存ぜぬが、騎士殿。貴殿をお迎えに上がったんですよ。　何処に属されているかは存ぜぬが、お若い。　その年齢で騎士に叙せられるとは、よほど、腕が

立つと見える」

「しかもよ、滅多にない美人だぜ？　まるで神像の女神、いや、あれは男か？　どちらでもいいが男には見えん。　ちょいと昔の女騎士に、めっぽう好い女がいたって話を聞いたことがあるが、俺はあんたでも十分だぜ？　こんな美人の騎士様にお手合わせ願えるなんざ、俺らみたいな田舎剣士にはそう有り得んことだ。　末代までの自慢話になる」

褐色の肌の男より、頭半分背の高い金髪の男は、舌なめずりをしながらラスターを舐るように見ている。

「トト。　行く先々で種蒔いてるてめぇの末に伝えるなんざ、大事なだけだろうが。　やめとけ」

トトと呼ばれた若い金髪の男は、淀んだ暗い目でラスターを見据え直し、途切れ途切れにせせら笑いをする。

「一晩に二・三を相手にするナプリ、あんたよりゃマシだろうが。　ま、なんにしたってよ、こんな機会はそうそうはない。　こいつら騎士――取り澄ました〈方円の騎士団〉の奴等は、俺らのような剣士を見下してやがるからな。　何度煮え湯を飲まされたか知れねぇ。　ここで、そいつをぶちのめすせたらよ、今夜の酒は、極上の美酒になるだろうぜ」

「まあ、気持ちは分るが、とことんぶちのめすのは、また別の機会だ。　いまは？なるべく傷を付けず？捕らえることが優先だ。　一・二発殴るくらいですませておけ。　なんせ、相手は俺らだけではないからな」

ナプリというやや年嵩の男が、薄笑いを浮べ顎を軽くしゃくると、ラスターの後方に、八人の剣士が現れた。　その更に後方にはやはり、数人の修道士が続いている。

新たに現れた剣士達は、自分達が立つ通路の方々で波打つように蠢く青炎に、多少の戸惑いを覚えているようだが、目の前に立つ、白い衣に身を包む青年騎士に視点を定め、気の早い者は既に鞘を払い去っている。

「どうだ？　俺達はあんたを捕らえ戻せと命じられているだけだ。大人しく元いた牢に戻ってくれれば、手荒なことはせんさ。　あんたはいま、丸腰だろう？　いくら腕に覚えがあろうが、この狭い場で、しかもこの人数相手だ」

ナプリが、ラスターに横目で回答を促す。　ラスターはその問いに答えず、ゆっくり、ナプリらへ向かい歩み始める。

「素直に従うか？　さすが、馬鹿ではないな」

ナプリの前に歩み出たトトが、冷ややかな笑いを浮べたまま、数歩先で立ち止まったラスターを見据えた。

「あんたの、実際の腕前がどの程度か知らんが、俺達は騎士なぞになっていなくとも、腕はそれ以上のものを持っているさ。　戦場で、現実に、剣を振るい続けた実戦のな。　お前らみたいな、戦には参戦しない、形ばかりの剣士とは違う。　ここにいる奴等には、あのアドラやトルサキア殲滅の戦に参加した奴等もいる。　甘く見なかったのは、実に懸命なことだよ」

トトの言葉など耳に入らぬように、ラスターはその背後のナプリ、修道士と見た後、ゆっくりと頭を巡らせ、背後に立つ剣士達を一瞥

し、ようやく最後に、トトへ視線を定めた。
冷たい天青の瞳が、貫くようにトトの眼を見据える。　立ち止まってから、一切言葉を発せず、動く様子も微塵にみせない。
「従ってもらうからには、縛らせてもらおう。　壁に向かい、手を上げな」
背後の剣士の一人が、抜いていた剣をラスターの首筋に付けた。
だが、ラスターはなおも微動だにしない。　ただトトの眼を見据え、口を結んだままでいる。
「聞こえなかったのか？　手を上げろ、と言ったんだ」
トトの苛立ちを含んだ声に応じるように、背後の剣士は刃を、ラスターの首へより強く押し当てる。　それでもラスターは動く事なく、その白い顔にふっと、微笑を浮べた。
「――言うべきことは、言い終えたか？」
ラスターの声が、通路内に透る。
トトを始めとする、その場にいる全ての者は、その言葉の意味を解する事が出来ず、呆然と声の主を見詰めた。　ほんの僅かの間の沈黙。　それから、ひきつった笑いが、トトの口から漏れる。
「さすが騎士様は違うねえ。　この状況で、剣を背後から突きつけられても、その余裕の態度。　しかも、こりゃぁ女以上だ。　その微笑はまるで、男を誑かし迷わせ、破滅へと誘う魔性の笑みだ。いいな。　いいよ、その挑発的な眼も、なかなかゾクゾクさせてくれる。　これは、央都のどんな高娼より、いい思いをさせてくれる予感がするぜ」

トトは舌なめずりをすると、柄に手をかけ、目を細める。　一連の様子を黙し見ていたナプリは、ラスターの余裕に違和感を覚えた。
トトの肩に手を置き、その動きを制止する。

「何だ？」

「焦るな。　奴は――何かがおかしい」

「ナプリ。　毎度の？勘？ってやつか？　イリの民は迷信を信じるという話は聞いていたが、その勘とやらは、あんたらの国の神が与える、天啓ってやつか？」

ナプリは一瞬、険しい眼でトトを睨んだが、直ぐにラスターへ視線を戻すと、その手に暗器が隠されていないか見極めようとした。
ナプリの危惧を察したラスターは、掌を露わにし、無造作に突き出して見せる。

「そなたらの思うような武器の類は、何も携帯してはおらぬ。　私はあの牢とやらに入れられるに際し、全身を調べられている。　何を隠し持つ事が出来よう？」

ナプリは背後の修道士達に視線を送る。　修道士の束ねと見られる老齢の男が、ぎこちなく頷く。

「ナプリ。　そんな心配をしていたのか？は、用心深いにも程がある。　例えこいつが暗器を隠し持っていたとして、俺ら全員をどうにかできるとでも思うか？」

「そんなことではない。　気が付かないか？　あの男の手の模様。

僅かだが赤い光を帯びている。　あれは――」

全身に緊張を廻らせるナプリが、視線で示すと、トトを始めとする、周囲全ての者達の視線が、ラスターの手の綾に集まる。

それらの視線を受け、ラスターは更に艶やかな笑みを見せる。

「これが、気になっていたか。　安心するがいい。　これは、私を縛めるものだ。　同時に――」

突き出していた両手を、ラスターは軽く握り胸の高さまで持ち上げると、ゆっくりと開いてみせた。

開かれた掌の上で、青白い炎が獲物となる存在を求め燃え盛る。

明らかに炎としか見えぬそれは、だが、氷のように凍えて映る。

青い冷たき焔（ほむら）は、餓えた肉食獣のように、揺らめき、解き放たれるのを急くかのように、ラスターの掌の上で激しく蠢（うごめ）く。

炎の出現と共に、ラスターの首筋に当てられていた剣が蒸気を上げ、瞬く間に形を失う。　剣を手にしていた男は、手に突然感じた鋭く刺さる痛みに、視線を剣手に落とす。　手は、大火傷を負ったかのように、爛れ、皮が剥け、垂れ下がり、処々骨らしき物が覗き見えている。　剣士は全てを見終えた後、間の抜けた悲鳴を上げ、手を抱えるように蹲った。

場を包む緊張の糸は、極限にまで張り詰める。

「……無の炎――？　あ、れは〈炎帝の青き焔〉――……」

年嵩の修道士の口から、呻くような、怯えた言葉が絞り出される。

その言葉に、周囲の修道士達に恐怖のざわめきが広がる。　修道士達の様子に警戒を強くした剣士達は、一様に顔を強張らせ、鞘を払いそれぞれに構えを取った。

「おい、その無の――〈炎帝の青き焔〉ってのは何だ？　魔術の類か？　妖のまやかしか？」

ラスターから目を外すことなく、トトは修道士達に鋭く質問を飛ばす。　その問いに、ナプリが硬い声で応える。

「精霊……火の精霊の王。　四王いるといわれる火の精霊の中で、最大の力を持つと云われる、炎の帝王のことだ」

トトは僅かに眉根を寄せ、ラスターをより険しい眼で見る。　周囲の剣士達の間にもざわめきは広がり、次第に大きく、騒がしくなっていく。

ラスターは、己に寄せられる怖れと嫌悪の入り混じる視線を受けても、何ら変わることなく淡々としている。　ただ、その表情から笑みは消え、トトを見据える青の瞳が、深い輝きを増した。

「精霊だ？　それがなんだというんだ？　目に見えん、在るか無いかも不確かな存在を怖れ、惑わされるなど馬鹿馬鹿しいにも程がある。　ナプリ。　あんたも年だな。　やる気が無いのなら、失せろ」

トトは剣を構えると、低くい声で唸るように吐き出す。

「仲間の言葉には耳を傾けるものだ。　私は、このような場で刻を費やすつもりは無い。

命惜しむ者は退がれ。　最後通告だ。　さもなくば、何者であれ、阻む存在として、この炎に喰わせる」

ラスターは、トトが制止する間を与えぬ速さで左手を横へ払う。

青白の炎は蛇の如くシュルとラスターの手から伸び、ラスターを囲むように幾重もの渦を巻き、他者を威嚇するかのように、時折、

炎の触手を剣士達に向かい伸ばしては、獲物を捕らえる機会を計っている。
青炎の流れる動きを目にしたことで、修道士達は個々に悲鳴や奇声を上げ、我先にと通路の奥へと駆け出したが、長衣の裾を踏み躓(つまづ)く者に、後に続いた者が重なるように倒れていく。　修道士達の動揺は、一部の剣士たちにも伝染してゆく。　歳若い剣士の中には、僅かに後退り始める者もいる。

「ちっ。　どうしようもねぇクズ野郎共めが。　この程度の炎なんざ、戦場の比でもあるめえに」

ジリジリとラスターとの間を計り、トトは獲物を前にした興奮に目をぎらつかせ、歯を剥きだし笑っている。
対象的に、ラスターは冷めた眼差しをトトへと向けている。　その不敵とも思える眼差しに、トトは挑発され、ラスターへの一撃へと走った。

「やめろトトっ。　こいつは俺達の相手できる――」

ナプリの叫びに近い制止の声。
その声と重なる、いまひとつの声。　それは、声というより絶叫。
激痛に悶える者の、狂気に近い叫び。
その場にある者達は皆、息をすることすら忘れ、その光景に目を奪われた。
直前まで、目の前で動いていた青年が、青い輝く光――炎に包まれ、瞬間、その姿は眩み見えなくなる。　消えた姿を、人々は青炎の中に見出す。　正確に言えば、人間であろう物の影絵。
先の叫びは、今は既に聞こえはしない。
青炎の中で人の形をしていた影は、棒状の不確かなものへと形を変え、蒸発するように、蠢く青い炎の中で消滅した。

全ては、瞬く間の出来事である。

「――次は、如何いたす？」

ラスターは表情を変える事なく、背後に続く剣士を見据えた。

その視線を最先に受けるナプリが、ごくりと唾を飲み下した後、ラスターの瞳を見返す。

青い炎蛇に護られ立つ、何よりも青く澄んだ瞳を持つ青年騎士。

噂に聞いたことがある。

聖都ティルナにある、一人の存在。

五人いる神エランの長兄、シーラの血を受け継ぐという至上の存在。　ある時を境に、その者は騎士を志したと。　〈方円の騎士団〉創始の一人である、騎士セラムの薫陶を受け、その腕は、見る間に騎士団一のものとなり、当然の如く、聖騎士に叙せられた。

その姿は、精霊王シーラを映したかの如くとも、陽の神ソルギムの如く、黄金に輝くとも云われ、永遠の時を、生きている――。

「――まさか、精霊王殿の……聖騎士。　伝えのあの、アラスター＝リージェスか――」

ナプリの、硬く僅かに怯えを含んだ問いに、ラスターは微笑を浮かべ、視線を向ける。

「――ただ、神殿に出入りする程度では、それ、を知らぬ。　同名の騎士とて、他にも存在する。　そなたも元は騎士。　しかも、長きに渡り生真面目に勤め、僅かばかりの伝えを知らされる程、神殿が信を置いた者――仕え先は、さしずめ、西都」

ナプリは何も答えず、ラスターの動きを注視している。　他の

騎士達は、二人の会話の行方が見えず、大半の者がじっと動けずにいた。　その場を動かない理由は怖れだけではない。　仲間の死を目前にし、ある者は怒りをふつふつと増大させ、そして突如、爆発させる。
　比較的年若い三人が、前方から一人、後方から二人、一斉にラスターへ突進をする。
　ナプリは声を上げようと口を開ける。　しかし、その声の発せられる前に、三人は青炎に包まれ、消滅する。

「いま一度言おう。　退け。　さもなくば、消滅させる」

　ラスターの青の瞳が、炎の輝きを映し妖しい光を帯びる。

「お止め」

　背後から、ふいに女の声が響く。　年齢の計れない、凛と張りのある、力を持つ声。

「貴方の目的は、わたくし。　――そうでありましょう？　アラスター＝リージェス」

「――都合もあろうゆえ、こちらから出向くつもりでいたが、その方から参るとは。　足労をかけたな――キサ」

　ラスターはゆるりと、顔を声の主へと向ける。
　黒の長衣に身を包んだ白髪の老女が、未だ消えぬ青い炎を足下に、静かな笑みを湛え立っている。

＞ｉ３９５０－２４０＜

8：真実の姿（後書き）

次回、〈9：困惑〉に続きます。

9：困惑

9：困惑

いま、眼にしているものが全て〈真〉とは限らない。
誰かが、そう言った――。

「アル、アルフィナだよね、ねぇ、アルっ」

白銀の長い髪を地まで垂らし、白い長衣の少女はただ、無言で立っている。　その脇に立つ灰色の操骸師（そうがいし）は、ひき攣（つ）れた笑みを、肉のない顔に浮べている。

「アルっ、どうしたんだよ、ねえ――」

カラの言葉を遮るように、墨色の衣の男の手が伸ばされる。

「――無駄だ。　誰の言葉も、アルフィナの耳には届かぬ」

男の言葉は至って平坦だった。
だが、見上げたその黒の瞳は、背筋が凍るような冷たさを、見る者に感じさせる。

「やっぱりアルフィナなんだね？　どういうこと？　耳に届かないって、なんでっ」

『五感を封じられておるのさ、あの骨に皮の猫背男にな。　あの娘はいま、人形も同じよ。　立っているだけ、動かされるままに動く』

カラに抱えられたままの蜥蜴(とかげ)が、クルクルとひとつだけ残された右の瞳を動かし、しゃがれ声の言葉を挟む。

「ごかん――って、人形って、どういうことだよ？　髪だってさ、白？　銀色？　何にしろさ、なんであんな色になっちゃってんだよっ」

抱えぶら下げている蜥蜴に向かい、傍目を気にする事なく喰いかかっているカラを見て、セナは金色の瞳を大きく開き、下がりかけの眼鏡を左中指で上げると、口角を大袈裟に引き上げ、笑顔らしきものを作って見せた。

「驚いた。　それ、もしかして聖獣だったんだ？　そんな薄汚い蜥蜴が？　これは一本取られたな。　実に上手く、化けの皮を被っていたものだ。　それで、それ。　火竜なのかな？　ずいぶんしょぼくれているけど、まあ、智慧はそれなりにありそう、かな？　――ふふ、今日は驚く事が一杯だなあ。　しかも君、それ、の言葉が分るんだ？　君、素質があるんだね」

セナの感嘆とも嘲りともつかぬ言葉に、カラに抱えられたままの蜥蜴は、止めさせる隙も与えず火の矢を吐き出す。

「あ、熱いっ。　何すんだよっ。　アルに当たったらどうすんだよっ」

『うるさいのぅ。　よう見い、何者も焼いてはおらんだろうが。あの骨皮猫背男に挨拶をしたまでじゃ。　喚(わめ)く前に、顛末(てんまつ)をしかと見んかい』

蜥蜴は鼻息荒く言い放つと、硬い尻尾をブンブン振り回し、カラの腹と腕を叩き続ける。
確かに、何も変化は起きていない。　蜥蜴が放った火矢は暗闇を僅かに裂いたが、何者も焼きはしていなかった。

「今の炎は挨拶、ってところかな？　僕の言ったことを理解している、ってこと？　ふうん？　これはこれは。　やはりその蜥蜴も、僕の元へ御招待しなくては、だな。　もちろん、君と一緒に、だよ」

セナは上目遣いで、カラの金の瞳を見つめる。　無意識に、カラはじりと後ずさる。
蜥蜴を抱える手には、金色の輝く貴石が、その場には不似合いな清い光を放っている。

「その手の短剣。　すごいオスティルが付いているね。　先刻は、君の存在ばかりに気を取られて気付かなかったけど、君を護っていた残りかすの光、そのオスティルの名残だったんだ。　納得だな」

「な、何言ってるのか知らないけど、アルを、離せよっ」

カラは、詰まりそうな喉から、必死に言葉を搾り出す。　あの金の瞳に見据えられている事が、怖い。　それでも、眼を逸らすわけにはいかない。

「オスティルのこと、君、どれくらい知っているかな？」

小さな子供に問いかけるように、セナは柔らかな口調でカラに言葉を向ける。
カラはただ、セナの金の瞳を睨みつけるしか出来ない。　その視線を受け、セナはふふと笑う。

「オスティルという貴石は、主人を選ぶ、とても我が侭な石なんだ。気に入らない主人に持たれると、その本来の力の半分も示さない。聖獣のように、とても、気位の高い、扱い難い石なんだ」

「ど、どういう意味だよ――」

「君は、その貴石に選ばれている。　というより、仕えられている、かな？　その貴石が護ろうとするのは、古の民（いにしえ）の血を引く者。　その血が濃いほど、オスティルはその役目を果たそうとする、と伝えられているんだ。　もう一度問うけれど、君、《名》は？」

カラは服に隠れたペンダントを握り締め、口を固く結んだ。　カラの様子を見て眼を細くすると、セナは隣の男に視線を移す。

「――ところで、レセル。　君はさ、いったい、何がしたいんだい？」

愉快そうに、セナはレセルと呼びかけた男の表情を伺う。　レセルは答えることはせず、カラを隠すように立ち位置を移す。　その一連の動きを見た後、セナは目を更に細め、声を出さずに笑う。

「この女の子。　アルフィナ、っていったっけ？　娘、なんだろう？」

セナの言葉に、後方のカラが驚きの眼差しをレセルに向ける。レセルは先と変わらず、険しい眼でセナを見据えている。

「〈鏡の巫子〉と称された、先の〈斎王（さいおう）〉と君の間の子、なんだろう？　君は知らないかもしれないけど、君達夫婦、一部では意外と

知られているよ。　特に、〈正神聖教（シン・エルナイ）〉には、ね。　歴代でも屈指の能力者だったというその巫子を、精霊王殿であれ他の大神殿であれ、手放すとは誰も思わなかったからね。　それが、一騎士と夫婦になるなんて、僕だって始めに聞いた時は冗談かと思ったよ。　各大神殿からの反対も、相当大きかったらしいじゃない？　それでも、二人は一緒になった。　そして、この子が生まれた。　――そんな大切な娘が、〈器〉にされようとしているのにレセル。　君、暢気だねえ。　その男の子は、君とは何の縁もない子供だろう？　なのに、信を置きもしない僕のところに自分の娘を残して助けに行くなんて、何を、企んでいるのかなあ？　オリ＝オナ殿に知れたら、殺されちゃうよ」

「――知られようが知られまいが、老師は俺を生かすつもりはない。あんたが一番、知っていることだろう？　俺を見張るは、あんたの役割のひとつのはず。　キソスの地の何処にも、あんたの眼となる物が撒（ま）かれている。　そうだろう？　イセラド＝ソイル＝ナジェル＝オークス」

セナはわざとらしく驚きの表情を作る。

「へえ？　よく、その名を知っていたね？　ああ、まぁ、君の過去を考えれば、知っていても不思議ではないのかな？　僕、結構高価（たか）い賞金かけられてるみたいだったよね？　？穢（けが）れた術師？って理由だっけ？　でも、何回も〈器〉を替えたから捕まらなかった。　手に職は、付けておくものだと思うよね、つくづくさ」

セナは、にいと笑うと、アルフィナの腕を掴み自分の前に立たせる。　どんな乱雑な扱いにも、アルの表情は僅かな変化も見せない。

「アル、アルっ。　本当に聞こえないのっ、お願いだよっ、何か言

ってよ、そんな奴にされるままになってるなんて、アルっ」

「いくら呼んでも無駄だよ。　？アルフィナ？って子はいま、深い眠りについているんだから。　どのみち〈器〉になるんだから、この子自身は、邪魔なだけなんだよ」

アルフィナの白銀の髪をひと房持ち上げると、セナは水を零（こぼ）すように、サラサラと流して見せる。

「ど、どういう意味だよ、眠らせてるって。　だいたいなんでそんな白い髪――」

「この姿は、この子の本当の姿だよ。　美しいだろう？　母親譲りの、美しい、白金の髪だ。　ねえ？　そうだよね、レセル？」

カラはレセルを見上げた。　だが、レセルの表情は些（いささ）かも変わらない。

「オリ＝オナ殿がこの娘に目を付けなければ、僕も、この子の身体を貰おうかと思った。
こんな、容量豊かな身体って、そうそうはないんだよ。　〈器〉に選ばれるわけだ」

「さっきから器うつわって、何なんだよ、〈器〉って――」

つんのめるようにカラが言葉を投げつけると、セナはアルに視線を向け、くくと笑う。

「〈器〉は器だよ。　モノを入れる物のこと。　〈斎王〉となるに相応しい、感応力に富んだ、素晴らしい媒体。　神を降ろすに相応

しい身体は、同時に、魔物にも魅入られ易い。　この子、此処までよく耐えて来たもんだよ。　キソスはいま、僕の撒いた魔物の毒気で穢されているからね。　この子、外に出ると体調、かなり悪かったはずなのに。　大した精神力だよね」

セナはアルフィナを前へ数歩押し出すと、左手をゆっくり、アルの肩に乗せる。　その手には、ぶら下げるように剣が握られている。

アルの手が、吸い寄せられるように剣の柄を掴む。

「――だから、もう少しは大丈夫だろうと思って。　試しに、入れてみたんだ」

「――それは、老師の命か？」

レセルの表情が険しさを増す。　手にしている大剣が僅かに揺れる。

「いいや？　もちろん、違うさ。　これは僕の遊び、だよ。　オナ殿が知ったら、はは、まぁ怒るだろうねえ。　だけど、大丈夫だろう？　この子、結構鍛えているみたいだし、なんて言ったって、君達にこの子は、傷付けられない――」

セナは眼鏡を押し上げながら、正面に立つ二人を見遣った。　セナの金の瞳が、三日月のように細くなる。

「――入れたって……いったい、何を、何をアルにしたっ」

身体の芯が熱くなっていく。　握り締めた短剣のオスティルが、更に光を増す。

『グリオルス・ルーンス、だな』

蜥蜴が、正面に立つアルを緑の瞳で見据え、チラチラと炎の混じる言葉を吐く。

「ぐ、グリ……な、何、それ？」

セナはくくっと笑うと、蜥蜴に細めた眼を向ける。

「？グリオルス・ルーンス？って、その蜥蜴は言った？」

「そ、それ、な、何なんだよっ」

「ふふ。　その蜥蜴、侮(あなど)れないね。　知らないかな？　ああ、昔語りの中ではよく？影鬼のグール？なんて、妙な名で出て来ているみたいだけど、そっちなら知っているかな？」

カラは、かつて聞いたことのある昔語りの中から、その魔物についての知識を必死になって引きずり出した。

？影鬼のグール？。　血肉を好む魔物。

自分自身の身体を持たず、影の中を伝い動き、気に入った身体を見つけると、その身体に寄生する。　寄生された宿主は凶暴化し、グールの求めるままに殺戮(さつりく)を始める――。

「そんな――そんなのをアルに……」

カラの声に反応するように、アルは剣を握り直し構えると、弓から放たれた矢の如く、地を蹴り、カラへと一直線に向かって来た。

前に割り入ったレセルの脇を、身体を屈め、するりと流れ抜けると、低い姿勢から、カラの喉元に切っ先を向け、弾ける勢いで切り

込む。
蜥蜴を縛(いまし)めていた腕を開き、カラもオスティルの短剣で最初の一撃をなんとか弾きかわすと、再びの攻撃に備え、短剣をしっかりと握り直し、防御の姿勢を取る。　柄先のオスティルは、カラの緊張が高まるに連れ、蛇顔の男を払った時と同じ鮮やかな金光を帯び始める。
オスティルの光がいよいよ溢れると、アルは短い呻きを上げ、ふっと、身体の力が抜け崩れそうになったが、すぐに体勢を立て直すと、さっと後方へ飛び退り、短剣を構え直した。
長い白銀の髪が、光の線を引きながら闇中を流れる。
ラスターにも劣らない、流れるような動き。
隙のない構えで立つアルに目を奪われたが、すぐに、その足下の淀みに気を取られる。
剣を構えるアルの左右の石床から、既に見慣れた赤い眼を持つものが、ずるずると這い出して来る。　虚ろな赤い眼。　だがその姿は、それまでに目にした獣とは異なっていた。
魔獣、と呼ばれる闇に潜む獣だと、その異様な姿からカラは推測をした。　少なくとも、例え死んではいても、美しさや気高さをどこかに感じさせた聖獣とは、まるで違う。　いま現れたそれらは、双頭であったり、全身を棘で覆っていたり、尾頭が蛇であったり、額に裂けた第二の口があったりと、明らかに通常の獣ではない姿をしており、何より、纏(まと)う空気が禍々しい。　しかも、いずれもが巨体。
引き攣(つ)ったカラの表情を見て、セナは満足の笑みを浮かべる。
「君には、普通の死獣じゃ相手不足のようだから、死んだ魔獣も、用意してみたんだ。　そいつらは、その貴石(オスティル)の光にも多少は耐えるから、先より楽しめると思うよ。　ふふ、大丈夫。　あんまり酷く傷つけないようには、一応、言い含めてあるから。　ただ、こいつらはすごく頭が悪いから、もし死んじゃうような傷を負ったら、ご

めんね」

アルは、オスティルの光に多少の躊躇(ちゅうちょ)をしているようにも見えたが、カラに剣先を向け、再び打ちかかる隙を見計らっている。　その周囲に群がる死魔獣達も、やや怯えた様子を見せてはいるものの、じりじりと距離を狭めてきている。

動かなければ、アルの剣か魔獣の牙に裂かれる。　そう、頭の隅では解っていても、闇中に白く輝くアルフィナの姿に目を奪われる。

『暢気に呆けておるようだが、お前、ここを死場に選ぶのか？』

しゃがれ声がすぐ耳元で響く。　同時に、左耳に鋭い痛みが走る。視線を向けると、いつの間に上ったのか、蜥蜴が肩に座っている。口から覗く牙に、血の滴りが見える。

「っつ、おっさん、いまオレの耳に噛み付いただろう？　あー、やっぱりっ。　血が出てるじゃないか。　何すんだよっ」

カラは左耳を押さえながら、肩の蜥蜴に向かい怒鳴った。　蜥蜴はしれっと舌なめずりをすると、右だけの眼をカラの顔へ向ける。

『先刻の放炎で腹が空いた。　お前のために放った炎じゃ、お前の血で購(あがな)うは至極当然であろうが。　ったく、たかがその程度のすり傷がなんじゃい。　そんな些細(ささい)なことをぐちゃぐちゃ言う前に、逃げるかアレと戦う覚悟を決めるか、が先であろうが』

「た、戦うって――」

『お前の血、なかなか悪くない。　あんな低級の魔獣共にも、？影鬼のグール？にも、くれてやるには、惜しい』

蜥蜴は緑の隻眼(せきがん)を細め、愉快そうな声を出す。　その声と重なるように、硬い、金属のぶつかり擦れ合う音が上がる。
顔を上げると、レセルの大剣に、アルの細い剣がギリリと音をたて喰らいついている。
アルの白い顔は、乱れた白銀の長い髪に半ば隠れているが、剣呑な笑みを浮べているのが覗き見える。
一人、離れた後方に立つセナを苦々しげに睨み付けると、レセルは大剣を払い、アルを壁まで弾き飛ばした。
壁に背を打ち付けたアルは、瞬間顔を歪めたが、すぐに体勢を戻すと、剣を構え直し、翔るように、再びレセルへと向かう。　続けざまに、剣と剣が交わる硬質な音が上がり、岩壁に当たって幾重にも響く。

「小僧。　己の命は己で助けるがいい。　俺はこれ以上お前に関わらん。　生きたくば自力で、己の道を拓け」

剣を操り、振り返ることなく発せられたレセルの声は、カラに現実の緊張を与えた。　見開いた金の瞳に、三頭の、赤い眼の魔獣が映る。　いずれも頭を垂らし、一定の位置で鈍重な足踏みを繰り返しているが、カラの様子を伺っているのは明らかである。

『その男の言うとおりだ。　ヤル気がないのなら、さっさとこの場から逃げる算段をつけんと、その死んだ魔獣共に引き裂かれるだけよ』

「ふざけんなっ。　アルが目の前にいるのに、置いて逃げるなんて――っう、わっ」

死魔獣の裂けた口が、僅か数歩先で開かれていた。　猪のような

巨大な身体に、猿のような頭を持つ魔獣。　その額には、二つ目の口が涎(よだれ)を垂らしている。　頭を僅かに低くした後、二つ口の死魔獣は地を蹴る。

とっさにオスティルの剣を払ったが、死魔獣の第一の口は剣の刃を咥え、カラからそれを奪おうとした。　オスティルは光を放っているが、この死魔獣はそれに耐え、額にあるいま一つの口を触手のように伸ばし、カラに喰らい付こうとする。

「――うっ……っ。　こいつ――っ」

右手だけで剣を握ると、伸びてくる口を左手で殴る。　殴られた口は、その瞬間は平たく潰れ額へと戻るが、少しの間を置くと、再び伸び出して赤黒い口を開く。

力の限りを尽くし、死魔獣を横倒しにしようとした。　しかし、先刻相手した死獣と違い、死魔獣はどっしりと地に足を着け、なかなか動かせはしない。

二つ口の死魔獣と組み合い動けないカラの左右に、他の死魔獣が舌を垂らし、ゆらゆらと歩み寄ってくる。　しかし、オスティルの光が効いているのか、この二頭は、一定以上には近寄って来ない。

だが、いつまでもそうだとは限らない。

「く――うっ……っ」

焦りがつのる。

しかし、思うように動きが取れない。

頭の芯が、凍えたようにキンと痛むのを感じた瞬間、間の抜けた欠伸声が耳元で上がる。

『まったく、やはり見た目のままにトロい子供だの。この程度に、このように時間を取られる奴が、あやつを相手になど、ふざけた妄

想だな。　こやつが喰らう前に、ワシが喰ってやろうか？　その方が、お前もまだ嬉しかろう？』

「――うれし……わけないだ、ろっ」

言葉を張り上げると共に、カラは短剣を離し、死魔獣の首に両腕を可能な限り巻きつけると、力任せに魔獣の巨体を抱え上げ、地に叩きつけた。　すかさず咥えられていたオスティルの短剣を抜き取ると、額の口に突っ込むように、剣を突き立てる。　口の深部で、オスティルが放った金色の閃光が、死魔獣の歯間から漏れ出だし見える。

光が和らぐと共に、死魔獣は激しい痙攣を起こし、終には動かなくなった。

大きく息を吐くと、カラは死魔獣の口から右腕をずるりと引き抜いた。　唾液と血の混じった液体がべっとりと付いている。　蒸れた悪臭が鼻を衝く。

思わず顔を左に背けると、大欠伸をする蜥蜴と眼が合った。　そのクルクルと光る緑の瞳は、カラを映し笑っている。

「――な、なんだよっ？」

『それは、ワシの言う事だろうが。　ま、ワシに、何ぞ――そうだな、礼でも言いたいというのならば、聞いてやるぞ』

神経を逆なでするしゃがれ声に、カラはまたもや力を与えられる形となった。　それは認めるが、礼を言う気などはもちろんない。

カラは顔をしかめつつ、右にそっぽを向く。

『ま、礼は後で十分言わせてやろう。　それよりこいつ等をどうにかせい。　臭うてかなわん』

蜥蜴は視線をカラから逸らし、左右に立つ死魔獣へと向ける。
どちらも、先に相手した熊や獅子の数倍の身体をしている。　左でカラを威嚇する双頭の狼の如き魔獣の、四本の尾は蛇頭をしており、青黒い舌を、せわしなく出し入れしている。　額の左右と中央に、巨大な角を有する野牛のような魔獣は、見るからに硬そうな、棘の有る鱗が全身をびっしりと覆っている。　その尾の先端は鋭い剣のように、不気味に黒光りをしている。

『カカムリクにコーテスールなあ』

「知ってるの？　あの魔獣。　つ、強いの？」

カラも死魔獣へ視線を定めたまま、蜥蜴へ短く問いかける。　蜥蜴はしばらく黙り込んでいたが、ししし、と愉快そうに笑った。

『――頭は悪いが、力は強い。　力だけならいまのお前には何とかなろうが、カカムリクの牙と尾の蛇、コーテスールは全身』

「そ、それが何っ？」

『僅かにでも触れれば、一瞬で死ねるな』

さらりと出された蜥蜴の言葉に、カラは溜まってもいない唾を飲み込む。

「毒――ってこと？」

『他に何がある？』

呆れたように蜥蜴は欠伸をする。　腹も立つが、恐怖の方が勝る。
迷った末にカラは、ぼそと口を開く。
「――あのさ、おっさんの火で、あいつらを――その、やっつける、とかできない？」
『出来るだろうな』
即答する蜥蜴に、カラは希望を見出す。
「それじゃあ――」
『だが、やらん』
「なんでっ」
再び即答で拒絶する蜥蜴に、カラは顔を向け不満をぶつける。
『タダでは――な』
ししし と笑うと、蜥蜴はカラへ視線を戻し、先程噛み付いて傷を負わせた耳を舐めた。
「な、何すんだよっ――」
クルクルと緑の瞳を動かした後、蜥蜴は睨みつけるカラの金の瞳を見返す。
『ワシと、契約をするか？』

「――け、契約？」

カラの言葉に被さるように、カカムリクと蜥蜴が呼んだ双頭の狼が、何の前触れもなく地を蹴り、カラの喉笛を目掛け大口を開ける。

後方へ飛び退りつつ、カラは短剣を払い防御の構えをとったが、外套の裾をカカムリクの尾の蛇に咥えられ、足下をすくわれたように瞬間宙に浮き、床に叩きつけられる。　蜥蜴は見た目からは想像できない素早さで、カラの肩から地に下りたが、手にしていたオスティルの短剣もまた、カラの手から離れた。

右半身を硬い石床に打ち付け、カラは瞬間、息をすることすら出来ず、呻き、しばらくは手足を動かす事すら出来なかった。

動けないカラを、カカムリクは外套の裾を引いて、口元まで引き寄せようとする。

ずるりずるりと、一定の間隔をあけ、石床の上を引きずられる。

ようやく手に力が戻ると、カラは地に手をつき、引きずられる事を漸（ようや）くに止めた。　カカムリクは更に力を込め、カラを引き寄せようとする。　右方には、うっそりとコーテスールが近付いて来る。

剣のような尾を天に向け、カラを威嚇するように前後に振ってみせる。

「……く、う――」

歯を喰いしばり、カカムリクに逆らう。　しかし、トルサニの外套は丈夫で、噛み切られることがないかわりに、カラを縛（いまし）める縄となっている。

このままでは、引きずられるだけ――。

カラは、身体を支えていた右手を素早く動かし、外套の留め金を外す。

途端、縛めは解かれ、カカムリクとカラは、同じように体勢を崩した。　その瞬間、カラの脇腹横にコーテスールの剣尾が突き立つ。

見た目どおり、相当な硬度があるらしく、深々と石床に突き刺さっている。　あと数歩、右に寄っていたら、この硬い毒剣がカラの身体を貫いていた。
冷や汗が流れる。　カラは転げるように左へ移動すると、岩牢を背に立ち上がった。
その肩に、オスティルの短剣を咥えた蜥蜴が這い上る。　カラは荒い息を鎮めながら、蜥蜴の口から短剣を受け取る。
『まだ何もしておらん内から、息が上がる程に疲れ果てるとは、若いくせして情けないのう』
「――う、うるさいっ。　？果て？てなんかない、ちょっと、息を整えてるだけだよっ」
二頭の死魔獣から眼を逸らさないまま、カラは忌々しげに言葉を返す。　ししし と笑うと、蜥蜴は首を伸ばし、カラの視界に自分の顔を入れる。
『どうだ？　ワシと、契約をするか？』
カラの金の瞳を覗き込む緑の隻眼は、クルクルと輝いている。
「契約って、どういう意味だよ？　それしたら、どうなるってんだよ？」
『契約は契約だ。　お前とワシが主従の契約を結ぶ。　ワシはお前を、護ってやろう』
「しゅじゅう？　何それ、まもる――っ」

カカムリクが、再び前触れもなく地を蹴る。　巨体には見合わない跳躍。　赤黒い巨大な口の中に、カラの腕ほどある太い牙が八本。
触れただけで死に至ると言う毒牙を持つ双頭の獣が、頭上からカラを襲う。
足が竦(すく)み、見上げるしか出来ない。
見開かれたカラの視界に、紅蓮の火矢が走った。　火矢はカカムリクの一方の口を貫き、爆発するように、魔獣の身体を炎上させ、地に落とした。
魔獣の口から、初めての声が上がる。
四方の岩壁を打ち壊すのではないかと思われる、耳を塞がずにはいられない攻撃的な轟音。　目を瞑(つむ)り、頭を抱えるように耳を覆う。
ビリビリと身体が痺れる。
俯き、音を遣り過ごそうとするカラの口に、冷たく硬い物体と共に、ぬるりとした液体が触れる。　生臭い苦味が、口の中にじわりと広がる。
閉じていた眼を開くと、蜥蜴の尾が唇に触れていた。　尾の先には小さな噛み傷があり、血が滲んでいる。　口に広がったのは、蜥蜴の血。

「な、何を――……」

カラは蜥蜴を睨んだ。

『ワシに、《名》を与えよ』

塞いだままの耳底に、蜥蜴のしゃがれ声が太く響く。

「な……《名》って――？　どういう意味だよ？」

『血は交えた。　後は《名》のみ。　与えよ、《名》を。　お前の

内に在る、お前だけが知る我が《名》を、その口より出だせ」

それまでにない、蜥蜴の力ある声に、カラの心臓は応えるようにどくんと大きく打ち、視界は震えるように揺いだ。　周囲の、一切の音が遠退き、聞こえなくなっていく。

口が、我知らずに動く。

「――《ナジャ……》」

ひとつの《名》が、口から零れ出た。

蜥蜴は、緑の隻眼を輝かせた。

＞ｉ４７３９―２４０＜

9：困惑（後書き）

次回、〈１０：清濁〉に続きます。

10：清濁

10：清濁

詞（ことば）の最後の一句を言い終えると、ナハは瞳を開け、ほぅ、と息を吐き出す。

壁に描かれていた呪紋様が、砂が零れるように壁面から剥がれ落ち、消滅する。

濁水のように淀んでいた空気が澄み、さらりと軽やかになる。

「――はい、終了」

足下には、小さな〈地〉の精霊が、ようやく、呼吸が出来るようになったといわんばかりに、口をぱくぱくとさせ踊っている。

「御助力をありがとう。　少しは楽になったみたいだね。　まだ、完全に毒が抜けているわけではないから、あとはあなた方で、この〈地〉の浄めをお願いするよ」

足元の小精霊は、承諾するように明滅する。　ナハは笑顔を残し次の場へと向かう。

旧宝物殿の堂内を手始めに、ナハは地下の要所要所で、穢された〈地〉を浄めながら、カラとアルフィナが通った後をなぞるように進んでいる。

地上で感じていた以上に、キソスの〈地〉は穢（けが）されていた。　禍々（まがまが）しい、呪術により作られた液体を用い、地下のあちらこちらに封殺の呪句紋が描かれている。

「魔物の血に毒草から採れる猛毒――に聖獣の血の混合に――古い一族の人間の血も、入っているか。　よくこれだけの材料を揃えたもんだ。　しかも、キソスの地下中にコレを描いて歩いたとは……暇と体力もあるよなあ。　いくら金積まれても、こんな臭い仕事、私はやりたくないね」

イリスミルトの宿周辺は、イリスやラスターの細心の配慮で、一般的な穢(けが)れを寄せ付けないが、その枠をひと足でも出れば、淀んだ臭気が大地から滲み出している。　鋭敏な者であれば、体調を崩し病み、その期間が長引けば、極端に体力のない者は、命の危険すらあるかもしれない。

ナハは頭を掻きながら、いま一度大きなため息を吐く。　光球(ひかりだま)の微光の先に伸びる地下道は、幾重にも曲がりながら、まだ遥か先まで続いているのは確実である。　知らずため息が漏れる。

「遣(や)らざるを得ないけど……長いねえ」

〈地〉が穢(けが)れると、それは〈水〉に及び、〈水〉は大気へ融け、〈風〉にのり、容易に他地へと広がる。

〈地〉は、〈源〉であり還る場である。

それが穢されることは、〈火〉〈水〉〈風〉何れの存在であれ、看過できることではない。　現在は東の一地方都市のみの穢れでも、それは何れ、他地へも広がる怖れを孕んでいる。

レーゲスタでは、精霊は、神〈エラン〉に並ぶ〈祖神〉として、単独で崇拝の対象とされることが多い。

人間社会ほど細分されてはいないが、〈火〉〈水〉〈風〉〈地〉の精霊もまた、東西南北に分かれて集団を作っており、それぞれの地で、各属性の長たる〈王〉を頂く。　各属性の長であり、東西南

北各属の代表である彼等は、八年に一度、ティルナの精霊王殿に集い、各地各属性の情報を交換する。
〈風〉や〈水〉のように、流れ動く性質の精霊は、常に多くを見聞きしているので、「情報交換」という名目の集いは無意味であるが、四属は相扶（あいたすけ）、相克する存在であるため、他属性との関わりを絶つことはできない。
交わりを嫌う〈火〉、変容を続ける〈水〉、自由を好む〈風〉、安定を望む〈地〉と、あまりにも性質が異なるゆえ、互いを解り、時には扶（たす）け、時に牽制（けんせい）しあうため、レーゲスタ大陸創世時より続く集いとなっている。

精霊という存在は、何れの属性であれ、とても誇りが高く、容易に他を受け入れることをしないが、その中でも殊に〈地〉は、他属よりも保守性が強く、己が住属する〈地〉を離れることは、ほとんどしないといってよい。
己の〈地〉を護り、他の〈地〉への介入をすることもしなければ、他の〈地〉からの介入も好まない。　それは、〈地〉の精霊の力を行使する地の長に対しても同じで、己の〈地〉で、他所から来た地の長が、その力を行使することを許すのは、非常に稀である。
誇り高く頑（かたく）なな〈地〉の精霊が、流れ者のナハの行為を受け入れ、むしろ、感謝を示すほどに、キソスの〈地の者〉は疲弊しきっている。　キソスには、定住する地の長はいない。　ゆえに、ナハを受け入れる、致し方ない理由があるともいえた。

地下への道を進むにつれ、指先が凍えるほどに気温は下がっていく。　光球の微光に、吐き出す息の白さが見える。　しかし、相反して、ナハの額には汗が滲んでいる。　粘るような、地下の重く淀んだ空気。　気を緩めると、闇の色に、じわじわと染められていきそうな、吐き気を伴う悪寒と頭痛がナハを苛む。

ナハは再びため息を吐き、延々と続くかに見える先の闇を、頭をかきながら見遣った。　小さな光球が、ナハを励ますようにクルクルと、眼の前で円を描く。

「しかし、お子様二人は、よくこの中を進んだものだよなぁ。　アルには、イリスミルトが薬を飲ませ続けていたはずだから、まあ多少は耐性があったにしても……うーん、若いって、やっぱり羨ましいことだよね――」

ナハのぼやきが終わらぬうち、地下空間へ涼風が吹き込む。　重く淀んだ空気が、さぁと流れ動き、濁りを沈め、浄められていく。
一呼吸の後、空気は清く、爽やかで軽やかなものへと変化した。
空間の暗さに変わりはないが、幾分、明るくなったようにさえ感じる。
その心地よさに、ナハが深く息を吸い込むと、後頭部を勢いよく叩かれるのが同時。

『ぐちゃぐちゃぼやいているんじゃないよ、聞き苦しい。　ったく、まだこんな所でノロノロしていたとは、ナサリィ・ハイエル・ティータ＝ラスクス。　お前、本当にやる気はあるのかい？　まだ、三分の一しか進んでないじゃあないか』

「酷いなあ。　カ・ナフィ・ルーイ。　これでも私としては結構、頑張ってやった、と思うのだけど？」

『何が？頑張って？だ。　お前、逢う〈地の者〉にいちいち、へらへら笑って挨拶なんぞしながら作業をして来たのだろうが。　愛想振りまく暇を省いておれば、もう少しは進んでおったはずだ。　ぼやいている暇と体力があるなら、さっさと先へ進まんか』

背後の暗闇に、ぽうと現れたカナルへ、ナハは叩かれた頭を摩りながら視線を向ける。

「君が戻ってきただけで、更に浄めは進んだから、私の持分は、残り三分の一を切ったんじゃないかな？　〈緋のナフィ・ルーイ〉。南の〈地の王〉の力を以ってすれば、残りはあっという間だ。あと残り三分の一は、ラスターが浄めているんだろう？」

腰よりも長く流れる漆黒の髪を、軽く背へ梳き払うと、カナルは腰に手をあて、地へゆっくりと降り立つ。

『――はん。　好戦的な〈火〉の、しかも〈炎帝〉のことだ。　焼き尽くすだろうさ、あの凍えた青の炎でな。　浄め過ぎるくらいだろうよ』

「〈炎帝〉の力は、〈火の四王〉一という話だからね。　しかも、桁違いのようだ。　〈地〉の中にあってもなお、それを圧する激しい力。　こんな離れた場にあっても、肌を刺す鋭い痛みを感じるよ。ラスターも〈炎帝〉も、ここでは一応、力を抑えてはいるだろうけど、間違っても、敵にはしたくないね。　――でもまあ、私にはナフィがいるから、いざとなっても、心配はないかな？」

カナルの緋の瞳がナハを捉え、細められる。

『――まったく、あたしも物好きだとしみじみ思うよ。　ハイエル・ティータ、お前のようなのと行動を共にしているのだからな』

「光栄なことだと思っているよ。　地の長で、君ほどの美人を、しかも、〈四王〉の一人を半身と出来たのは、長い精霊使いの歴史の中でも、風使いのセラム殿、と私、くらいだからね。　運命に感謝

だ。　なんていったって、契約する精霊の力が、私達の力。　そして、寿命そのものだからね」

ナハは屈託ない笑顔を見せると、カナルへ手を差し伸べる。　しなやかに、カナルは手を乗せ、艶然と笑んで見せる。

「?命を売り渡すようなものだ?と、精霊使いになるを拒んだ小僧の台詞とは思えないねえ?」

精霊使いは、精霊と契約をする際、《名》と血を差し出す。　精霊がそれらを受け取り、被契約者たる精霊使いに、新たな《名》を与え、精霊の、力そのものともいえる《真名(まことな)》を明かした時、精霊使いと精霊の契約は成立する。

契約以降、互いの《名》は、互いの間でしか口にすることは許されず、日常では、?ナハ??カナル?といった〈仮名〉で呼ぶ。

精霊と契約することで、契約を交わした精霊使いは、精霊の力の一部を常に行使できるようになり、また、非常に長命な精霊と共に在れるだけの寿命を得ることとなる。　それは、一般の人々とは違う、長く緩やかな時間。

「歳月と共に、人は変わり行くものだよ。　――いや、人だけでないな。　この世の全ては変わるものだ。　例え、安定を望む〈地〉でさえも、ね」

鼻先まで近付いた、カナルの彫の深い顔を見ながら、ナハは改めて笑んでみせた。

『――この件、本来なら〈東の王〉を出して、ケリを付けさせたいところだ。　だが〈東〉は鷹揚(おうよう)。　アラスターにも〈炎帝〉にも何も言わん。　歯痒いよ、まったく』

忌々しげに言い捨てるが、その言葉には仕方がない、と言う響きが滲んでいる。

「〈東〉殿は、君と違って争いを好まないからね。　だけど、キソスの〈地の者〉は、〈東の王〉が？来ている？ことに気が付いているし、状況を理解してくれている。　だからこそ、本来部外者の私にも簡単に助力してくれる。　？〈南の王〉を歓迎する？と、さっき逢った〈地の者〉が言っていたよ。　これでナフィ、君も遠慮なく動ける。　どう？　私も頑張っていただろう？」

『よく言う。　それはお前だけの成果ではあるまいが』

「はは、その通り。　これもエアルースが地上を駆けて、先にキソスの〈地の者〉に伝えてくれているからだ。　お陰で楽に話が進んだ。　彼自身が〈狩り〉の対象になりかねないのに、こんな派手に働かせて、少々心苦しいね」

燃えるような輝きを帯びる緋色のカナルの瞳を見つめ、ナハは困ったように笑う。

『あれは、このキソスに長く在(あ)ったユーラの気に入りの聖獣。　〈東〉の老体に並ぶ信を、このキソスの〈地の者〉から得ている。この地のことを知り尽くしているんだ、使える存在(もの)は使えばいいさ。　とはいえ、〈東〉の老体にも、〈東の地〉を統べる長としての態度をいま少し示してもらわねば、このキソスの〈地の者〉の面目が立たん』

「まあね。　しかし、仕方ないだろうさ。　古の盟約(いにしえ)の際、〈東〉殿は〈地〉の代表として、ラスターの〈護盾(まもり)〉となったのだから。

キソスの〈地の者〉は皆解っているさ。　それに、それを言うなら〈南の王〉、カ・ナフィ・ルーイ。　君が、流れの地の長である私と共に放浪している方が、余程問題ではないのかい？　〈南〉の方々は、怒り心頭じゃないのかね？」

カナルはふんと鼻で笑うと、褐色の長い腕をナハの首に絡ませ、ナハの唇に紅唇を重ねる。

『――それも、仕方のないことさ。　あたしはお前と遇(あ)った。　そして気に入ったんだ。　〈南〉には、あたしの手足も同じ〈地の者〉が幾つかいる。　事あらば報せを寄越すし、少々のことならば奴等のみで十分だ。　だが、いざの時には、あたしの半身であるお前も、有無を言わさず〈南〉へ引っ立てるよ』

ナハは土色の瞳を細め笑うと、いま一度カナルの柔らかな唇に己のそれを合わせた。

「本来、体温のないナフィ、君の唇が熱い。　ということは、怒っている――か、やる気が漲(みなぎ)っているか――。　まあ両方、かな？」

ナハの鼻先で、カナルは妖しく危険な笑みを浮かべる。　緋色の瞳は、更に輝きを増す。

『〈東〉の出来事であれ、〈地〉を汚されたは業腹(ごうはら)。　この行いを見過ごすは、全ての〈地〉の屈辱。　〈火の者〉や、アラスターに全てをさせるもまた癪(しゃく)。　例え、相手が何であろうと、〈地〉を巻き込んだ対価を、仕掛けた輩に支払わせねば、腹が収まらん。　――体力は、残っているだろうな？』

ナハはカナルの腰に手を回し、緋色の瞳を見返しながら軽く肩を

竦め笑う。

「君が〈地〉だということを、時々、疑わしく思うよ。　その好戦さはまるで、〈火〉だ。　――まあ私も、だてに百数十年、君と時を過ごしたわけではないから、子供達を連れ出すまでの体力くらいはあるさ、多分ね。　居場所は、おおよそ見当が付いたし。　この先三回曲がった後に広がる、穢れが最も酷い空間――そこが、岩牢のある場だろう？」

カナルは額にかかる髪を掻き上げながら、切れ長の瞳を進路へと向け、細める。

『その場にいま、このキソスの〈地〉を穢した術師もいる』

「ああ、酒場通りで私を誘った男達が言っていた、骨と皮の術師。通称、セナ、ね」

ナハは辟易したような表情で頭を掻く。

「イセラド＝ソイル＝ナジェル＝オークス。　禍術狂いのお尋ね者。まさかあいつが、〈正神聖教〉に潜っていたとはね。　ま、陰気で粘着質な奴の性格には、合った場ではあるか。　しかし、前に遇った時には、骨皮というより、転がした方が早そうな大男だったが、また、〈器〉を替えたわけだ。　未だ、あんな術に凝っているとは、執着だねえ」

『暢気に考察している場合か？　その痴れ者が、イリスミルトのところの小娘を使っているぞ。　小娘の髪は白銀に戻っている。　本人の意識は、ない。　――グリオルス・ルーンスを、入れられたね。なんとも厭らしい使い方を、しているじゃあないか』

言い放ったカナルの顔には、はっきりとした怒りが見て取れる。
流れる黒髪が、生きているかのように、ざわめき動く。

「髪が白銀――ということは、イリスミルトのかけた護呪が解かれた、ということかな。　うーん。　その状態じゃ、渡していた薬の効果も半減だな。　あの子は様々に影響を受け易い。　少々、まずいな」

『命は奪われまいが、急ぐに越したことはない。　すぐに〈器〉とすることは出来まいが、妙なものを入れ続ければ、小娘自体の体力が持つまい。　もう一人の、件の子供も気になる。　その子供と共に、妙なものが在る』

「妙なもの？」

『邪悪ではない。　だが――陽の下の存在ではない、闇に馴染んだ翳（かげ）りがある。　あたしら精霊に、〈火〉に近い。　だが違う存在。　聖獣か――。　どうにも、気に入らないね』

「カ・ナフィ・ルーイ。　君が把握しきれない存在とは、それは気になるな」

ナハも顔から笑みを消すと、カナルの前に立ち、これから進むべき通路を見遣る。
静かに、深く息を吐き出す。

「我が名？ハイエル・ティータ？は貴女より与えられし《名》。我に、その《真名》を明かし、口にするを許した、誇り高き南の〈地の王〉、カ・ナフィ・ルーイに請う。　我、ハイエル・ティータ

が、貴女の力をわが力と成すを、貴女は諾とされるか――」

平素とは違う、一段低い響く声で、ナハは振り返ることなくカナルへ問いかける。　背後から、ナハの肩に手を回したカナルは、艶然と微笑み、ナハの頬へ口付けをする。

『何の、否やがあろう――』

＊＊＊

キサの一喝で、ラスターを囲んでいた剣士達は剣を納め、キサのはるか後方に退いている。　ラスターの放った青い炎の残りが、処々で闇を照らしうねっている。

「やはり、貴方は些(いささ)かもお変わりがない。　こうして、再びお目にかかる日が来ようとは――巡り合わせというものは、実に面白いもの。　……いえ、これは必然、でしょうか」

黒衣に身を包んだキサが、灰色の瞳をラスターへ向ける。　かつて黒かった頭髪は、今は総白。　顔にも老いが見られる。

ラスターは口を開くことなく、ただじっと、キサの瞳を見据えている。

「――未だに、赦(ゆる)せませぬか？」

キサも視線を逸らすことなく、ラスターの青の瞳を見返し、落ち着いた様子で言葉を続ける。

「貴方にとって、あの方は、大切な朋(とも)友ではないのですか？　あの方がおられなければ、アラスター＝リージェス、貴方はこの場にい

ることはなかった。　そうでは、ありませぬか？」

キサは変わらない、ゆったりとした口調で、ラスターに問いかけるように、一語一語を強調しながら言った。

それでも変わらず、無言のまま自分を見据えているラスターに、キサは小さく息を吐く。

「――本当に貴方は、変わられない」

「変わらぬものが、あるのか？」

短い問いに、キサは床に落としかけた視線を戻す。　白い、神像の如き顔に、相変わらず表情はない。　しかし、その青の瞳には深みが増している。

「キルセ・エーレ＝サニア」

キサの、欠けることのない《名》口にすると、ラスターはキサの額を差すように、右手をゆっくりと上げた。

キサの表情が歪み、ぐらりと、足下が覚束なくなる。　ラスターの手にある刺青は、青白い光を帯びている。

「そなたが大巫子となったあの時。　私はそなたに？エーレ？の《名》と、シーラの〈血〉を与えた。　精霊王殿に、精霊王近くに仕える者のみに与えられる〈聖血〉。　そなたの身の内に流れる一滴（ひとしずく）の〈血〉が、そなたに長命と幾許（いくばく）かの力を付与した。　だがそれは同時に、戒め。　それは、そなたも知っておるであろう？」

キサは苦痛の表情を見せつつも、膝を折ることなく、元の立ち姿に戻った。　気丈に立ってはいるが、呼吸が乱れている。

その様子を見て、ラスターは薄い笑みを浮べると、上げていた手を下ろした。
キサは、肩に圧し掛かっていた重荷を下ろしたように、ほっと、長く深い息を吐く。

「知らぬはずはあるまいな。　そなたは〈聖血〉の力を熟知している。　エランの〈血〉は、その力の象徴。　聖獣の創造主であるエランの〈血〉に、聖獣は戒められ、逆らうことは出来ぬ。　ガーランがあの折、容易に〈狩り人〉に狩られたは、そなたの血を塗った矢を受けたがゆえ」

キサは深く息を吸い込むと、声を出さずに笑った。　何に対してかは判らない、長い笑い。
笑いは突然止まる。　キサは視線を床に落とし、独り言のように口を動かす。

「――当然の成り行き、ということ。　あのグリフィスが連れられて来た時、貴方が、わたくしを捕らえに来られるは、わかっていた。
けれど、いまひとつの来訪者――あれは、まさか……」

ラスターは手の上に、青に輝く炎を出現させる。　照らし出される顔に一切の感情はない。

「そなたが一番、存知おる者――」

＞ｉ５５６４｜２４０＜

１０：清濁（後書き）

次回、〈１１：約束〉に続きます。

11：約束

11：　約束

八面の壁に、燈芯草の薄灯りが揺れる室は、異臭に満ちている。
数種の薬香草を煮出した、噎(む)せるような臭い。　強烈な薬香でもなお消せない、生臭い、血肉が放つ腐臭。
空気は凍りつき、僅かな動きもない。

磨き上げられた夜黒石の、巨大な水槽の深さは、大柄な男の肩ほどまである。
正方形の外形に反し、内側は円形に刳られ、赤黒い液体が満々としている。
平らな水面の中央、最も黒く、深く沈んで映る部分に、碗を伏せたような物体がぽかりと浮かぶ。
その中央に、一対の深紅が光る。
水槽の主の眼。　底光りをし、死獣の赤の眼より強い光を放つ。
赤という色と相反する、凍えた印象を与える。　邪眼、と呼ぶに相応しい禍々しさがある。　瞬くことない眼は時折、液体の中に消える。

『――きた……アレ……私を、この、憎き……の者……』

低く、擦れがちな男の声。　病を得た者と同じく、腹の底からの出すことが出来ていない言葉は、それでも、他を威圧する力を感じさせる。　言葉と言葉の間には、喘ぐような、荒い呼吸が入る。
水槽を満たす液体が、言葉の起こした波によって小波(さざなみ)立ち、ぬるぬると、水槽の縁を伝い床に広がる。
オリ＝オナは、靴先に広がってきた赤黒い液体――聖獣より集め

た血を避けるよう、僅かに後方へ下がると、水槽の主へ視線を向け、闇より黒い瞳を細める。

「お怒りを静められよ。　傷付いた御身に障りましょうぞ。　新しき〈器〉の準備は、まだ整うておりませぬ。　いま少し、その〈器〉で堪えてもらわねば、我等も手の打ちがようがない」

オリ＝オナは、長い白髯を右手で梳きながら、水槽の主へ視線を向け、中指には、オスティルの幽かな金光がある。

「我らが〈聖なる御子〉。　〈新しき主〉、正しき〈神〉となられる御方を、苦しめ続けたかのエラノールに関する伝えは、あまりに少ない。　長く、精霊王殿に仕えた大巫子ですら、表面的なことしか知らぬという。　知れていることは、不変であり、その〈器〉に、神エランの血が流れていること。　その秘めたる力は、未知――」

オリ＝オナの言葉を遮るように、水槽の主――〈闇森の主〉とカラが呼ぶ、ウルドが唸りを上げる。　床に多量の液体が零れ出、オリ＝オナの靴と裾に染みを作る。　飛沫が付着した箇所から、ジュウと、微煙が上がる。

オリ＝オナは僅かに眉を顰（ひそ）め、その後のウルドの反応を待った。

『アレ……連……来い――。　あれは、私……モノ、わた……け、して――』

肉のすっかり削げた、枯れ木のようなウルドの半身が、水面上に現れた。　肩から先に有るはずの腕は、左右共に失われている。

骸骨に等しいその顔面に、激しい赤が燃える。

＊＊＊

ラスターの手に現れた青の炎は、次第に大きく広がり、荒々しいうねりを見せ始める。

「オリ＝オナは、〈器〉となる娘と共にあるは子供と言った。　恐らくは、闇を見透かす眼を持ち、貴方とも縁がある、と。　貴方の、オスティルの短剣を所持している可能性がある、とも。　まさか……」

キサの声は震え、瞳は揺らいでいるように見える。

ラスターの瞳の青に、深みが増す。

「――思い当たったと見得る。　そうだ。　そなたが盗み出した宝のひとつ。　石の殻に護られ、生涯、精霊王殿深くでまどろみ続けたはずの存在（もの）。　いま、この地下に在るは、一時そなたが手で育てた一方。　あの者の両親が残した《名》の護符（ペンダント）を渡し、第一の《名》を教えたは、そなたであろう？」

一筋の涙が、キサの頬を伝う。

「本当に、あの子が――？」

言葉が途切れた。　口元に手が添えられる。

唇も手も、明らかに震えている。　口は、何かを言いたげだった。

だが、幾度開け閉めしても言葉は出ない。　口にすべき言葉が思い出せない、といった様だった。

「――存在は、記憶に在っても、《名》は、思い出せぬか？　完成していないというに、？あれ？の呪いも、大したものだ」

「あの方の――〈御方〉の選んだ〈適合者〉……喰らい損ねた者が、あの子……」

強張ったキサの表情を目にし、ラスターは薄い笑みを浮べる。

「オスティルを渡した、ということは、現在は貴方が、あの子を保護し……監視している、と――？」

「あの者を監視するは私の職責（つとめ）。　なんら、不思議あるまい。　そしてあれが、あの者を〈適合者〉として選んだことも、また自然。　あの者は、かの娘より〈器〉に相応しい。　そなたとて、それを見越して、精霊王殿より盗み出したのであろう？　そなたが慕った者の、新しき〈器〉と成すために――」

平坦なラスターの言葉に、キサの眦（まなじり）があがる。

「だが、共に在る内に情が移ったと見得る。　あの者を南方の寺院にひとり残し、そなたのみ姿を隠したは、迷いを感じたゆえか――」

しばらくの間、キサは拳を握り唇を震わせていたが、それらから逃れるように大きく息を吐き出すと、右腕を水平に上げ、緩慢に、後方へと払った。

「お前達は大神官へ報せよ。　そして一刻も早く、この地下より皆を退避させよ」

背後で、動くに動けずにいた剣士達へ、キサは振り返らずに言葉を投げる。　剣士達はざわめき、一人、また一人と駆け出す。　退避の波は瞬く間に広がり、僅かの間に、残らずがその場を離れた。

「――よい、配慮だ」

「わたくしは、無用の死は望まない。　トマ、という修道士に〈聖血〉を与え、詞で操り、己が眼とし、口とした貴方とは、違う」

笑みを消し、ラスターは目を僅かに細めた。

キサは静かに、長く息を吐き出すと、毅然と見詰め直し、口を開く。

「？深紅の美酒、月光の杯を盈(み)たし、緑風の歌、嬰児(みどりご)の頬に紅(くれない)を注す――？　古い詩の引用。　わたくしの記憶に誤りがなければ、？酒？は〈聖血〉、？杯？は〈聖血の器(エラノール)〉をさす。　それを、貴方が、口にされたと聞きましたゆえ、その真意を尋ねたく思いまして。――我等に？杯？を用意せよ、と言われたとか。　それは、如何な解釈をすれば宜しいか？」

ラスターの青の瞳が、更に細められる。

「欺瞞(ぎまん)――か？」

口元に、再び薄い笑みが浮かぶ。

「そなたは、それを知っている。　ゆえに、同じ地下に在るあの者のもとへ行かず、逃れ続けていた私の前に、姿を現した」

キサの反応を見るように、一拍の間をとる。

「あれ、の状態は、悪いのであろう？　私が落とした両腕。　その傷、聖獣の血程度では癒せぬであろう？　傷口が腐り、残る身を侵し、あれの力を、削ぎ続けておるのであろう？　一刻も早く、よ

り相応しい〈器〉に、移したいという焦燥、あるであろう――？」

畳み掛けるように、ラスターは言葉を続ける。

「そこへ、何者よりも最適な、あれ自身が選んだ〈器〉が現われた。だが、そなたはあの者を避けようとしている。　否、明らかに避けている。　それは何故か？　あの者を再び目にすれば、かつて己が下した決断に、揺らぎが生ずる懼(おそ)れゆえか？」

青白の炎は火勢を増し、うねる大蛇のように空間をのたうち、周囲の岩壁をも焼き始める。　焼かれた岩の表面はひび割れ、部分的にボロリと剥離し始める。

キサは指を口に咥え、傷を付けた。

赤い血が滴る。　キサはその血で、額に滴様の紋様を描くと、左掌に弓、右掌に矢の紋様を描く。　両の手が、紅い光を帯びる。

手にはない弓を握り、緩やかに、キサは不可視の矢をつがえ、ラスターに狙いを定める。

「わたくしの心を、貴方に語られたくはない。　――が、わたくし自らが語りましょう。　そう、わたくしは、満足している」

弓を更に引き絞る動作。　そして、柔らかに、誇らしげにキサは微笑む。

「貴方が、わたくしを追う目的のひとつには、盗み出されし宝の奪還があった。　宝を、原状のまま回収すること――。　だが、貴方はその目的を達する事は出来なかった。　貴方と諸精霊の王が、代々のティルナ王が、長(とこ)しえに封じると定めた子は、貴方がたの呪縛から解かれ、一個の人間として、生まれ、自由を得た。　如何な貴方とて、もう、どうすることもできますまい？　割れた卵は、元の

殻には戻せませぬからな」

暗く湿った笑い声を、キサは口から漏らす。

「あの子のことは――現在は、よい。　わたくしは、貴方を迎えに来たのです。　貴方のいう？酒？を、頂きたく思うゆえ。　？杯？は――あの鏡の巫子の娘で、当座は十分でありましょう。　アラスター＝リージェス＝シン＝エラノール。　第一のエラン・シーラの〈聖血〉と〈力〉を移譲されたという貴方の〈力〉を御顕示頂きたい。　望まれるならば、いくらでもこの白頭を下げ、膝を折りましょう。　我等が悲願の成就に、御助力を――」

唇を僅かに動かすこともなく、ラスターは冷めた青でキサを見据える。　その様をしばし伺っていたキサは、諦めの笑いを漏らす。

「やはり、請うても無駄、ということ――。　貴方が、わたくしを捜す理由。　精霊王殿を裏切り、〈正神聖教（シン・エルナイ）〉に身を投じたを誅するためではない。　ただ、わたくしの中にある〈聖血〉を、回収するがため。　そして我等は、〈御方〉の復活を望む。　その為、貴方が持つものを得たいがだけ。　――お互いの目的は明快。　そう、思われぬか？」

ラスターに狙いを定めたまま、キサは憂いの晴れたような、穏やかな笑みを浮べる。　ラスターもそれに応えるように、口の端を上げ、瞳を細める。

青白の炎が渦を巻き、空間を白く照らし輝かす。

「そう――。　至って単純なこと」

キサが第一矢を放つ。　実体のない矢は赤光の尾を引き、ラスタ

ーの右頬を薄く切り裂いた後、青白の炎に喰われる。
白い頬に、赤い血が伝う。　ラスターは手の甲で頬の血を拭う。
拭われた頬は、何事もなかったように、白く滑らかなまま。　しかし、拭った甲には赤の血が塗られている。
白に浮かぶ赤血を、しばし瞳に映した後、ラスターはそれを舐める。　それまでにない鮮やかな笑みが、ラスターの顔を彩る。

「――キサ。　問いたいことがある」

ラスターは表情を消し、キサを見据える。
炎の輝きに照らされた青の瞳と、キサの灰の瞳が交差する。

「〈正神聖教（シン・エルナイ）〉の〈総帥〉、〈狩り人〉の長ではない、そなた――キルセ・エーレ＝サニア、の望みは何か？　そなたが求めるは、そなたが慕いし〈あの者〉の――死者の復活か？　魂の永遠か？　生きていた時の〈あの者〉の、全てをそのままに取り戻す――いずれを、真に、望んでいる？」

「――問いの意味が、解りませぬ」

キサは第二の矢をつがえ、ラスターの眉間に的を定める。

「〈器〉を替えたところでそれは、そなたが再会を願う〈あの者〉とは違う。　〈器〉とされる者の内に、あれ、の中身が移るだけ」

「――〈器〉と定めたあの娘は、あくまで仮の身体。　だが、貴方の助力を得られれば、あの方の傷付いた身体を、元の姿に戻すも、また、あの方と同じ〈器〉を、新たに作り出すことも可能と、伝え聞いておりまする」

矢を引き絞るキサの言葉に、ラスターは笑いを漏らす。

「エランが、その〈血〉と〈息吹〉で新たな〈器〉、そして――生命を作り出せるという伝えを、信じるは自由。　私は、それを否定はせぬ。　事実、私はそうして作られた存在(もの)ゆえ」

己の身体を示し、ゆったりと語る言葉に抑揚はなく、微笑すら浮かぶ顔に反し、まったく表情がない。

「よしんば――見た目だけ同じ〈器〉を、作れたとしよう。　そなたの求める〈あの者〉を、全く同じに、作れるとしよう。　だが、外形だけ整えたところで、それに、何の意味がある？」

一呼吸おき、ラスターはキサの眼を見据えたまま言葉を継ぐ。

「生者は死者になるが、死者は生者にならぬ。　〈器〉の、その者が過ごしたであろう〈時間〉は、例え何者であれ、作り出せぬ」

「何を、言われたい――」

気色ばんだキサに、青白の炎が鞭のように唸り襲い掛かる。　黒の衣の裾が、炎に喰いちぎられ、蒸発するように消える。

「言葉のまま。　――そう。　そなたがあの者を盗み出し解き放ったは、我らが誤算」

キサは第二・第三の矢を続けざまに放った。　だが何れの矢も、青白の炎に巻き取るように吸い込まれ、ラスターへは届かない。新たな矢をつがえようとするキサの周囲に、四本の炎柱が噴き出す。

「だが現在(いま)はむしろ、そなたの行為に感謝しよう。　そなたがあの者を手放した後、私は、あの者を探し出すを第一とした。　そして見出し、ずっと見ていた。　あの者とあれが引き合うは、十二分に考えられたゆえ」

キサの灰色の瞳が見開かれ、唇が小刻みに震える。　周囲を囲む青白の炎に照らされた顔の強張りが、言葉にならない怒りをラスターに伝える。　それを見てもなお、ラスターは変わらぬ平坦な言葉を続ける。

「あの者は宝石の原石も同じ。　磨かれねば、余程の者でない限りその本質は見抜けぬ。　だが、あの者の放つ輝き、芳香に、あれが気付かぬはずはない。　あれを完全に収め得る〈器〉は、ざらにあるものではないゆえ。　〈器〉を移るは、死と隣り合わせの行為。　己に見合わぬ〈器〉を選べば、己自身を引き裂くに等しい。　新しき〈器〉に納めきれぬ己を、己自身が見殺す。　それは結果、己を弱め、真の死に近付ける。　ゆえに、あれは己に相応しい〈適合者〉を、歳月を費やし、居所を移しつつ求めた。　我等に捕らわれる危険を冒してもなお、大陸中に散在する〈闇を抱く地〉を往来し続けてな。　レーゲスタは広い。　広範に渡るあれの行動を追うは、私とて、易(やす)くなかった」

炎柱に囲まれたキサは、怒りをいよいよ露わにしていく。

「――非情な……。　あの子の存在を早くに認知しながら、放置し、〈御方〉を誘き出す餌にしたと？　貴方の、朋友(とも)である方の子を、危険に曝して――」

「笑止」

鋭く発せられた制止の言葉に合わせ、炎が一段輝きを増す。

「最初にそれを可能にしたは、そなた」

「わたくしは、そのような――」

激昂するキサの言葉を、ラスターは無視するように続ける。

「そなたの内に在る〈聖血〉が、いずれ私を、そなたの元へ導く可能性、そなたは知っていた。　己の居所を知られれば、あの者の所在も知られ、捕らわれるやもしれぬ。　捕らわれれば、あの者に如何な処分下されるか知れぬ。　ゆえに、あの者から離れた。　数年でも、我等があの者に辿り着く時間を遅らせたいがため。

――しかし、不安があった。　あの者の存在を知れば、〈正神聖教（シン・エルナイ）〉が動く。　エランに替わる〈新しき主〉を創るため、最適の〈器〉を求め続けている〈聖教〉。　中身となるあれを、私と同じく追い求めていた〈聖教〉が、あの者の存在を知れば、〈器〉にしようとするは明らか。　そこでそなたは、身を投じた。　〈聖教〉が、あの者へ目を向けぬよう、他の道へと導くため――」

噛んだ唇から、キサは血を流していた。　その口から言葉は出ない。　炎が生み出す音と、乾いたラスターの声だけが響く。

「私は、そなたが作り出した新たな流れを使ったまで。　ましてや？あれ？は、私の朋友であった者の〈器〉の成れの果て。　現在あの〈器〉に宿るは、〈あの者〉では、ない」

「あの方の魂の一つは、あの〈器〉に未だ宿っている。　あの方は、あの方であることに違いは――」

短く哂(わら)うと、ラスターは左手を前方にゆるりと上げる。　炎柱が、更に白く輝く。

「魂の一つ？　それは〈三魂〉のことか？　過去・現在・未来の魂。？〈三魂〉がひとつの〈器〉に宿り、ひとつの存在を成す――？。その存在を信じるも、如何に解釈するも自由。　そなたがあれを何者と看(みな)做し、どのように信じるかも、また同じ」

炎に囲まれたキサの表面から、幾筋もの蒸気が上がる。　それでもなお、キサは眼差し険しく、弓を引き絞る。

「だが、〈あの者〉への執着から、あの者を――カストラーンを巻き込んだは、そなたの罪。
――キルセ・エーレ＝サニア」

深く、響きある声で、ラスターはキサの欠けることない《名》を言い放つ。　キサの身体が、ぐらりと、大きく揺れる。　ラスターを激しく睨み据えていた眼が、とろりと落ちる。

「カストラーン。　カラ――。　そう、カラ。　小さな、強がりの……」

ラスターの口から出た《名》を呟き、キサは涙を流した。　束の間微笑み、直ぐに怒りの顔に替わる。
最後の力を振り絞り、萎えかけた足に力を入れると、キサはラスターを再び睨み、喘ぐように数回、口を開閉した。
最後の矢が、放たれる。

「エーレ――？自由(エーレ)？など、何故、わたくしに授けられた」

矢と共に、キサの口から放たれた言葉は、悲鳴に近かった。
実体を持たぬ赤矢が、青白の炎の触手を逃れ、ラスターの眉間へ一直線に飛ぶ。
それは、そのまま眉間に吸い込まれるかに思われた。

『愚かなり――』

無機質な男の声が、刹那の静寂を裂く。
同時、キサを囲んだ炎柱が膨張し、キサを巻き込み、一本の巨大な柱となる。
額の中央が、月光の輝きを帯びる。　キサの内に流れていた〈聖血〉が、ラスターの体内に還った証。　それは同時に、〈聖血〉を与えられていた存在の死を意味した。

「――貴方が、表に出る必要はない。　北の〈火の王〉、炎帝サーラム」

白い炎柱の中心にある、僅かに目視出来る影を映しながら、ラスターは呟くように言葉を口にした。
緩慢に右手を横へ払う。　膜のように自分を包んでいた青白の炎が、ラスターの前に集まり、人様の形を取り始める。

『そなたが身は、そなたのものではない。　我等〈火〉の所有であり、〈水〉であり〈風〉であり〈地〉である。　それを、失念したわけではあるまい』

ラスターは無表情のまま、眼前に現れた火の精霊――北の〈火の王〉である炎帝（サーラム）を見た。
その生み出す炎と同じ青白の眼で、ラスターを見下ろす長身は、触れる物を切り裂く刃のように、鋭利。

「――失念など、せぬ」

『望みは永劫叶わぬ。　そなたはそなたの意味を知り、それを忘れてはならぬ。　そなたが、そなたを知る限り、我は、そなたを害しはせぬ――』

炎帝は、言葉と共に姿を消す。　キサを飲み込んだ炎は、幾分小さくなっている。

空間は青白の炎が生み出す光で満ち、その場にある全てを、容易に映すことが出来た。

しかし、瞳に映るものは無意味だった。

キサの最期の言葉が、耳朶を打ち続ける。

瞼を閉じると、刺青の光る拳を握った。

「私は――私の役割を果たす」

瞳を開け、ラスターは炎の踊る床を歩み始める。

＊＊＊

身体を突き抜けた痛みは、《名》をいま一度口にすると、すぅと、嘘のように引いた。

「ナジャっ。　こっち、こっちにまたヘンなのが出たっ！」

カラは右方を示しながら、蜥蜴（とかげ）に与えた《名》を口にした。

『いちいちワシに頼らんと、自分でも倒してみんか、この怠慢小僧が』

悪態を吐くナジャの額には、新たな眼が生じている。　ガーランの額にあったものと同じ、第三の眼。
隻眼の、右の眼を細めると、ナジャは紅蓮の炎を吐き出す。　火矢は床から湧き出した死魔獣の頭を貫く。　紅い炎柱が立ち上がる。
『どうせならもう少し、美味そうなのでも出てこんかの。　腹が空きすぎて力が出ぬわ。　いっそ、お前の血をもう少し飲むか』
「じょ、冗談じゃないよっ。　帰ったらなんか食べさせるから、今は頑張ってよっ」
カラとて、ナジャに頼ってばかりいるわけではない。　二・三頭の魔獣は自力で倒した。
もっとも、その間にナジャは十頭以上を焼き払ってくれたのだが。
岩牢の並ぶ空間は、ナジャが吐き出す炎のため、異様に蒸し暑くなっている。　熱で、牢内の獣達が垂れ流した糞尿が蒸され、空気自体が汚物のように臭う。　ただ呼吸することすら、躊躇(ためら)いと苦痛を覚える。
ギィンと、剣が噛み合う音が背後で上がる。
七回八回、激しく打ち合う音が続いた後、何かが床に崩れ落ちる鈍い音がカラの耳に届く。
思わず、振り返った。
「――っ……」
レセルが、腹を貫かれていた。
何処から湧き出したのか、先程カラも対峙(たいじ)したコーテスールという魔獣の、剣のような尾がレセルを背後から貫いていた。　それで

もレセルの手の剣は握られたまま、打ち合っていたアルフィナの細い剣を受け止めている。
コーテスールは、ゆっくりとレセルから尾を引き抜き、頭上で血に濡れた尾を幾度か振った。
膝を付いたレセルの下に、血だまりが出来る。　みるみる、それは広がっていく。
それでも、レセルは剣を杖代わりに立ち上がったが、多量に吐血した。　離れていても、呼吸の荒いことが判る。
目の前の男――セナの話が真実ならば、アルの父親だというレセルの惨状を目の当たりにしても、アルの黒の瞳に感情は戻らない。
どころか、レセルへ更に剣を突き立てようとしている。
レセルの背後の魔獣も、再び尾を振り被る。

「う、うわあぁああ――っ」

カラは、野牛のような魔獣に飛掛かろうと踏み出す。
その脇を、紅い火矢が閃光の如く抜けた。
カラの短剣が魔獣に突き立つより早く、魔獣の身体が炎に包まれる。

『お前、まったく学習せん阿呆者よな。　あれは全身が毒だと教えたであろうが』

ナジャは背後の魔獣を全て焼き尽くしたのか、カラの肩に素早く上って鼻息を吐く。
ナジャの悪態に応じている余裕はなかった。
アルフィナの剣を、レセルの代わりに受ける。　小柄な少女の打ち下ろした剣とは思えない、ズン、とした重さ。
片手では受けられた。　だが、それ以上、どちらへ動かすことも出来ない。　抑えた腕力を解放し、アルを以前の事故のように弾き

飛ばすことが、怖い。

「ナジャ、重いから下りて――その人を護ってっ」

『それは、お前の命令か？』

「め、命令？　何それ？」

『お前とワシの契約、もう忘れたか？』

呆れたように、ナジャは大きな鼻息を吐く。

「あー……そ、そうだよ、命令だよっ」

凄まじいアルの力に堪えながら、カラは叫んだ。　ナジャは、ふん、と鼻息をひとつ吐くと、ししと笑う。

『――よかろう。　したが、これは特別奉仕。　肉は倍、喰わせてもらうで決まりだな』

ナジャはするりと肩から下りると、傷を負ったレセルの肩に上ったようだった。

アルの遥か後方で、操骸師（そうがいし）のセナが腕を組み、薄笑いを浮べている。　カラと同じ金の瞳が、三日月のように細くなっている。

奥歯がギリと音を立てる。

――許さない、あの男――。

怒りで滲み掛けた涙を無視して、カラはアルフィナの黒の瞳を真っ直ぐに見た。

「アル、アルっ。　お願いだから元に戻ってよっ。　この人はお父さんなんだろう？　そんな顔のアルは、変だよ。　帰れって、言ったじゃないか、オレに、イリスさんのいるあの家に無事に帰れって、約束させたじゃないかっ。　それはアルも一緒だよ、アルも一緒じゃないと、嫌だよっ」

カラの叫びに呼応するように、柄先のオスティルと、胸元から金光が溢れた。
それらの光に、アルフィナは怯え、呻きを漏らす。　剣を落とし、白銀の頭を抱え込む。
異変を知ったセナが、左手を動かそうとする。

『させはしないよ――』

突然、低い女の声が空間を震わせた。
グラリと、足下の石床が波打つように揺れ、地下を満たす淀んだ空気が、清んだ、心地よいものへと変化する。

「――精霊、〈地の王〉……か」

セナの口から、擦れた言葉と呻きが漏れる。　アルフィナに注いでいた視線をカラは上げた。

「な、何っ――」

灰色の、セナの骸骨のような身体に、黒くうねる波が巻きついている。　ギリギリと、身体を締め付け軋ませていることが、セナの歪んだ表情から伺える。
黒い波は、セナの足下から湧き出すように生え出している。

その少しはなれた場に、白い衣に身を包んだ、褐色の肌の女が立っていた。
彫り深い顔貌の、その瞳は燃える緋に輝いている。　瞳だけではない。　全身が、強い白光を放っている。

「――こ、今度はいったい、何……」

何が何だか分からず、カラの声は震えた。
操骸師や魔獣などとは全く異なる存在。　それ以上の、圧倒的な存在だと、訳もなく思った。　だけど、それが何だか判らない。
再び大きく地が揺れる。　アルフィナが揺れに合わせ倒れ、カラもまた転びそうになる。

「――おっと、危ない危ない」

何者かがカラの腕を掴み、崩れかけた体勢を、ゆっくりと立て直させる。　しっかり立ってからもなお、腕に添えられる安定感のある大きな手は、温かかった。

「すまないね。　しばらくこの状態が続くけれど、安心していいよ。
彼女は血の気の多い〈地〉の精霊。　君の敵ではないから」

それまでの緊張感を解すような、穏やかでのんびりとした声がカラに向けられた。
見上げると、見知らぬ男の顔があった。
褐色の肌に土色の瞳。　ボサボサの黒髪を掻きながら、男はカラに微笑む。

「ようやく会えた。　ここまでよく、頑張ったね」

「――だ……だれ？」

頭から手を離すと、男は親しげに、その手をカラへ向かい差し伸べた。

「私は、ナハ＝ラスクス。　始めまして、？カラ？」

＞ｉ６４１７｜２４０＜

１１：約束（後書き）

次回、三章最終話〈１２：目覚め〉に続きます。

１２：目覚め

１２：　目覚め

いま自分は、眼を開けている。
けれど、起きているのか、夢を見ているのかが、判らない。
眼にしている光景が、現実に、自分が見ているものなのか、
夢の中で、漂うように見ているものなのか――。

「――オレのこと、知ってるの？」

満面の笑みで、手を差し伸べるナハという男に、カラもおずおずと手を伸ばした。　初対面にも関わらず、緊張や警戒心を全く抱かせない。　カラには、初めての経験だった。
ナハの褐色の大きな手が、カラの小さな白い手を包み込むように握る。　やはり、温かい。

「うーん。　知っている、という程ではないけれど、君のことはアラスター殿から聞いていてね。　あと、イリスからも少し。　君とアルフィナの仲の良さについて、とか」

楽しい事を思い出したように、ナハは眼を細める。　嫌味のない、素直な笑顔だった。

「アラスターって、ラスター？　イリスさんも知ってるんですか？
えっと――ナ、ハ……さん？」

「ナハ、でいいよ。　まあ、相互理解はここを出てからゆっくりす

ることにして、差し当たって今は――」

カラの頭をくしゃと撫でると、ナハは、カラの胸元で淡い光を放つ貴石に視線を落とす。

「その〈映月石（ユーシュ）〉は、アルが持っていたものだね？　ちょっと、私に貸してもらえるかな」

カラは思いだしたように、銀細工のペンダントに手をやると、首から外し、ナハの手にそっと乗せた。

アルから渡された時には光っていなかった貴石（いし）は、オスティルよりは弱いものの、月の光のような、丸い輝きを放っている。

ナハはユーシュに左手をかざすと、瞳を閉じ、耳慣れない言葉を低く呟いた。

ユーシュは一瞬、白く燃え上がるように輝き、そして再び優しい月の光に戻る。

土色の瞳を開け、ナハは満足げに頷く。

「これを、アルの首に戻すことを、カラ、君に頼んでいいかな？閉ざされた扉の、奥深くに眠らされているアルが、驚いて目を覚ますくらい大きな声で呼びかけながら、ね」

ナハはカラの手にユーシュを戻しながら、視線で、頭を抱え床に蹲（うずくま）っているアルを示す。

「これを戻したら、呼んだら、アルは元に戻るの？」

「可能性は高いけれど、成功するかどうかは、君にかかっている――かな？　アルは現在、あの偏執狂（操骸師）の術で、とても、とても深い眠りに着かされているんだ。　君の姿も声も、君の知る〈アル〉には

全く届いていない。　今動いているアルは、外見はアルだけれど、中身は別人。　別人がアルの身体を、自由勝手に操っているんだ。
　さしずめ、留守宅に忍び込んだ空き巣が、家人の不在を良いことに、家人のふりをして、好き勝手している様なものかな？　――外側から密閉された寝室で、深く眠っているアルの身体（いえ）に、？空き巣？の魔物が入り、アルの持ち物――身体を、好き勝手に使っている。
　昏々と眠り続けるアルは、それに気付けない。　起きて、寝室から出ない限り、ね」

「空き巣って、グール？　グリオルス・ルーンス、ってやつ？」

　少し下がり気味の眼を大きくし、ナハはカラを見た。

「よく知っていたね？　そう、大した力は無いけれど、凶暴でしつこい、嫌らしい魔物だ。　オスティルの光にだいぶ参っているみたいだけれど、まだアルの身体にしがみ付いて離れていない。　アルの身体を使い、まだ抵抗するだろう。　正直、危険も伴う頼みだけれど、できるかい？」

　穏やかなナハの顔を見上げ、カラは即座に肯首する。　不思議な程に迷いはない。
　真っ直ぐ見上げる金の瞳に、ナハは破顔し、カラの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「いい瞳だ。　その君の思いが、アルに届くかどうかが勝負だ。
ユーシュは、閉ざされた扉を開け、アルが眠る闇間に光を射す。
けれど、それだけでは呼び戻す事は出来ない。　ユーシュの光を届け、アルの瞼を開かせ、元いた世界へ援け導く者。　それがカラ、君だ。　そうだな――さしずめ、魔物に囲まれた城の、奥深くで眠るお姫様を救い出す騎士、といったところだね。　重要な役目だよ」

切迫した状況のはずだが、ナハの落ち着きある声と、どこかのんびりした穏やかな笑顔が、カラに安心と力を与える。
ユーシュを握り締めると、カラはオスティルの短剣を腰帯に吊るしていた鞘に戻す。
剣で、アルフィナを傷付けはしない。　自分の思いで、アルを呼び戻してみせる。　そう、決意した。
だが、行動に出ようと顔を上げた途端、灰色の物体が視界に落ちてくる。
投げ捨てられるように、ドサリと落ちて来たそれは、操骸師（そうがいし）セナの骸骨のような身体。
見開かれた瞳に、金の色はない。　どころか、眼球自体がなかった。

『ちっ、こやつ〈器〉を捨てて逃げおった。　小癪（こしゃく）にも、近くに次の〈器〉を置いていたと見得る。　ナハ、準備をおし。　こやつ去り際に、残りの死獣共を集結させおった』

女の、怒気に満ちた声が飛ばされる。
突然、ズゥンと突き上げるような振動が足下から襲い、続いて、不気味な地鳴りが、岩岩の間から滲み出してくる。
慌てて周囲を見ると、赤い眼の死獣・死魔獣が、石壁や床からズルズルと、次々に這い出して来る。　これまで倒した数の、軽く倍以上はいる。

「次の〈器〉を準備済みとは、相変わらず周到で、逃げの上手い奴だな。　そうまでして、生きたいのかねえ――。　しかも、この数。
せめて、見て楽しめる姿ならまだいいが、見た目も臭いも最悪だ。
こういった存在とは、あまり長く一緒の空間に居ないほうがいい。
それに、こいつらがいたら、君の任務の妨げにもなるね。　おま

けに、せっかくの清めが台無しだ」

ナハは、ほんの一瞬笑顔を消し、「ふむ」と唸った。

「カナル。　あいつに逃げられたのは腹立たしいところだけど、追うのは後回しにして、この地下が崩れないように、しっかり支えていて貰えるかい？　皆が一緒に潰れてしまっては、元も子もない」

いつの間にか、ナハのすぐ脇に現われたカナルという女は、切れ長の緋色の瞳でナハを睨む。　長い黒髪が、意思を持つようにうねっている。

『この広さを、あたし一人で支えろとは、簡単に言うじゃあないか？　まあ、いい。　だが、〈半刻〉で終わらせなけりゃあ見限るぞ。　キリキリやっちまいな。　岩牢の中の獣共は、護ってやる。　お前はまず、そっちに集中しな』

壁や床からは、ナハと、カナルが話している間にも、死魔獣が湧き出している。

カラに一番近い、巨大な双頭の死狼が咆哮を上げ、虚ろな赤の眼でカラを見捉える。　背後に連なる死獣達も、猛り狂ったような声を上げる。　幾重にも重なる獣達の咆哮は、周囲の岩陰を振動させ、岩牢の中の、生きた獣達の恐怖を煽り、空気を緊張させていく。

音の大渦に、地下は飲み込まれる。

空気が、生死を問わぬ獣達の叫びでビリビリと揺れ、先程までの清らかで心地よい空気が、再び濁り淀んでいくかに感じられた。

ふいにナハは膝を折り、地に手を触れ、三つの詞を口にした。

それから、手近に落ちていた子供の拳ほどある石塊を握り立ち上がると、顔の高さまで持ち上げ、ゆっくりと指を解く。

開かれた、掌の上に見えるはずの石塊は、砕け、砂のように細か

く崩れている。
ナハは左手をカラに伸ばし、自分の傍に寄せる。
「私に掴まって、しっかり足を踏ん張っておいてくれるかい？　そこの男は、肩の黄色い方が、護ってくれるのだろう？」
背後で、膝を付きこちらを見ていたレセルとナジャに、ナハは肩越しに言葉を投げた。
ナジャは小さな火矢を吐く。　それを見て、「安心だね」と、ナハは眼を細める。
その僅かなやり取りの間にも、死魔獣はカラとナハを取り囲み、未だ蹲っているアルの周囲には死獣が集おうとしている。
「アル――」
駆け出しそうになったカラを、ナハはやんわりと腕を掴み押さえる。
「大丈夫だよ。　今のアルは、死獣にとっては魅力がない。　幸か不幸か、入れられたグールのお陰で、同属のような存在になっているから、襲われるのは私達の後だよ。　あの操骸師が、そう命じているだろうしね。　だから安心して、しっかり掴まって」
笑顔で指示され、カラは再びナハの外套を握り、ナハに寄り添うように立ったが、やはりアルが気になり、そわそわと落ち着かない。
そんなカラを励ますように、ナハはカラの頭をくしゃと撫でた。
「まあここは私と、私の相方のカナルを信じて、任せてくれるかい。
時間が無いから、一気に片付ける。　カナル、後方の奴等は君に任せるよ。　奴を逃がした怒りを、存分にぶつけていいから」

『この期に及んで手抜きかい？　ったく、こやつ等はそも、あたしの相手ではないだろうが。　――まあ、いい。　承知した』

カナルの口元に、不敵な笑みが浮かぶ。

相方の笑顔を見てナハも微笑んだが、視線を眼前の死魔獣に戻すや、それまでの笑顔をすっと消し、険しい眼差しとなる。

それまでの柔らかな印象は、欠片もない。

「〈地〉は、全ての生命の護り。　〈地〉に、僅かの関わりも持たぬ存在は、ない。　それが例え聖獣であれ、闇に潜む魔獣であれ、〈地〉との関わりは断てない。　そのようなものにされる前に、あの者達を止められなかったことを、謝罪したい」

ナハは、瞼を伏せ黙祷した。

ふっと、掌の砂礫に息を吹きかけ、再び握り包み、短い詞を呟いた。　それからゆっくりと瞼を開き、取り囲む死魔獣達を一瞥する。

「〈仮魂〉とされた〈地〉の精霊、〈器〉とされた聖獣、そして魔獣。　何れの自我もなく、操られるまま、生きても、死んでもいない、曖昧な存在であることを強いられるなど、誇り高い君達には、拷問のような日々だったろう――。　死した獣達には、穏やかな眠りを。　〈仮魂〉とされた〈地〉の方々には、〈器〉などに縛られぬ自由を。　本来在るべき地へ、各々が還るための手助けを――」

一呼吸の後、カラの耳に慣れない言葉を、ナハは鋭く発した。

意味は分からない。　ただ、とても強い言葉だと、感じた。

動きは、見えなかった。

ナハが手を、水平に大きく払った事は、現在彼の手が、右後方に広げられている事で分かった。

握られていた手は開かれ、その上に載っていたはずの砂礫は、全く残っていない。
ずぅん、と重い物が倒れる音が続けざまに響く。　視線を上げると、カラ達を囲んでいた死魔獣の身体が、ぐにゃりと力を失い、巨音を伴い床に倒れていく。　不気味に輝いていた赤の眼は濁り、次第に灰に、何も映さない白濁した色へと変わっていく。
よく見ると、獣達の額には等しく小さな穴が開いている。　とても小さな、針の穴ほどのそこから、淡い緋色の光が漏れ出すように覗く。　しばらくすると、穴から丸い光の珠がふうっと舞い出し、宙を数回回転した後、闇へ溶ける様に消えていく。

「――すごい」

カラがあれほど苦労して倒した死魔獣を、ナハは一瞬で、十数頭は倒した。　しかも血を流し、苦しませることなく。
驚きの眼差しを向けるカラに、ナハは元の柔和な笑顔で応じ、ポンと頭を叩く。

「気を付けて。　揺れるよ、かなり」

ナハの言葉が終わらぬ内、ズズゥンと突き上げるような衝撃が足下を走る。
石床を突き破るように、黒いうねる触手が生え立ち上り、後方でまだ動いていた死獣達を絡め取る。
黒の触手に巻き取られた死獣の姿は、瞬く間に黒に飲み込まれ見えなくなる。　姿が消えると、先程と同じ光の珠が、黒い渦の中から吐き出される。
繰り返し、地が大きく揺れる。
黒の触手――恐らくは、カナルという女の髪が、カラには見えなかった死獣か死魔獣を、また捕らえたのだろう。

地が揺れる度に、地下の空気が清んでいく気がする。　まるで、振動で穢れを粉砕し、消し去っているようにカラには感じられた。
見たこともない光景に呆然となっていたカラは、足に力が入らず、幾度目かの大揺れで倒れそうになった。　ナハの手がカラの肩を押さえ、再び転倒を防いでくれる。

「カナル、もう少し控えめに願えるかな？　これでは捕らわれた獣達を開放する前に、岩牢が崩れてしまうんじゃあないか？　この子達まで、巻き添えにするつもりかい？」

カラを支えながら、ナハはカナルへ苦笑混じりの声をかける。

『あたし、を疑うのかい？　ぼさっとしてないで、お前もさっさと次の仕事にかからんか。　小童（こわっぱ）、お前もだ。　子供だからって、ぼんやりしているんじゃあないよ』

「こ、こわっぱ――？」

困惑したカラの顔を見て、ナハは肩をすくめ笑う。

「ごめんね。　彼女、口もちょっと悪くて――。　でも悪意はないから。　棘があるだけで」

確かに、怒っているような口調であるが、カナルの声に悪意は感じられない。　感じられるのは、痛快なまでの余裕。

「――さて、私はその男を診た後、岩牢の住人達を解放するから、君はアルを。　多分、まだ大きく揺れることがあるだろうから、足下には気を付けて。　それと、グールが離れたらこれを必ず、飲ませてくれるかい？　アルの身体を治すために必要な薬だ」

ナハは、小さな小瓶をカラに手渡す。
深い緑色の小瓶一杯に、黒っぽい液体が入っている。　口の中に苦味が甦る。
顔をしかめるカラの肩を、ナハは笑いながらポンと叩く。
「まあ、まずはユーシュをアルに戻す事に集中をして。　君になら出来る。　自分を信じて、諦めないこと。　アルを、頼んだよ」
もう一度、軽く肩を叩かれた。
温かな土色の眼を見返すと、カラは無言で頷き、アルへ視線を移す。
深く息を吸い込み、一歩を踏み出す。

＊

歩み出したカラの背をしばらく見守った後、ナハは背後の男と、その肩に座る暗黄色の蜥蜴（トカゲ）へ視線を移す。　蜥蜴の額に、第三の眼がある事を確認し、「ふむ」と顎に手をやる。
「カナルが正体を知れないほどの存在、は君かな？　聖獣――火を吐いたからには、火竜……のようだけれど、なんとも評し難い姿だね。　――額のその眼。　君、もしかしてカラと契約をしたのかい？」
ナジャは大欠伸をすると、フンと横を向き火の粉の混じる鼻息を吐いてみせる。
「そうなんだ。　君、随分と年季が入っていそうだ。　見え難くな

っているけれど、背の古傷も、曰(いわ)くありげだねえ。　――ふふ、見た目のままではないね、君も。　ところで、私はその男を診たいのだけれど、近付いても、問題はないかな？」

ナジャはそっぽを向いたまま、レセルの肩からするりと下り、少しはなれた場所にどかりと腰を下ろし、再び大欠伸をしてみせた。

一連の動作を見て小さく笑ったナハは、頭を掻きながらゆっくりとレセルへ近付く。

荒い呼吸をしているレセルの手には、未だ大剣が握られているが、持ち上げるだけの体力は残っていないようで、鼻先まで近付いたナハを、上目に睨むのが精一杯の様子だった。　膝をつく石床には、大きな血溜まりが出来ている。

束の間笑顔を消すと、ナハはレセルの視線を真っ直ぐに受け止めた。　上下に激しく揺れるレセルの肩に手を伸ばすと、上体をお構いなしに起こさせる。　苦痛に歪むレセルの顔などには目もくれず、どす黒く濡れた腹部の傷だけを見た。

「――よくもまだ、生きていられたもんだ。　あんた、体力があるな。　耐性も、あるようだが。　しかし、コーテスールの毒尾に貫かれて未だこの状態を保てるとは、大したものだよ」

レセルの傷の周囲を触診した後、ナハは外套の内ポケットから小さな紙包を出し、レセルの顔の前で広げる。

「飲めるか？」

多量の脂汗を滲ませながら、レセルはナハの眼を、険しい黒の瞳で睨み返す。

「――貴様……が、トルサキアのナハ＝ラスクス、か？」

ナハはおどける様に瞳を大きくした後、眼を細め、ふふ、と小さく笑った。

「私のこと、知っているんだ。　そうだな、あんたと私は似たような立場だ。　隠したところで噂は流れる。　様々な存在を介し、様々な脚色をされて、ね。　特に同類の間に流れるのは、速い」

眉間に深い皺を刻むレセルと同じ目線まで屈むと、ナハは改めてその黒の瞳を覗き込む。

「アドラのレセル＝ホーン。　直に会うのは初めて、かな？　ま、私の素性を大雑把にでも知っているなら、この薬も、安心して飲めるだろう？　これでも〈薬呪師〉として、大陸では比肩する存在なし、と称えられた一族の裔だ。　半端な薬は調合しないさ。　まあ――毒も薬も、場合によっては大差ない、けどね」

悪戯っぽく笑うと、ナハは握られたままだった大剣を地に置かせ、その手に二粒の丸薬を落すように置いた。

無表情に、掌に置かれた黒い丸薬を見詰めた後、レセルは一飲みにする。　飲み下すのに、少々苦しげな表情を見せたが、薬は確実にレセルの体内へ入った。　それを見届けたナハは満足げに微笑むと、レセルの額に右手をかざした。

「予想外に素直だなあ、助かるけど。　さて、では術に移る。　あんたの身体の時間を、一時、止めさせてもらう。　死の淵の手前まで行って貰うが、その先には行くなよ。　〈光〉と〈闇〉の境界線で留まれるかどうかは、あんたの、〈生〉への執着次第だ。　境界を越えられたら、呼び戻すのは一苦労だから、超えてくれるなよ。

アルに恨まれるのはごめんだ。　あの子は気が強い。　誰に似た

のか、知らんがね」

レセルの表情が瞬間険しくなる。　しかし、ナハの口から零れ出した詞に、レセルの瞼は次第に重くなり、視界は暗転していく。
混濁していく意識の中、ふうっと、白く淡い光が瞼の裏に広がる。
柔らかな光の中に、懐かしい声が、聞こえた――。

（それはとても素敵なことだと、思いませんか――？）

＊

「――っ、う、うわっわっ」

ナハの忠告は、正しかった。
凄まじい怒りの形相で、アルは近付いたカラに襲い掛かった。
剣を落としたままのアルは、拳でカラを打ちのめそうとしてくる。
身のこなしは、先程よりも鈍い。　それでも、次々と繰り出される拳に、カラは飛び込む隙を見出せず、避けることに精一杯だった。

――出来る、出来る、必ず、できる――

心の中で繰り返し呟く。　「まずはユーシュをアルに戻すこと」だけを考えた。
しかし、考えるだけでは事は進まない、逃げるばかりでは埒が明かない。　そう思い、カラの方から仕掛けてみても、今度はアルが、ひらりひらりとカラの拳をかわし逃げる。　長い髪と裾を翻しながら、軽やかに宙を舞う姿に、思わず眼を奪われる。
勢いあまり、空振りになったカラの拳が壁や床に当たると、そこに大穴が開き、砕けた岩があたりに飛び散る。　足下には小石が散

乱し、うっかりすると足をとられ転びそうになる。
こんな力を直にぶつけては、アルを救うどころではない。　緊張が、カラの身体を固くする。

――加減を、もっとしなくちゃ――

カラの腰元で、オスティルが輝きを放ち続けているためか、アル――というより、グールは一定の距離を保ち、カラの方から近付かれるのを嫌っていた。　視界に、オスティルの光を極力入れたくない、といった様子だ。
カラを襲い、引き裂きたいという魔物の欲望と、オスティルの光に対する怯えと嫌悪が、アルの整った顔を複雑に歪ませている。

『いっそ、その短剣を投げつけてはどうだ？　その貴石（いし）の力で、低級の魔物なぞ確実に追い出せるぞ。　当たれば、だがな』

肩で息をし、次の手を考えていたカラの背後から、暢気なしゃがれ声が響く。　言葉の後には、ししし、と例の笑いを付け加えて。

「なんで、そこにいるん、だよっ」

同じく息の乱れているアルから視線を外すことなく、肩越しに言葉を返す。

『簡単なこと。　お前の無様を観に来ただけよ』

「あの人を護ってって、オレ言ったよな」

『あの男なら、ナハとかいう男が診ると言うておったろうが。　元々、ワシはお前を護るが第一の役目よ』

「何が？護る？だよっ、笑いに来ただけのくせ。　だいたい短剣を投げつけろなんて、ふざけんなよっ」

『ワシは一案を言ったまでよ。　そも、鞘から抜いて投げろとは言うておらん。　剣を投げつけるが嫌ならば、腕力で、押さえ込む術を考えればよかろう。　如何な手段を選ぶかはお前の裁量。　だが早くせねば、小娘の身体が持ち堪えられん。　死が、近い』

ナジャの最後の言葉に、カラは思わず視線を背後へ向けた。
明るい右の眼をクルクルと動かし、ナジャは愉快そうに見ていた。
新しく出現した額の眼は、同じ緑をしているが、妙に無表情に見開かれ、カラを映している。
手が、オスティルの短剣へ伸びる

その一瞬の隙を衝かれた。

カラが視線を外した途端、アルは地を蹴った。
軽い、放たれた矢のような勢いで、カラの首へ手をかけると、あり得ない力でカラを持ち上げ、締め上げようと指に力を込める。
手に取りかけた短剣が、カチャンと落ちる。
ギリリギリリと、白い、細い指がカラの首に喰い込む。　凄まじい力。　呼吸が自由に出来ず、視界が霞む。　ガンガンと頭が痛む。
苦しい――助けて――……。　そんな言葉だけが、繰り返し浮かぶ。
首を絞めるアルの手に、自分の指を喰い込ませる。　この指を剥がしたい、剥がさなければ――死。

「――……っつ、う……うあぁあぁぁっ」

足下に落としたオスティルが、それまでにない激しい輝きを放った。　辺り一帯を染める、強く、容赦のない金棘のような光。
カラの首を締めるアルの手が、ふっと緩む。
その瞬間、カラの身体に自由が戻る。

どう、動かしたかわからない。
ただ、手を払った。　首を絞めるものを払い除けようと、ただ息をしたいと、身体が求めるままに、動いた。

ガツン、と鈍い音が耳に届く。　その音は二回――いや、二種類、前方で続けて起こった。
いつの間にか閉じていた瞳を、開けた。
視界が白い。　ぐにゃりと、全てが歪んで見える。　地が揺れているように感じる。

視界前方に、白い長衣を着た、長い髪の少女が横たわっている。
長い白銀の髪が、流れる水のように、石床に広がっている。
流れの末端から、源となる頭、そして、乱れた髪の間に見え隠れする顔へと、金の瞳でなぞった。

「――ア……ル……？」

長い睫毛の下に、薄く開かれた黒の瞳が見える。　虚ろな、光を宿さない瞳は、僅かも動くことはない。　元より白い顔は、青白く、蝋のように無機質に感じられる。　額に紅い筋が見える。　同じ紅の染みが、アルの倒れるすぐ側の壁面上にも見える。
がくがくと、膝が震える。
よろけながら、足はアルの前までカラを運んだが、止まった途端、

膝はがくりと折れ、ぺたんと冷たい石床に座り込んだ。

「――あ……アル。　アル、眼を開けてよ。　ねえ、アル、僕の声、聞こえないの？」

そっと、アルの頬に指先を当てた。

白い肌は、色のままに冷たかった。

もう一度、はっきりと白い頬に触れた。

けれど、冷たさを更に感じるだけで、言葉は返ってこない。　どんなに、待っても――。

凍えた石床が、それに触れる脚から体温を奪う。　寒さに身体が震える。　震えは全身へと伝わる。

歯が合わず、ガチガチと音を立てる。

アルの肩に手をかけ、白に包まれた身体を強く揺さぶった。　それでも反応はない。

「――……だ、嘘だよね、違うよね。　……ねえ、起きてよ。　ねえ、アル、嫌だよ、いやだ、こんなの、ねえ……起きてぇっ」

頭を振りながら、カラは叫んだ。

あの時の悪夢が甦る。

口から紅い泡を吹き、痙攣しながら死んでいった男。　名前も知らない、カラを化物と呼び、殺そうとした男。　その男の亡骸に駆け寄り、カラへ憎悪の眼差しを向けた、男達の眼。　呪詛の言葉のように、カラを「殺せ」と叫び続けた口、口、口――。

耳を覆い、蹲るように上体を屈める。

聞こえない声が、身体の中で響く。　カラを責める声が突き刺さる。　カラを憎悪する視線が、カラを切り裂く。

助けて、たすけて、タスケテ――。
同じ言葉ばかりが、頭を駆け巡る。　身体が震え、口の中がカラカラになる。

「み、た……ない、見たく、ない――やだ、嫌だ、ちがう、こんなこと、違う、僕は、こんなこと――こんなところ、嫌だ、僕は、ぼくは――こんなこんな、コンナ――」

痛い。　頭の中をかき混ぜられているかのように、思考がぐちゃぐちゃに乱れ、呼吸よりも早く打つ心臓は破裂しそうだった。
もう何も見たくない。　もう何も、聞きたくない。　何もかも、もう忘れたい――。
この闇に溶け込んで、闇に溶かし込んで、何もカモ、ナクナッテシマエバイイ――。

言葉にならない思いが、カラの中に満ちる。
満ちると共に、全てが遠退いていく。
それは、恍惚とも言える弛緩と、ふわりとした浮遊感を与える――。

ガツンと、後頭部に強烈な衝撃が走った。
二回、三回――衝撃は、続けざま加えられる。
痛みに耐えかねて、カラは思わず叫ぶ。
「――痛い、痛いじゃないかっ」
『?痛い?、ということはまだ?こちら側?に残っておったか。

正体失くしたならば、喰ってやろうと思ったが、つまらんの』

耳慣れた悪態が、カラを混乱の中から引き戻した。　頭を抱え肩越しに振り返ると、ナジャが尻尾を振りながら、済まし顔で据わっている。　口には、カラが落としたオスティルの短剣を銜えている。

明るい緑の眼が、クルクルと光る。

『しかし、本当に手間のかかる小僧だな。　これを小娘に戻すを第一にせよと、あの男は言っておっただろうが。　その頭はザルか？』

目の前に、ナジャの尻尾が突き出される。

尾の先には、繊細な銀細工の鎖が下がる。　先端には、柔らかな光を放つ貴石が揺れていた。

カラが銀の鎖を手に取ると、ナジャは口を突き出し、短剣をカラに押し付ける。

『簡単に落としおって。　二度と落すな。　何につけ、これはお前の役に立つ貴石よ』

カラは短剣を受け取ると、ボロボロの袖で目鼻を拭った。　未だに、眩しい光を放つオスティルを呆然と見た後、虚ろに開かれたままのアルの眼に視線を移す。

「――何も、出来ないよ。　オレは何も出来ない。　オレは殺すばかりで、こんな貴石を持ったって、何の、役にも立たない……。どうやって使うかも、どうやったら使えるのかも知らないのに、何の、何の役に立つって言うんだよっ」

荒げそうになる声を、必死に抑えた。

涙が滲む。　激しい無力感が、カラを苛む。

また、同じ過ちを繰り返した。　愚かな自分が望んだ末に得た大きすぎる力が、二人もの命を奪った。　しかも、自分を友達だと、家族だと言ってくれた、助けたいと思った友人まで――。

『その貴石を小娘に戻し、？名前を呼べ？と言ったあの男の言葉、忘れたか？』

「――死人がそれで、生き返るの……かよ」

『やれやれ。　トロくさいくせに、せっかちな小僧だ。　この小娘は確かに瀕死。　だが、意識は眠ったまま、まだ生死の境で留まっておる。　だが、眠った小娘を起こし、表に呼び戻さねば、確実に、間違いなく、死ぬだろうよ』

アルの顔を覗き込んだ後、ナジャの右目はカラを映し、細められる。

『何もせぬうちから諦め、投げ捨てるとは、お前は真に、見下げ果てた腰抜けよ。　小娘も憐れよな。　ようやく魔物が離れたというに、友人に見殺しにされようとは。　もっとも、お前はこの小娘を友人、とは思っておらぬか――？』

カラは無言で、横に座ったナジャを睨んだ。　悔しさと怒りで、堪えていた涙が零れる。

『後頭部に傷を負っておる。　その傷が一番大きく、危うい。　お前がいつもするように、傷に息をかけ、元に戻るよう、何事も無かった状態に戻るよう、願ってみろ』

普段のような、含み笑いのない声でナジャは言った。　その語気

の厳しさに、カラの身体はびくりとし、のろのろとだが従い動いた。
ナジャの言った通り、アルの後頭部は血に濡れ、その中心に、大きな傷がぱっくりと口を開けている。
真っ赤に染まった傷を見た瞬間、身体が強張りそうになったが、カラは深呼吸をすると、傷口に強く息を吹きかけ、両手を当て、傷のない状態に戻るよう願った。
カラが願うに合わせ、腰に戻したオスティルが金光を放つ。
暫くすると、出血は完全に止まり、傷も次第に薄く、そして終には見えなくなった。
カラは大きく息を吐き出す。
身体が重く、妙にだるい。
これほど強く、誰かの傷の治癒を願った事はない。　この作業が、これほど体力を消耗するということも、始めて感じたことだった。

『――傷が塞がったならば、次はその貴石だ。　〈映月石（ユーシュ）〉を、小娘の首に掛けろ』

ナジャに言われるまま、カラは仰向けに寝かせたアルの細い首に、繊細な銀鎖を付け、　先端のユーシュを胸元に丁寧に置いた。
優しい月の光が、アルの白い顔を照らす。
流れる涙を、止められない。

『貴石（ユーシュ）の上に手を重ね、小娘の《名》を呼べ。　声に出さぬでよい。
お前の思いを、小娘に届けよ。　深く眠る小娘を見つけ出し、起きろ、戻れ、と、伝えてみい』

促されるまま、カラはユーシュの上に両手を重ねる。　すぅと、息を深く吸った。

「――アルフィナ。　起きて。　カラだよ。　アル、起きて――」

数度、アルフィナの名前を口にした後、カラは額を両手の上に載せ、願うように、心の中でアルの名前を呼んだ。
再び、オスティルの輝きが増す。　手の下にあるユーシュも、更に白い、銀の輝きを放つ。
金と銀の光が、カラとアルを包み込む。

瞼を開いた世界は、薄暗く霞んでいた。
上にも下にも、何もないように感じる。　前後左右、ただ茫漠とした薄闇が広がっているばかりに思えた。
空気は全く動かず、かといって淀んだ感もない。　風も音も匂いも、湿気も乾燥もない。
全てを、立ちこめる靄のようなものが、吸い取っているように感じる。
自分は、ここにいる。　しかし、自分の姿は靄と同じで、曖昧ではっきりとしない。
確かに?見ている?という感覚はあるのに、自分の手も足も、はっきりと見ることは出来ない。　自分には腕がある、足がある、と思い込んでいるだけのような、なんとも不安定な感覚だった。
優しい銀色の光が、そんな曖昧な自分を護るように包んでいる。
この優しい光が、そういう模糊とした不安を、和らげてくれる気がした。
これが、ユーシュの光なのだろうと思った。
視線を上げる。
何も見えず、何も聞こえない虚ろな空間。
どうやってこんな世界に来たのか、本当に自分が、この場所に存在しているかすら、自信は持てない。　けれど、この何処かにアルがいるのだと、理由のない確信を、カラは抱いていた。

――どこにいるの？　アルフィナ、アルフィナ、応えて――

カラはアルを呼んだ。

足下も定かではない未知の世界で、カラは手探るようにアルを求め、呼び続けた。

声は、たちどころ靄に吸い込まれ、少しも響かない。　口にした傍から消えていく。

こんなことで、アルに声が届くのか、不安になる。

それでも、アルの姿が見えるまで、アルの声が聞こえるまで、幾度でも呼び続け、探し続けるしかない。

世界は、無限に広がるように感じられる。

時間は永遠のようで、どれほどの刻が過ぎたのか、まったく分からない。

何処まで行っても、どれ程呼んでも、アルフィナの姿を、声を確認することが出来ない。

焦りが募る。

進めば進むほど、呼べば呼ぶほど、不安ばかりが大きくなる。

どこまで歩んでも、変わらない眺め。

何も見出せず、何を聞くことも出来ない。　自分の発している言葉すら、音声となって響いているのか疑問な状況が延々と続く。

虚しさが、カラの中に生まれる。

こんな事をいつまでやっても、無駄なのではないか――。

そんな思いが大きくなっていく。

視線が、次第に下がる。

（――もう少し……）

ふいに、柔らかな声がカラの耳に響く。

（諦めないで。　あの子を、見つけてあげて。　あの子はあなたを、待っている――）

――だ、誰――？

見回しても、誰の姿も見えない。

感じられるものは、ユーシュの柔らかな銀の光だけ。

（信じて。　あなたには、あの子を見つけることができる。　あなただから、できるのよ――）

声は、ふわりとカラの頬に触れ消えてゆく。

消えてもなお耳に残る、優しい女性の声。　手で触れられたような、温かな感触が残る。

ユーシュの光が、より明るさを増したように感じた。　オスティルとはまた違う、優しさに満ちた柔らかな輝き。

深く息を吸い、ゆっくり吐き出すと、落しかけた視線を真っ直ぐに上げた。

――アルフィナ。　アル、何処にいるの？　帰ろう、こんな所を出て、一緒に帰ろうよ。　帰って、ガーランを探して、イリスさんが待つ家に帰ろう。　ラスターもきっと帰って来る。　皆で、帰ろう。

僕、もっと、アルと話がしたい。　もっと、もっと話して、一緒にいたいよ――だから、起きて。　声を、聞かせて。　アルフィナ――

ユーシュの光が、膨張するように広がり、カラの前方へ、集約するように一直線に伸びる。

銀光は、一点を射し照らす。

懐かしい声が、応えた――。

閉じていた瞼を開き、カラは手から額を離す。　まだ、夢現(ゆめうつつ)のようだ。

『戻ったな――』

ナジャのしゃがれ声が、ぼやけた意識を鮮明にさせた。
一度頭を振り、眼をしっかり開くと、横たわったままのアルを見詰める。
胸が、微かに上下を始める。　長い睫毛が、時折動く。　口元に耳を近づけると、弱いが、確かに息をしている。
苦しげではあるが、数回、唇が動いた。
涙が滲む。

「アル、アルっ、聞こえる？　オレの――」

ナジャの尻尾が、カラの後頭部を叩く。

『あの男に、薬を飲ませろと言われたであろうが。　あれは、小娘の内に溜まった毒を抜く薬よ。　呼び戻すだけでは、小娘の危険は完全に去ってはおらん』

ナジャの指摘に、カラは慌ててポケットに入れていた小瓶を取り出す。
小瓶の栓を抜くと、やはり、苦味に満ちた異臭が鼻を衝く。　カラが飲んだ薬酒より更に濃厚そうな、強烈な香り。

小瓶をアルの口元に運び、数滴垂らしてみる。　しかし、飲み込んではくれず、薬は口の端から零れるばかりだった。

「や、やっぱり、苦いから飲めないのかな？　どうしよう、そんなにたくさんないのに、吐き出しちゃったら意味がないよ」

おろおろするカラに、ナジャは呆れたような鼻息を吐き、一つの提案をした。

「そうか、く――……」

鸚鵡（おうむ）返しに、その提案を口にしかけた途端、カラは耳まで熱くなった。

他の方法はないかと尋ね、自分でも考えたが、それ以上の方法を考え付かず、結局、実行した。

気恥ずかしさの前に、痺れる様な苦味がカラの口に広がる。　だが、その行為は確実に目的を達した。　アルフィナの喉が、飲み下す動きを見せる。　やはり苦いのか、アルの顔も僅かに顰められる。

口内に残る刺激に耐えながら、カラはアルフィナの顔を、息を詰めるように見続けた。

数呼吸の後、瞼の下で眼が動く。

長い睫毛が数回微動し、ゆっくりと、瞼が開かれる。　大きな黒の瞳がカラを映す。

「――こ……こ？　あんた――……は」

「――……っ」

喉に詰まり、言葉は声にならなかった。

言葉の代わりに、アルの手を握り締めた。

＞i7334―240＜

１２：目覚め（後書き）

今回で、第三章『白日の月』は終わりです。
ここまで読んで下さった皆様。
本当に、ありがとうございました。

話は、第四章『往きし者　過ぎし刻』に続きます。
※９～１０月に再開予定です。
これからもまた、頼りないお子様たちや歪んだ大人を
暖かい、大らかな目で見てくださると幸せです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2892h/

新レーゲスタ創世譚　第三章　『白日の月』

2011年2月1日19時22分発行